

転生っ娘にツイてし
まった転世した俺の話。

高ノ宮 伏魔殿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある男と女の子のお話。

人助けしようとして、助けることも出来ずに自分も死んでしまった中年男。

どちらかと言うとツイてない一生…。

そんな人生を終えた男は異世界に新たな生命として誕生したが、男は見慣れた姿からかけ離れ別の意味でツイてる男になってしまった。

良ければ暇つぶしに読んでやって下さい。

筆者の知力ステータスは 2 です。なので不備・不適切な表現などあるかもしれま

せん。

広い心で読んで頂けると幸いです。

評価・ブックマ頂けると嬉しくて失禁します。

感想・レビューもお待ちしております。

宜しくお願い致します。

(*≡∩∩≡ *)
ノ

目次

序章 終わりと始まり

1 ツイてない俺の話。 | 1

2 君からハナレラレナイ。

16

3 ツタエタイ想い。 | 27

4 コノセカイ。 | 42

5 ワタシの秘密。 | 57

一章 浮遊城

6 双竜星が落ちた日。 | 70

7 来訪者は砂埃とトモニ。

79

8 ワプル村の神童Ⅱ悪魔憑きの少

女。

9 オトコの象徴。 | 112

10 メシドキには来ないで欲し

い。 | 128

11 どうしてソウナルの。

141

12 カンドウの瞬間。 | 155

13 命のオンジンはアナタ。

173

14 威厳は時に暴力とナリテ。

191

15 理不尽は罪無き者をナカセ

ル。 | 209

16 ミンナと寝ると寝付けないか
ら起きとく。 | 224

17 今度こそ寝 ムリたい。

238

18 偉いヒトの話はナガイ。

254

19 子供の成長トハ…。 | 268

20 近くで見てもワカラナイ

モノ。 | 282

21 二つのセカイ。 | 304

二章 黒ノ王

22 セカイの時差、邂逅シ。

318

23 その時、俺ハ。 | 334

24 調子に乗るとロクな事にナ

ラナイ。 | 349

25 言えなかった言葉。伝えられ

た想イ。 | 366

序章 終わりと始まり

#1 ツイてない俺の話。

人が生きていく中で、転機になるような大事件というのは突然やってくる。

それは人に限らず、動物や虫、植物：星や生命体とは呼びにくいものでも、きつとそういう風にできているのだろう。

転機は本当に突然やってくる。

それがそのモノにとって良い事だろうが悪い事だろうがお構い無しにやってくるのだ。



俺の人生には、二つの転機が訪れた。

はじめの転機は俺が生まれる前、

自分の誕生日に両親を事故で亡くしている。

母親のお腹の中に居るときに起きた事故だったらしく、亡くなった両親の親、つまり俺の祖父母からすると、*「残された希望」*として大手術のもとに取り出された赤ん坊が俺である。

*「奇跡的に無事だった赤ん坊」*は地元の新聞に小さく載ったと祖父が言っていた。

そんな普通とは違う状況で生まれた俺を、我が子以上にとても大切に育ててくれた祖父母。

「元氣ならそれで良い！」は祖父母の口癖。

好きな事を家計の許す範囲で自由にやらせてもらいながら、甘く、時に厳しく育てられてきた俺。

そんな俺も気付けばもう33歳、早いものだ。

結局、二人にひ孫を見せてやることはできなかった。

子供どころか……33歳にして彼女も居ない……。居たこともない！

寝坊した朝、街角で食パンを啜えた女の子とぶつかる事もなく今日まで生きてきたのだから、彼女が居ないのもしかたがない話だ！と誰か言ってくれ。

…クソツ、彼女欲しかった！

とにかく、物心付く前から祖父母が親として存在してくれていたもので、俺自身は事故に対しての悲しみ等は無かった。

だが、祖父母は亡くなったあの時まで、事故の時の悲しみを胸に抱いていたことは間違いないだろう。

「おめえの父さん、母さんとこさやつと行けるわあ…」と言っていた悲しくも優しい顔はとても印象深く俺の心に残っている。

祖父母の旅立ちが俺に訪れた第二の大きな転機。

とは、ならなかった。

確かに多少の不幸を気にしない俺でさえ、暫く鬱ぎ込む程とても悲しい別れだったが、

それは明確に違うと分かっている。何故か？

二度目の転機はなんの変哲もない「普通の日」の筈だった、「今日」やって来た来たのだから。

そう、今日は普通の日だったんだ……。

田舎街で大学に行かずに就職を選んだ俺は就職企業の二度の倒産を経て、今の建築会社に入社した。

そんな俺は建築現場の作業員としてこき使われるべく、今日も仕事場へと車を走らせた――

昨日、難攻不落だったゲームをクリアしたし、やる気は上々！

天気も良いな、雲一つな……ん!?

ナンダアレ？

一瞬見上げた空の端に何かが映った。

新手のパフォーマーか？……ツツとかいつてる場合じゃねえ!!

人だ！

人がちっさいビルの屋上にいる！フェンスも手摺もない屋上の端に!!

それは誰の眼にも、一目でヤバい状況と確信できる立ち位置。

俺は車を急ブレーキで止め、すぐに車から降り、ビルに向かって走った。

「こんな田舎で！テレビドラマじゃあるまいし！何で俺が通る時間に……！」

俺は悲鳴に近い文句を吐き出しながら全力で走った。

ビルはもうすぐそこ。

俺は走りながらビルを見上げ、見間違えであることを祈るようにもう一度ビルの屋上を確認する。

人！女性だ！やっぱり居た！

状況的に向こうもこちらに気付いているはずだが、俺に対する反応を見せない。

ビルは3階建、すぐに中にさえ入れれば、全力で走り階段を駆け上がりさえすれば、3秒もあれば彼女の元に行けるはず。

俺はスポーツ、ゲームなどの遊び、仕事でさえも考えるより先にやってみる！やってみても出来るまでやればいいだろ！という矛盾を押しきる単細胞の感覚派。

自他共に認める“脳筋野郎”だ。

であるからして、俺とは違う。頭の回転が早い人達が思い付くような救助方法をこの状況で思いつくはずが無い。

「ハア！ハア！……ドアは……あそこか……」

もし鍵がかかってたら横の大きな窓を割って入ろう、きつと人助けの為なら許してもらえらるだろう。そう思いながらドアに手を伸ばした——その時

飛んっ……だ……！

女性が飛び降りた!!

俺の頭は真っ白になる、真っ白になりながら、俺は彼女めがけて横に跳んでいた。

3階建てのビルの屋上から飛び降りた人を助けられる、そんな漫画の主人公のような力が俺にある筈がない。

そのくらいの事は分かっているのに、どうしてそうしたのは自分でも分からない。考えるよりも先に体が動いてしまったのだから仕方がなかった。

それが映画撮影で、俺が映画監督だったならば、彼女が俺の所に落ちてくるまでのシーンはカップラーメンが出来上がるくらいの時間を使うと思うのだが。

残念ながらそれは映画撮影では無かったし、俺は映画監督ではなく建築作業員である。

あつと言う間に。 “あつ” という間も無い程に一瞬で彼女は俺の上へと落ちてきた。

「よけ……！」

女性は何かを叫びかけた。

——ゴツツ!!

それ以上ない程のリアルな音が響き、一瞬火花のようなモノが散るのが見えたが、目の前が真つ暗になり俺の音は消えた。

普通の日だったはずの “今日” と共に。

およそ意識が無い中での意識。とでもいうのか、この中で考えてみるに俺は元々ヒーローのような存在に憧れていたんだと思う。

突然の出来事にその思いが強く爆発し、もし俺に特別な力があつたとしたらという期待で、女性を救える行動をとったのかもしれない。

そして結果は明白。俺はヒーローになる事に失敗、きつとあの女性を助けることも出来ずに自らも死んだのだろう。

あの瞬間、彼女は何て言おうとしたのかな。よけ…。

余計なことすんな！とかかな？ハハ…。

だとしたらちよつと凹む…。

いや、物理的にも俺の頭は凹んだだろう。

けど、確かにそうだな…余計だったかもな。

まあ、死にしまったもんはしゃーねえか！

じいちゃん、ばあちゃんに会えるかな…。

最後に感じたあの衝撃、巨大な鈍器でぶつ叩かれたような衝撃は筋肉自慢の俺にも死

んだと理解させるに十分足るものであった。

それからしばらく時間が経ったように感じるのだが、俺は変わらずに遠い意識の中で、もう一人自分が居るかの様に自分に起きた出来事を整理しながらモヤモヤと過ごしていた。

深澤 円（フカザワ マドカ33才、独身）の物語はここで終わり。

第二の転機は俺の人生をあつさりと終わらせてしまったのだ。



終わっ…ん？光が…。

生きてた？俺、生きてた…？

「あふ、えああ、ああ」

声が聞こえる。小さい子の声？赤ん坊の声？

子供の声…。

病院？病院だとすると、小児科？それとも産婦人科？

だが何故だ、小児科も産婦人科も俺とは関係無いはずだが。

俺の目はまだ見えない。

「おめでとうございませす！・元氣そんな女の子ですよ！」

看護婦さんらしい人の声が聞こえる。

やはり産婦人科なのだろうか。

「はあ、はあ、ありがとうございます。」

この子、泣かないですけど大丈夫ですか？」

母親らしき人の心配そうな声からは出産での疲れが伺える。

「大丈夫ですよ、声も出ていますし。健康そんなお子様ですよ」

看護婦さんらしき人が返事をする。

看護婦さん（仮）とでも名付けようか。

俺の目はまだ見えないが、それにしても声がとても近い。
まるで耳元で話しているかのように近い。

「それでは加護を掛けますね。ホーリープロテクション！」

……ん？ 普段では聞きなれない単語が聞こえた気がする。

いや、モーリープロダクション？ ……それだと看護婦さん（仮）の滑舌は壊滅的なダメー
ジを受けていることになるのだが。

「ありがとうございます、ビショップ ミルザ様」

母親らしき人がほっとした声でお礼をする。

う…ん。ビショップ？ どうやら看護婦さんではなくビショップだったらしい。ビ
ショップで！ ゲームじゃないんだから！

……。なんか変だと思ったんだよ、俺だってさ…。

はあ…。ハハハ…。うん。どうやらそういうことらしい。

こういつた時、人は焦るべきところなのか、喜ぶべきところなのか。

こは日本ではないようだ。というか世界が違うらしい。

俺の身には基本起こり得ない、転生というレア事象が起こってしまったようだ。

何となく今の状況は想像できたが、目はまだ見えない。きつと俺は可愛い赤ん坊に
…。

多分こういう場合でもなんとか出来ちゃうのが転生者の特権なのだろう！というか
そうであつて欲しい！

力を込めてみる、全身の感覚を研ぎ澄ますように。

…

スーーーン！

…ふあ!? 何か? 体が軽い? 飛んでる?

フライングベイビー!?!

妖精? 俺は妖精に生まれ変わったのか? 先程居たビショップさんは魔法的なものを
唱えていたし、魔法があるなら妖精がいても不思議じゃない。

「あきやつん!」

赤ん坊が何かを言いたげに口を開く。

赤ん坊の声。

俺？俺が喋ってる？いや待って待って感覚が無い！赤ん坊って自分の意思で喋ってる訳じゃないのか!?!なにこれ怖い！

むう！やはり優先するは目かつ！

全神経を目に集中させ息を大きく吸い込んだ（つもり）。

するとビリビリと力がみなぎってきた。ぼんやりしていた白い光に色が入る。見え…てきた…。見えた！

木造の優しい雰囲気の家天井だ。天井が…近い!!

俺は天井のすぐ下をふわふわと浮いていたのである。

見下ろすとそこには横になり休む大人の女性がいた。その隣に赤ん坊が入れられた揺りカゴが大切そうに置かれていた。

赤ん坊は俺の生まれ変わりでは無かったらしい。

人間として転生出来なかったのは少し残念である。が、そうなる俺は何者なのか気になるところだ。

妖精ならまだ良いのだが、ハエや何かだとしたら…ゾツとする話だ。

確かめねば…!

自分の姿を映すべく、俺は窓の前へと向かう。

大きく息を吸った時から体は自由に動かしている。

どうやら息を吸うことで力がみなぎる体らしい。

窓の前、映った自分。黒い。とにかく黒い。二本の角?に見えなくもない影、ぼつか

り真ん丸で黄色い目。

目以外は全て黒い。黒の中に黄色い目と口のところがたまに赤く裂けて見えている。

……悪魔? 恐えええええ!! 可愛くねえええ!

恐ろしい見た目。と言うほどでは無いが、地球人100人に聞いたとしたならば、悪魔という返答が8割近くにはなるだろう。

………つて、うおい!! 悪魔? 影? 嘘だろ!?

いや、これってどういう扱いになるんだ!? ヤバいだろう…。悪魔だぞ…? 悪魔というかシャドウというか…。

我輩は悪魔である。脚はまだ無い。
とか言ってる場合じゃねえ！

んあー、まあ。虫嫌いの俺的にはハエよりは良かったか。

よく見ると、赤ん坊と俺の間に黒っぽい線が繋がっている。

線というか、これは影だろうか？

考えることが苦手な俺は、とりあえず繋がった影を手繰るように赤ん坊の元へと近づく。

「ぎゃーあううああ。んにい。」

無邪気に笑う名前も知らない赤ん坊。

今のところ、俺に対しての嫌悪感を持って無さそう良かった。

俺もこの赤ん坊もこれからどうなるかは分からないが、こうして俺の第二の人生…？
悪魔だから、悪生？アクセイだと響きが嫌だな。影生？が始まってしまったのである。

#2 君からハナレラレナイ。

歌が聞こえる

赤ん坊のお昼寝の時間らしい。

海と大地を守る 八の神獣

大空からは四の神竜の唄が聴こえる

我らは祈り 奇跡の光を見るだろう

命を授かりし小さき者よ

その瞳は何を見る

神獣様が踊るとき 神竜様が唄うとき

あなたは何を捧げましょう あなたは何を捧げましょう

……

こぎげんよう。ここはワルプ村だよ。

オイラかい？オイラは生まれたての小さなデビルさ！

こんなRPG（あーるぴーじー）のNPC（えぬぴーしー）みたいなセリフを言いたくなるほど、のどかな村だ。

そこで子守唄を歌っているのはエリスという若い女性で、俺の双子？と呼んで良いのかは分からないのだが、半年前に俺と一緒にこの世界に誕生した赤ん坊の母親がエリスである。

髪は明るい茶色で、笑顔がめちやくちや可愛い！文句のつけようの無い美人。お母さんでこれなら赤ん坊の将来も楽しみだ。

そのエリスの旦那である男の名前はモルドー。幸せそうな顔しやがってこの野郎！と、言いたくなるような顔をしている。

俺より若いくせにこんな可愛い嫁さん貰いやがって！

ガツデエム!!

なんて思っていない、本当だよ？本当に本当だよ？

その二人の愛娘として生まれた赤ん坊はメルと名付けられた。

メルは両親と同じ明るい茶色の髪がすでにふさふさしており、真ん丸い瞳は綺麗な青い色。とても可愛いらしい顔立ちである。

メルはその可愛らしい口をポカンと開けてよだれを垂らしながら寝ている、爆睡だ。

気持ち良さそうに寝ているのだが、生まれた時から意識のある俺からすると子守唄の内容が気になってしょうがない。

世界に点在する化け物の話なのか!?

生け贄の話なのか!?

出来るなら何も捧げたくないよ！こえーよ！脅すなよ！

とか思いながら聴いている。

魔法がある世界だからと言って化け物が存在するかも分からないのだが、俺みたいな

のが居るのだから化け物も居るのだろう。

まあ、変な唄だ。

メルは普段から大人しい子である。

悪魔と体の一部が繋がっているとは思えないくらい大人しい。

この可愛い赤ん坊に迷惑をかけるまいと、俺は一人で遠くの地へ行った方が良いのでは？…と強く考えてしまう。

とある珍事件がきっかけでそう思うようになったのだ。

珍事件の話だが、俺の体は通常時では物をすり抜けられる状態になっている。幽霊みたいなもんだ。

だが意識を少し集中すれば、物を触り、動かすことができる。

それに気付いた時、俺はテーブルに置いてあった花瓶を試しに持ち上げてみた。

その時に「そういう時に限って」というやつなのか、タイミングよく部屋に入ってきてそれを目撃したエリス。

いつもはおっとりした優しいお母さんであるエリスの口から

「は…!?なにこれ…!!」

といつともより4オクターブくらい低い声でドン引きされたのだ。

さらには、大慌てのエリスに連れて来られたビショップのミルザが、およそミルザが知っている魔法は全て出しきったのでは?と思つてしまうくらい、ミルザはあらゆる呪文を半狂乱で唱え続けた。

俺の中の「ビショップ」のイメージが簡単に崩れ去ったことは言うまでもないだろう。

呪文の詠唱を終えたミルザは――

「キエエエエエイイ!!」

と昔テレビで見た剣道の達人みたいに叫びながら、この家で長く愛用されていただろ
う花瓶を、持っていた杖で盛大に叩き割った。

というのが珍事件の一連の流れだ。

俺からすれば珍事件だが、この家始まって以来と言える大騒ぎに家主モルドーは魔除
け人形を買い寄せメル部屋の片隅へと設置した。

魔除け人形の見た目は：

日本人形とフランス人形を足して、仕上げに硫酸をぶっつけた。

というような俺に恐怖を与えるに十分な作りである。

魔除けというよりは、この人形そのものが呪いのアイテムなんじゃね？と思わせる。本当に怖い。いや、マジで。

その人形と目が合ったならば、その日は一人でトイレに行けない、お風呂に入れない。という状態になるに違いない。

もし俺が思春期のガールだったなら、こんな人形を買ってくるような父親は

「キモい臭いこつち来んなの刑」に処（しよ）すところだ。

俺がただのちっさい悪魔っ子だったことをモルドーは感謝するべきだろう。

その珍事件の後から俺は旅立ちを考え始めていた。

やはり異世界でもイレギュラーな存在というのは人々に恐怖を与えるらしい。

正直な話、食事も睡眠も必要無い俺にとって、メル可愛い寝顔が見れなくなること以外は一人になることに大したデメリットは無い。

メルの体と繋がっている部分の影は俺の意思次第で簡単に切り離せることは、すでに実験済である。

その実験の時に、ビクつきながら村をぐるりと一周したことはこの体に生まれ変わっ

た俺の中で、最初の“新鮮なスリル”を感じた体験だった。

まあ、いつまでもここに居ては仕方がない。迷惑をかける前に行くとするか、お別れだね俺の相棒、可愛いメル。

『さようなら、二元气に育てよ！』

俺からの一方的な相棒だったけど、お前との生活は癒しの日々だったよ。夜泣きもぐずりも少ない珍しいタイプの赤ん坊だったということもあり、余計に可愛いさだけが思い出に残るであろう。

俺は スツ と影を切り離し村の南西に目をやる。

そこには、見えるのは“ウラド”と呼ばれている山脈。

メルの両親や村人の会話から聞き得た情報によると、ウラド山脈を越えると少し大きな街“ベクール”があるらしい。

折角、別の世界に来たのだから色々な街でも見に行こう。

というわけで俺は一直線に飛び始めた、目指すはベクール！

息を吸う、というか空気を吸収する度に勢いは加速する。

スピードを上げても疲れ知らずで、エネルギーも必要無し！

なんて便利なんだ悪魔ポディ！！

普通の間人が徒歩でワルプ村からベクルの街まで旅をした場合、旅慣れた人でも7日程は必要らしいが。

飛行経路は順調だ！快適な空の旅をお楽しみ下さい！

——ギューン！

『このスピードなら、1日とかからつかハッハ!!』

急にガツンと意識が何かにが引つ張られた。

時速300kmの早さで自転車を走らせている時、急に着ていたパーカーの帽子部分を引つ張られた感じだ。

勿論、そんな状況を体験した事はないけどね。

何とか体勢を保っているが、これ以上先に進むことが出来ない。

むぐぐ…、どうして…、ムキユツ!!

見えない謎の力に抗っていると、謎の力が一気に強くなった。

グイツ!!

抵抗することも出来ずに、俺は飛んできたスピードと同等のスピードでワルプ村の方へと引き戻されていく!!

「ああうう！ちやい！」

訳も分からず舞い戻ってきた俺を無邪気な女の子がお出迎えしてくれた。

『ハハ……ただいま、メル。』

他の人には見えていないらしき俺の体なのだが、

どうやらメルにだけは俺の姿が見えているらしい。

そして俺はこの可愛いらしい相棒と一定以上の距離を離れることが出来ないようになってきているのかもしれない。

それともメルの意思で俺を引き寄せる事ができるのだろうか？

そうだとしたら、影の繋がりが切れていても意思の力だけで引つ張る事ができるという事になる。

うちの子、天才なんじゃないかしら!?

離れることが出来ない存在……、

運命共同体……!!

可愛い瞳は俺の事をじっと見つめている。

こんな眼で見つめられたら

“貴様の事はこの我輩が守護してやろうグハハハハ！”
という気分になってしまう。

ほんの数分の別れだったけど――

『改めて宜しくな、メル！』

「あう！」

メルは真剣な顔をして声を出した。

は？返事？な訳無いか。俺の声が聞こえる事は無いのだから。

――。

『メル？』

「あう」

少しそっぽを向きながらメルが声を出す。

『あう、あう?』

「あう、あう」

メルがとて面倒くさそうな顔でしぶしぶ声を出す。

…って、ええええええ!!?

#3 ツタエタイ想い。

奇つ怪な影の悪魔がここに一匹、

『あう？あうあう？あう。』あ、いや違うんだよ、
赤ちゃんプレイをしている訳では無いのだよ！

そう、俺はこんな存在であるからして他人と話すことすら出来ないまま過ごしていく
事になるのではないか？

と、覚悟というか諦めを持っていたのだ。

しかし、俺の覚悟を無駄にさせるような嬉しい裏切りが起こったのである。

メルには俺の声が、声というか思念というかテレパシーというか。

とにかく、メルとならば会話が出来るということに気付いたのである！

どうやら意思を込めて伝えようとした時の俺の心の声はメルに直接伝わるらしい。

だがしかし、相手はまだ生まれて半年の赤ん坊。

つまり、下等種族の青二才でしかない！

おっと、すまん。言い過ぎた！

意思が伝わる事が分かったのは良いが、しっかりとした会話が出来ようになるまでには早くても、もう半年くらいは先の事になるだろうか。

とはいえ、半年後の楽しみが増えたと思えば儲けものだ。

エリスはメルを抱き上げながら寝かしつけている。

やがて寝ついたメルを子供用のベッドへそっと置くとそのまま部屋を出ていき、パタと動き始めた。

家事を開始するらしい、大体決まっただけの行動パターンである。

家事をしているエリスも可愛いと思う。

床に張り付いて眺めるととても素敵な景色が広がる。

モルドーには勿体なくらいに可愛い！

モルドーめえ…!!!

まあ、俺はそんなことで妬んだりはしないのだが。

ふむ、優しい俺は昨日モルドーが隠していた銀貨を別の場所に隠しといてやろう。

さて、ここからは俺の自由時間。

ぶつちやけ何時でも自由なのだが、自分ルールの決め事だ。

メルもしばらく眠るだろうし、俺はまた村でもフラフラと飛び回ってくるとしようか。

今日は何をしようかな、また村長のジジイにでもイタズラしてくるか。

スィー。俺は壁（かべ）をすり抜けて外へ出る。

——グイッ！

おふっ!?

すり抜けた壁から部屋の中へ引き戻された。

あたし、こんなの初めて!

いやいや、可愛い子ぶりっ子の定番セリフを想像してる場合じゃない、しかも言われたこと無かったわ!!

初めての壁抜(かべぬ)け失敗、しっかりしろよ俺…。

気を取り直して、スイー。

——グイッ!

うおっふう!

良く見るとメルが俺の下半身を引っ張っている。

おっと、下ネタでは無い。

下半身というか影を切ったときの尻尾みたいにチョロンと伸びた部分を握りしめて引っ張っている。

全く、可愛い奴め。寝ぼけて変なモノを引つ張つちやうなんて！
つて、誰が変なモノやねん!!

「きよおは行かないで、はなしをきいて」

!?

突然の謎の声に一瞬呆然とする俺。

この状況、声の主は一人しか居ない。だが、そんなまさか…。
俺は恐る恐る返事をする。

『メル?』

メルを見つめてそつと尋ねてみた。

メルも俺の事を見つめている。

「そおだよ。驚かせてごめんさい。ずっと前から話しかけようと思ってたんだけど、心の準備ができなくて」

ヒィー！ビツクリした！怖ええー！赤ちゃん怖えー！

メルはキリツとこちらを見つめ、伝えたい言葉を的確に話そうとしているのが分かる、しかし赤ん坊としての限界なのか言葉使いはたどたどしい。

逆に言えば、言葉使いがたどたどしいだけであり、生後半年の赤ん坊ではあり得ないレベルの言葉を喋り出した。

『おどどどー！どう、どうしたんだい？しゃしゃべつしゃ喋ることができてるのかメル!?ずっと前から!?!』

あまりの驚きに33年と半年生きてるおっさんがあり得ないほど挙動不審になりながら、天才赤ちゃんに質問をぶつける。

「うん、喋れた…の。わたしも同じだから。……。あなたは、あの人の話、覚えてないの？」

メルがこつちの顔色を伺いながら、主旨のよく分からない質問をしてきた。

以前から喋ることは出来た。という事は俺にも理解できた。

『同じ？あの人？…すまないけど、何の事を言ってるのか全然分からない…。』

俺は意味が分からない様子を隠す事なく正直に返答する。

こういう時に知ったフリをして答えるのは良くないのだ。

「私達が生まれ変わった時に、現れて色々話してた人。あなたの中には現れなかったの？」

メルは一瞬、その人の事を話して良いのか迷った様子だが、真ん丸な目をして聞いてきた。

『すまない、俺は気付いた時にはこの世界に居て。メルの肩にさ……くつついてたんだからね！』

元おっさんは急にデレた!!

『ん？というか… 私達』が生まれ変わった時…？つまり、メル…君も前世の記憶があるのか？』

俺としても聞くのが怖い質問だが、聞かない訳にもいかない。

「そう…だね。私も前世の記憶があるの。私…、良い子じゃ無かったから、生まれ変わるときに神様みたいな人にね、罰として…生まれかわる魂に呪いをかけてやろう。って言われたの…。」

『良い子じゃ無かったから』

そう言った時のメルは、いつもの可愛いらしい赤ん坊の顔からは想像出来ない程に、悲しそうな表情を感じさせた。

「だからね。生まれた時に悪魔さんを見て、ああ…これが私の呪いなのか。きつと沢山酷い事…されるんだろうなって、そう思ったの」

メルは小さな口を一生懸命動かして話している。

まるで半年間 塞き止められていたダムを解放したように、思いを語っている。

『ふむ…俺は君の呪いだったのか…。』

「ううん！それは違ったの！…と思う…の！私の呪いは昔の私から続いているもの…だ
と思うから…。それにね、あの時悪魔さんが居なくなったら、と思うととても寂しく
なったの。だから…その…思いきって話かけ…たの。」

ゴニヨゴニヨと歯切れ悪くメルがつぶやく…。

そりやまだ歯が生えていないのだ、歯切れが悪いのは当たり前だ。

正直、所々何と発音してるのかよく分からない。

滑舌の悪さで言うなら90才のジジイと話してるのと大して変わらない。

“悪魔さん”と言ってる所など“ひやくみやひゃん”と聞こえそうなくらいだ。

多分現状だと“悪魔さん”と“佐久間（さくま）さん”を聞き分けることはほぼ不可
能だろう。

いや、どうでもいい。

90歳のジジイとメルでは、可愛いさの数値が桁違いにメルの方が高いけどね!!
おっと、危ない。勝手に脱線した心を戻し、話の内容を考える。

『あの時…?』

あの時とはいつのことだろう。半年以内のどれか…と言えば1つしかあるまい。

『ああ、確かに…ミルザがアンチデーモン!ホーリーショック!キル!キル!ゴージャックヘル!とか叫んでるとき少し体がピリピリしたからなあ。消えてもおおかしくなかったかもな、ハハ。』

現時点(げんじてん)での忘れられない出来事ランキング断トツ1位、ミルザ狂乱の件の話で間違いないだろう。

「クススツ…、それじゃなくて…!あの時のミルザさんは怖かったけど…。とにかく悪魔さんは私に嫌なことをする気がないってことは…もう分かっているから…。だから…、

これからも宜しくね！ってことでひとつお願いします！」

(ひゅとちゅおねがいひましゅ！)

キュン！とする俺。

なんだろう。俺的には話の展開(てんかい)が早くて助かるが、初めての会話でここまで言ってもらえるなんて。嬉しいじゃないか！

この半年間、メルは一生懸命に話の内容とか考えていたのかな？

健気(けなげ)で可愛い奴めっ！グフフフフ：

自分の言葉に照(て)れて部屋の隅の方を向くメル。が肩をビクツ震わせる。

どうやら不意にあのスプラッター人形と目があつたようで、小さく「ヒツ…」と洩らし目線を部屋の中央に戻した。

『つまり、仲良くしようって事だよな？もちろん！こちらこそ、宜しくな！俺達は切つても切れない縁(えん)で結ばれてるみたいだしな！』

俺は自分の見た目が悪魔なものも忘れてニコやかに微笑みかける。

目は鋭く吊り上がり、口は裂けたように赤く広がった。

ちよつと泣きそうな顔をしたが俺を傷つけまいと話を続けようとしたメル。

しかしそこで足音（あしおと）が近づく。

トットトットトツ、ギイ。

ノックも無く（当たり前だ）部屋へと入ってきたエリス。

目をパツチリと開いてベッドに座るメル。

危なくエリスに「会話をできる事」がバレそうになりキョトンと放心状態になっている。

それを見たエリスの顔は瞬く間に緩んだ。

「まあー！起きてたのメル？起きてたのに泣かないなんて、お利口さんですねぇ〜！お母さんびつくりしちゃいました〜！」

エリスが幸せそうにメルに頬擦りする。

メルがチラツとこつちを見る。

『返事をしなくても良い、聞いてくれ。俺達はまだこの世界のことを全然知らないし、バレない限りは目立たず普通の生活をしてた方が良いだろ？ 赤ん坊のフリも大変だと思
うが宜しく頼む。』

「あう?！」

メルは少し後ろめたい表情を作る。騙すの?と言いたげだ。

『なあに、〃可愛い赤ん坊のメル〃でいればエリスもモルドーも幸せなハズさ! 周りに俺しか居ないときは気を使わなくて良いからさ! 一緒にこの世界の事、知っていこうぜ』

「うきゅー!」

分かった!と言いたげにメルが声を出す。

「うきゆくですねー！メルちゃんふふふふふ」

現在進行形でエリスは幸せそうである。

半年間、可愛い赤ちゃんだったメルだが：実は俺と同じように前世の記憶を持った転生者だった。

それに、メルは初めから俺が転生者だったことを知っていたらしい。
そのなかでよく今まで俺にもバレずに赤ん坊をやり通したものだ。

彼女の前世は女優とかスパイだったりして!?

呪いがどうかか言っていたが：。呪いとかが当たり前に存在するような世界から転生したのだろうか。

とにかく、俺と彼女がこの世界に同時に転生したという事実は変わらない。これぞ運命の出会い!!

俺の目標は定まった。

呪い付きだろうがなんだろうが、構わない。

俺が全ての災いをハネ退ける悪魔になれば良い！

俺はメルと共にこの世界をどこまでも歩んで行こう！

そう心に誓った。

#4 コノセカイ。

枯れること無い広葉樹が、緩やかな風に吹かれてわさわさと音をたてる。

俺もすっかりこの村に馴染んだと自負している。

いや、「馴染んだ」は少し違うか……メル以外の村人は俺の存在を知らないのだから。

メルも俺の事をルアさんと呼び、すっかりなついてくれている。

それと言うのも、俺の呼び名をルベルアと決めたからだ。

何故ルベルアなのかという話はまあ、そのうちにもしよう。

俺の見た目は端から見ると中々の怖さらしく、下手に他の人に見えていたなら村が大パニックになっていたんじゃないかとメルが言っていた。

それほど心配しているわけでも無いが、万が一見えちゃった時には何とかするとしよう。

とにかく、当面は世界の情報集めに焦点をおくつもりである。

目的が出来た途端に時間はあつという間に流れ、この世界に来てから三年を迎えた。

この世界に季節というものが無いのかこの村が特別なのか、春の終わり頃みたいな気候から変わる事なく三年が経った。

メルと共に世界について調べ始めて2年半。

その甲斐もあつて、この世界のことがかかり分かってきた。

まず、この世界はかなり広く

東京ドーム500億兆個くらいの広さだ。

……。

すまん、適当だ。

田舎育ちは東京ドームの大きさなんて知らないのに
なんでもかんでも東京ドームの数で表しやがって！

おっと、熱くなってしまった、話を戻そう。

古めの地図で確認したところ、未開の地を除いても地球の倍はありそうだ。

物知りな雑貨屋のオヤジが言っていたが、海や砂漠などに暮らしている人々もいるらしい。

さらにモルドーの話が本当ならば、世界は今でも少しづつ成長しているらしく、古い地図を信用しすぎると思わぬトラブルを招くことがあるとか。

少し話が反れるが、メルが一歳を過ぎた頃からモルドーやエリス、村の物知り連中から話を聞きたい時は、俺が盗み聞きをするのではなく、直接メルに質問させている。

可愛いさ真つ盛りのメルに質問された奴らは、聞いていない事まで満面の笑みで答えてくれる。

その中でも群を抜いてデレるのが父親のモルドーに他ならない。

「ねえ、お父さん？」の部分だけでも目尻が60。下がる。

「こんなこと聞くなんて！メルは賢いねえ！自慢の娘だよお！」

「ご褒美に何か買ってあげようか！何が欲しい？」

質問される度にこんな感じになるモルドー。

世界一チョロい父親なのではなからうか。

「デレすぎて正直キモいが、折角だから搾られるだけ搾り取っておこうぜ！」という作戦を発動した。

メルのお陰で今までの全作戦が成功している。

モルドーからの戦利品だが、この世界では高級な分類である「本」を数冊ゲットする事ができた。

モルドーはご褒美を買ってくれた時には必ず

「ママには内緒だよ」

と言うが、メルはいつもエリスの前で本を読んでいる。

お父さんの味方じゃないの!?!と思うかもしれないが後々バレたりした方が怖いことになるんだぞ、モルドーよ。

メルは今もモルドーに貢がせた本を真剣に読んでいる。

それを後ろから眺める事に飽きたルベルアは、今まで得た知識の整理をすることにした。

◆
メルが入手した本とか村人たちの話によるとこの世界では各地に国が転々としていて、それぞれの国には王が存在する。

で、村や小さな街は一番近くに存在する国王とその国の所属になるといふ事だ。

俺のイメージだと市町村みたいな事だろう。

今、俺達が住んでいる「ワプル村」だと所属する国は「ベクール」で

ベクルの王はトール・ドラフォイという名前だとか。

日本の感覚で言うとトール・ドラフォイが名、ドラフォイが姓にあたる。

姓は貴族以上しか使うことが無いらしいから、何かの間違いでモルドーが貴族にならない限り、メルと姓は無縁だ。

俺達が気になったことは他にも沢山ある。

冒険者として世界を旅した事があるという、村長のジジイの話だと世界にはかなり沢山の種族が存在しているらしい。

俺の知ってるアニメやゲームでもお馴染みのドワーフやエルフ等の亜人も存在するとか。

種族の名前を聞くだけでもファンタジーを感じて心が踊る、ぜひ逢ってみたい！

ドワーフやエルフの女の子に囲まれてあんなことやこんなことに、グフフフ……。あつ、囲まれるとしても俺じゃなく、メルか……チイツ！

一番肝心な話だと、この世界の“安全度”についてだろうか。

メルと話しをする時の内容でも “いつか旅をしてみたい” という話になることが多々ある。

その時のためにも “安全度” は最重要事項であるのは間違いない。

建築現場でも “安全第一” が絶対条件だしな。

安全度について、モンスターの有無は重大な要素だけど、残念ながらモンスターは存在するみたいだ。

村の周りじゃ小さなモンスターすら見かけないけど、それはもしかしたら毎日マナを喰いまくっている俺の仕業かもしれない。

でも普通は街や村の外に出るとモンスターがいるとか。

モンスターの発生には大気中に多量に含まれる “マナ” と呼ばれるエネルギーが関係してて、そこから発生すると書いてあった。

本によると無から発生するモンスターも居れば、多量のマナを体内に宿した動物が変異してモンスターとなる場合もある。

モンスターや魔族と人種族は分けて考えられていて、人種族とは人間もエルフもド

ワーフもひつくるた総称だが、人種族にはモンスターに対抗するための様々な職業があるらしい。

俺の頭じゃ覚えるのが大変なくらいには。

商人や農民など生活を支える「職人^{ライフ}」、

モンスターや魔族とかから人々を守る者、各地の洞窟や魔巢等に潜り珍しい宝などを持ち帰る者。

それらを総称して「冒険者^{ローグ}」と呼ぶ。

大きくはそのどちらかで分かれているらしい。

例えば人に職業を聞かれたとき、「あなたは何者ですか？」の返答は「私は商人です」で良い筈だ。

じゃあ、ライフとローグで分けてる意味は？と思うかもしれないが、単純に協会がライフ協会とローグ協会に分かれているだけなんだとか。

それぞれの職には異名持ちという各地のギルドの中においてトップレベルの者達が存在していて、

もし商人として世界に名を轟かせるほどの人物になれば、「商王」なんて呼ばれることになる。

俺の中の商王のイメージはぼっちゃり体型で紫の髪をしたおっさんなだけだな。

ローグの方だと、例えば剣を極めに極めた者は「劍神」と呼ばれるらしい。

不思議なんだが、ライフでは極めても「王」の称号までなのに、ローグだと「神」と付く異名持ちがいくつ也存在するってことだ。

それだけモンスターが脅威で、ローグが重要視されているという事なんだろう。

メルを危険に晒すわけにはいかないし、俺はどんなモンスターが現れても倒せるように鍛練を欠かさず行わなきゃならん。

といっても、俺の修行は簡単なんだよな。

魔法について勉強した時に気付いたけど、俺の体は魔力体。モンスターや魔族と共通でマナの保有量が直接的に戦闘力になるようだ。

しかも俺の場合は魔族と違って、人種族の魔力の源であるエレメントも吸収できる上に、自身の核の大きさが足りず、これ以上魔力を貯められない！という事態にならない。なぜなら俺には核なんて無いからな、

マナとエレメントさえあればいくらでも魔力を溜めることができるのだ！
グフフ！

自由に姿や形を変えられる！

固さも自由自在に調整できる！

単純な攻撃としてなら影を剣のようにして伸ばす・飛ばす！

ハアハア！

あらゆる攻撃の時に出すスピードも自由ウウ！

それら全てを魔力によって行えちやうんです！！

奥様見てください！この完璧なボディーー！

無駄が無い！！



知識を整理しているルベルアの呼吸が荒くなる。

「ルアさん、何か言った？」

『何も言っていないよ』

再び知識の整理を始めるルベルア。

◆ 魔法使いになりたい人は魔法の勉強に数年を費やし、魔方陣や詠唱を覚え、さらに上を目指すならそこから派生を研究したりと天才じゃない限りは努力に努力を重ねないと強くはなれない。

だがしかし、

そおーんな努力も必要無いんです!!

そんな苦労や努力をすっ飛ばして大気中のマナを喰らい続ける! 喰らったら体を自由にかす練習をするだけ!

何故ならこの悪魔ボディー!

体そのものが魔力体でありイ!

思い通りに魔力を使うことが出来るのだからア!

その上、このマナ吸収機能を使えば

ここら一帯のマナを吸収することで村の周りで新たなモンスターが発生することも

無くなるんです（多分）！！

奥様!?!一石二鳥なんですよオオオオ!

◆ メルの隣でふわふわと浮かんでいる悪魔が“ふんふん”と息を鳴らす。

「ルアさん？」

『何も言っていないよ』

我に帰ったルベルアが再び自分の世界へと入る。

◆ ハアハア……！興奮しすぎて少し中二病じびょうが出たようだ。危なかった。

つまりこの体、想像以上に便利な作りだったということだ。

でも、実際にモンスターに遭遇したことがある訳では無い。

いざモンスターと出会ってみたら 俺より強い能力持ちばかりの世界かもしれないし……。

もし俺がやられたりして居なくなったら、メルはどうなるだろうか。

メルは女の子だけど、元・剣士の村長のジジイから剣を習っていて、筋が良いと誉められている事が多い。

力の弱い人族では、女剣士というのは少ないらしいが、村に攻撃魔法の使い手がないので魔法の代わりに攻撃手段として、剣を習っている。

メルは普通の人族よりずっと力が強いので、このまま剣を鍛えても強くなれる可能性は大きい。

ビシヨップのミルザから回復魔法も習っていて、三歳とは思えない学習能力だと周囲の人間は驚いている。

すでに回復魔法のヒールを使えるようになったメルに大人達は村始まって以来の天才児だと騒いでいた。

それもそのはず。

本来、人間は長い鍛練により体内のエレメントというものを増やしていき、溜まったエレメントを使い魔法を生み出しているという。

三才児にはその体内のエレメントが魔法を使えるだけの量を持っているはずが無く、学力も無いのだから、大人達が騒ぐのも当たり前だ。

なので、少しでも怪しまれないようにするためにメルも努力している。

回復魔法のなかでも比較的簡単な魔法のヒールなのだが：

初めてヒールを使えた時のメルは、

“うわああい！使えた！使えたよミルザ様アーーー！やったあ！”

と天才子役さながらの名演技を披露してくれた。

その子、チートやでええええええ！！

中身は三歳児ちやうでええええええええええ！！

と知ってるのは勿論、俺だけだが。

村人達は盛大にその成長ぶりを語り合っていた。

この世界では学校が義務化されている訳では無いらしいが、メルの神童ぶりに歓喜したモルドーは将来を見据え、学校へ行かせる事を決めた。

学校は「ベクール」に在り、10才から利用可能。という決まり事になってゐるみたいだ。

10歳から利用できるとはいえ、利用する人の多くは18歳から行くらしい。

説明を聞いた限りでは日本で言うところの大学にあたる役割だと思ふ。

それまではこの村でのんびり暮らすことになるのだろう。

とは言つても子供の成長は早い。

きつと、あつという間にその時は来るだろう。

モルドーとエリスはもちろんの事、村の連中もメルが学校に行ったら寂しがらうな…。

◆ まあ、心配するなモルドー、お前達に分までたつぷりメルを可愛がつてやるよ！

『メルく、グヘグヘグフフ』

…あつ。

ずっと頭の整理をしていたルベルアだが、余計な妄想の所為でうつかりと声を出してしまった。

本を読んでいたメルが「バツ」と本で顔を隠しながら言った。

「き、気持ち悪い笑いか方しないで……こっちは見ないで……!!」

メルは本の上から眼だけを出すと、ルベルアに凍てつく視線を放った。

その視線はルベルアを仕留めるに十分なモノであった。

改心の一撃!!

『グハッ!』

野生の悪魔（元おっさん）は倒された!!……完。

オイイイ!!

#5 ワタシの秘密。

生まれ育った街のとあるビルの屋上。

ある日、私はそこに立っていた。

理由は特にない。

けど、無理に理由を付けるとするならば、この世界が私を拒絶したからだ…。

何があっても自殺をしてはいけない。

それは分かっている。

だから、私はきつと地獄に落ちるだろう。

けどね、どちらも同じ地獄なら…人より鬼に苦しめられたい…。

ただ、親が離婚しただけで。

ただ、お母さんの再婚相手から心も体も汚されただけで。

ただ、妬んだお母さんから身体中を痣だらけにされただけで。

ただ、新しいお父さんがお母さんの事をもう要らないと言い、お母さんを包丁で刺し、

殺人未遂で刑務所に入っただけで。

ただ、血も繋がっていないお父さんの起こした殺人未遂事件で、周りの人、学校の人、いつも遊んでいた友達、それらから人間扱いされなくなっただけで。

ただ、お母さんが私を置いて家を出ていく時

“あなたなんか生まなきゃ良かった”

その言葉を最後に残していっただけで…。

たったそれだけのこと、自殺していい理由になどならないのだろう。

自殺なんかしたら、残された人が一生悲しむのだから。

残された…：…人が？

お母さんは口癖の様に言っていたね…。

“いい子にしていれば痛いことしないよ” って…。

私はとても痛いの…。本当に…、心が痛いよ…。

「こんな苦しいのは、私がいい子じゃ無かったからなんだよね…？…？お母さん…」

私はそこに立っていた。

一歩前に出れば、この地獄ともお別れだ。涙はもう枯れた。

キキィッ！

車のブレーキの音が辺りに響く。

車から体が大きくて顔の険しい男性が降りると、こつちをひと睨みしてからすごい速さで私のいるビルに向かって走り出した。

「ここに来る気だ……！」

口から心の声がこぼれ落ちる。

とたんに私は背中嫌な汗を滲ませる。

男性は怒っているのか、口をパクパクさせて走ってくる。

何を言っているのかは聞こえない。

あつという間にこの場所へと届きそうな勢いだ。

私は……。私は、これ以上今の地獄と付き合う気はない。

けど、あの人は私を助けようとしている。もし私が死んだらあの人は悲しむだろうか？あの人は……。

“残された人”など居ない私なのに、他人の為に迷うなんて……！

このままだと、私は見知らぬ男に助けられてしまう。

何度も何度も裏切られたのに、また希望を持ってしまう！

そう思った時、私は飛んでいた。

(見知らぬ男の人。ごめんなさい。私のことを気にすることなく。

今日の事を引きずる事なく。過ごしてください…！)

最後の瞬間、覚悟を決めた私はギョツ！とした

男性が、私の落ちる先に入るように飛び込んできたからだ！

「よけ…！」

避けて！と言おうとしたが、遅かった…。

ゴツツ!!

私は、きつと死んだのだろう。

考えたくないけど…あの人も…。

本当に最後まで…周りに迷惑をかける “悪い子” だったなあ…私。

ここがどこかは分からない。何も無い、白く霧がかかった空間。確かに死んだと思うのだけど。ここが死後の地獄なのかな…。もしそうなら、さつきまでの地獄よりずっといい。

私はそこに座り込んだまま長い時間をボーツ、と過ごした。

《愚かな人間よ、汝は何を恐れる》

急に変な声が聞こえた。

《変な声とか言うな！ばかちんが！》

あつ、ごめんなさい。

私は……私が命を捨てた時に助けてくれようとした男性。

あの人が死んだと思うと恐ろしいです……。

あなたが神様ならどうかあの人だけは助けて頂けませんか？

《我を神などと同じにするでないわ！》

《ふむ、しかし面白い。悔しいが、我はもう終わる存在である》

《長き封印により、我が肉体も消滅（しようめつ）した今》

《ここに残るは莫大（ばくだい）な魔力のみ…。》

《最後に奴らに何をしてやろうか考えておったが…。》

《うむ、貴様を我が生きた世界へと転生させてやろう》

《但し、我が全魔力を注いで作り出す呪いと共にな…！》

《フハハハハハハハ！ハーハツ「あの……。」「ハッ!?》

《急に話かけるでない！高笑いと被るではないか！》

ごめんなさい。あの、私はどうなっても良いので、どうかあの男性にだけは悪いことをしないで下さい。

《ふん、其奴がどうなったかなど、行けば分かるわ》

《我が最後の魔力よ、存分に世界を乱すが良いぞ…！》

《クハハハ、フツハハハハ…！ハーハツハツハツハ…》

《ハ……ツ……ハ……ツ……ツ》

霧が晴れてきた。

すると夢心地だった意識が、現実味を帯びてくる。

◇

グイッ！ 誰かに抱き上げられた感覚が体から伝わる。

「おめでとうございます！元氣そうな女の子ですよ！」

先程とはガラツと変わって明るい女性の声が響いた。

「あふ、えああ、ああ」

えっ!? 喋れない!?

ボンヤリした視界では私は誰かに抱かれ、別の誰かに見せられている。

ふと、先程の怪しい声の主が言った事を思い出す。

“転生”

転生だ！私は別の人間として生まれ変わったに違いない！

状況を理解するとボンヤリしていた視界が少し見えるようになってきた。
少しずつ……。

視界が……。

……………!?

「あきやっん！」

ビックリしたあ!!生まれた瞬間に心臓が止まるところだった。

転生した私の目の前で、おぞましい影がふわふわと浮遊している。

生まれて始めて見る光景がこれなんて!

転生した娘はそう思うと、つくづく自分の不運が嫌になった。

悪魔だ……!いや……。呪いだ……。そうか、呪いだ……!

あの人の言っていた通りに、私は呪いの悪魔にとり憑かれているんだ……!生まれ変わっても結局呪われたままなんて!

どうせ呪われているのなら、私一人しか居ない世界なら良かったのに……。また周りの人まで不幸にするのは嫌だよ!

悪魔さん、どうか今この瞬間殺したりはしないで下さい。

きつとこのお母さんが悲しみます…。そうしたら私はまた……。

私が周りに事情を喋れるようになるまで待つて欲しい。

それに、やっぱり死ぬのは怖いよ！

今ここで生き延びるには、なるべく目を合わせないように……私が「気付いた事」を悪魔に気付かれないように……。慎重に振る舞う必要がある……！

スイー……！

!!

転生した娘の思いが通じたのか、呪いの悪魔は離れていき天井まで飛んで行った。

ああ、良かった。どうか心の準備が出来るまでは痛くしないで下さい……！

ふわふわ、ふわふわ

私の視界には、なんとも落ち着かぬ悪魔が浮かぶ景色がある。
このまま何処かへ行ってくれば、と願わずにはいられなかった。

ギンツ！

呪いの悪魔はしばらく私を見つめた後、突然目を細めた。

スイ！スイ！！

呪いの悪魔は、そのまま勢いをつけて私に迫る。

「きゃー」

出すまいと心に決めたばかりなのに、思わず出る声。

「あううああ」

どうしたらいいのかわからない、呻き声にも似た声が私から出る。赤ん坊から一転、まるでゾンビだ。

「ここは一度平和的に……！」

「んんん。」

笑ってごまかす作戦！

……悪魔が、止まった。

黄色い目で。ジツと見つめてくるだけ。…助かつ…た？

その日から怯える日々が続くと思つた私ですが、予想に反して呪いの悪魔は何もしてこなかった。

それどころか、まるで見守ってくれているかのように暖かみさえ感じさせてくれた。

私が授乳してもらっている時には特に熱い視線を。

両親もとても優しく私を育ててくれている。

いつかこの日々が急に壊れて絶望に落ちる。

とかいう呪いなのだろうか？

どうか、私以外には手を出さないで下さい。呪いの悪魔さん……。

……

……

7歳になった私。

私はワプル村のメル！

華麗に剣を振り、光魔法を操る才色兼備の乙女！

なんて、自分では言えないけど。

そんな私には誰にも言えない秘密があるの。

7歳だけど、前世も合わせると親より年上！

もう、立派なお姉さんなの！

そして大きな秘密がもう一つ！

誰にも見えない、黒い彼。

その実力と安全性は私の保証付き！

いや、安全性は保証しないでおこうかな……。

自由自在に宙を舞い、大木も大岩も一撃の下に粉碎しちゃう！

それなのに、見た目と裏腹にとっても優しい。

本当は彼に言えない秘密もあるのだけど……。

「呪いの悪魔」にして私の相棒、ルベルアの存在だよ！

ルアさんはね、私と双子のようにお母さんから一緒に生まれた悪魔さんの名前だよ。

私と同じ「転生者」のルアさんと過ごすうちに、名前が無いのはお互い困るじゃない

？つていう話から私が3歳の時、夜更かししてルアさんと考えた名前なんだ。

けど、今思うと深夜のテンションで考えたせいかな、由来はちよつとルアさんの「アレ

“が出ちゃってるけど。

生まれ変わった私はそんな呪いの悪魔ともお友達になれて、今のところ不安になるくらい恵まれた生活をしています。

『メル、さつきから空を見上げて。何考えてるんだ？』

「ううん、ルアさん。何でもないよ！10才までにもっと色々覚えておきたいなあと思ってる！」

『そっか、そうだな！頑張れ！』

今、私は広い世界を見てみたい。

こんな風に素敵な思いを持てたこの世界を旅してみたい。

きつと楽しいに違いない！

今はただの強がりな私も、いつかきつと本当に“強くなれる”筈。

もう、一人じゃないのだから！

そのためにも、色々な準備は必要なんだ。

まずは元・学生らしく、勉強かな♪

一章 浮遊城

#6 双竜星が落ちた日。

魔光粒星・エンドルゼア

エンドルゼアとは、魔力の源となるマナやエレメントを豊かに含んでいる惑星だ。

多種多様の生物・種族がその膨大な魔素の中で暮らす。

魔鉱石や魔力溜まりを奪い合い激しい戦いが絶えぬ時代もあったが、現在ではある程度落ち着いている。

霸王暦はおうれき1376年

最後の魔王、ハールバドムが封印されてから丁度、千年が経つ年になる。

“丁度千年”、世界中の強者達が待ちに待った日であり、警戒を最も強める日であつ

た。

「というのも千年前、当時の勇者達が魔王ハールバドムに使った大魔法“シールオブデッドオアアライブ”の効果というのが――

“千年の間封印を破れなければ、封印された者は死ぬ”
という、途方もない年月を効果範囲とした封殺魔法なのだ。

三名の人種族の勇者がその命を燃やして放った複合魔法であり、普通のモンスターや魔族が同じ魔法を使われたなら、百日と持たずに消滅してしまう程の強力な魔法である。

封印から千年が経ったにも関わらず、各地の猛者達が結果を気にするのはそういった理由であり、魔王ハールバドムがいかに強大な存在だったのかを、当時を知らぬ者達にまで知らしめる事となっていた。

かの好戦的だった魔王が大人しく封印されたまま終わるとは思えない。
その時代から生きる実力者達はそう考えていた。

しかし、レコード・ルーラーと呼ばれる、情報力に関して右に出るものが無いと言われる存在がこの世界には居る。

その者は固有の魔力感知スキルを持っており、そのスキルから魔王が消滅したか否かを判断したのだった。

その者が結論付けた内容の開示は、魔王ハールバドムが消滅したことを、それぞれに納得させるには十分だった。

歴戦の魔王が一人、消えた日となったのだ。

魔王ハールバドムと同じ時代を生きた者には、昔の戦闘を思いだし感慨に更ける者や、かつて痛手を受けた相手の死を喜ぶ者などもいた。

伝承にまでなった魔王の死を唄にして一儲けしようとする吟遊詩人も現れた。忘れていたり、元より関心が無かった者もいる。

大きな存在だった魔王。

しかし、その死が世界に与えた影響は有って無いような僅かなものに終わった。

しかし、中にはその結果の行方に違う見方をする者も居た。

人里より遠く離れた空の島、そこに住まうは巨大な竜。

かつてハールバドムを良き喧嘩相手として幾度もぶつかり合った巨大な竜もまた何かを思い、空の島よりさらに高き所を眺めている。

鈍く光る黒色の鱗はとても硬い、その硬い鱗もよく見れば多くの傷がついており、この竜の歴戦の日々を思わせる。

竜が深い溜息をついた。

まるで地響きのような音の溜息を。

遠くを眺めていた竜だが、しばらくするとどつしりと地面に腰を下ろし、つまらなそうな表情をしながら頭を前足に乗せた。

眼をつぶり、眠りに入る巨大な竜……。

眠りに落ちるその間際、竜の背中を「ゾツ」と震えが走った。

まるで大気そのものが震えたように。

「むうう?」

長い時を生きる竜にとつても、久しく覚えの無い体感だった為に、大きく眼を開き怪訝そうな顔をする。

しかしその時、得たいの知れぬ震えを感じ取ったのはこの竜だけでは無く、エンドルゼアに点在する“名のある実力者”達は皆が似たような反応をしていたのだ。

皆が震えたその刹那、

遠い遠い、ずっと遠い場所で何かが空を駆け抜けた。

広い世界の中で、“黒き鳥ノ王”だけがその光を目視していた。

遠い空の向こうからやって来たその光はどうやら双子の流れ星。

絡み合うように流れ落ちてきたその双子の流星は“黒き鳥ノ王”が居る地よりもはるか東の地に流れていった。

眩い光の塊は大地に衝突する事もなく、一瞬「バツ！」と目の眩むような輝きを残したのち音もなく消えていった流星。

「カアアアアアアアッー!!」

「黒き鳥ノ王」は光を見届けると、一度だけ鳴き声を上げてはるか西へと向けて飛び立っていった。

その日、エンドルゼア東の地に新たな命が「一つ」誕生した。

はるか遠い空の島、巨大な竜は遥か東の水平線の向こうを眺める。

「むう、誕生したのは一つか…。なればもう一つの方は招かれざる客人か？良きか悪きか……。むう、奴め。最後の最後に何かしおったな。クカカ……。これが奴の仕業ならば、嫌でもいつか出逢う事となるだろう……。カカ。」

空から地上を見下ろす者がどこか嬉しそうに眩いた。

気づくと巨大な竜の傍らに一人の男が立つ。

歴戦の竜の隣に並ぶにしては、あまりにも小さな男だ。

白色のシルクハット帽をかぶったその男は竜の眩きに頷きながら、

「確かにそうかもしれないね、あの二つ並んだ流れ星は双竜星というものでね。千年以上前に一度現れたつきり、今まで見たことがなかったよ。偶然にしては……ね？」

どこか嬉しそうな竜を見上げてクスリと笑いながら、シルクハット帽の男が竜の眩きに語り返す。

男はふと何かを思い出したように、竜の言葉と自身の言葉を大事そうに抱えていた魔法の書に書き留めた、そしてひよいと跳び跳ねると煙のように姿を消してしまった。

魔王の消滅の裏側で誕生した新たな命。

新たな命の誕生を祝福し湧いているのはエンドルゼア東にある小さな村の住人達。

世界がその日どう動いていたかなど、小さな田舎の村の住人や、生まれたばかりの赤子には知る由も無い話。

しかし、その赤子は異世界からの転生者。

それ故に、赤子は自身が普通では無い事を知っていた。

となると、無為に幸せを喜んでいるのはこの小さな村の住人達だけだろうか。

“子の心 親知らず” もしくは “異世界人の心 原住民知らず” とでも言いたくなるところだが、喜べることは幸せなことだ。

加えて言うなら、普通じゃない赤ん坊に普通じゃない何かがついていることなど、その村の人は知るわけが無いのである。

世界各地に存在する者達の様々な思いを乗せて、時代に新たなうねりが生まれたのだった。

《…我が…時代を生き…た者共よ…》

《我からの……最後の……土産……だ……》

霸王曆1376年…二月終わり頃の話である。

< i 3 4 5 9 6 7 — 2 6 9 6 3 >

7 来訪者は砂埃とトモニ。

霸王曆1383：

エンドルゼア東の大地にある小さな村、ワプルには僅か7歳にして神童と呼ばれる女の子が居た。

その女の子の名は「メル」

神童と呼ばれるその子は優しく、礼儀正しく、動物や草花を愛し——

「ああああ！危ない髭おじちやああん!!」

神童メルの叫びごえがする。

メルが見ている先では、勢いよく宙を舞う太い木の枝が一人の男性めがけて飛んでい
る。

「うっうわあああ！」

男性も叫んだ。

バキッ……!

「うっぐうあゝ、痛たた……あああ!?腕が！腕が折れたあ！」

運悪く木の枝が直撃してしまった男性はその広い額に大粒の汗を浮かばせながら腕

を押さえている。

「もおー！避けてって言ったのに！」

(※言っていない)

せつかく村の外れで練習してたんだから、もっと離れた所に立って見ててよ…。
ちよつと腕見せて？髭おじちゃんは太袈裟だからね！」

神童メルが言うとうと男性は痛そうに顔を歪めながら腕を見せた。

「うああ…これは…折れてるね…！」

神ど……メルはゴクリと唾を飲んだ。

「だから言ってるべや！痛えべさあ！メルさ、何とか出来ねえんだべか？」

髭おじちゃんは訛りが強い。

「ちよつとまってるね…。癒しの精霊よ、大地の民に手を差し伸べよ。奇跡を信じる子羊のお肉は美味しくて、あつ。子羊に癒しの光を与えたまえ!!ヒール!!」

メルが仰々しく唱えると、髭おじちゃんの腕が緑の光に包まれた。

「おど!?痛みが引いていくべさ!いんやあ、助かったべえ。…んだどもメルや、この腕さ変な方に曲がつたままだど?」

髭おじちゃんが腕をぶらぶらさせながら呟いた。

「うん、痛みを取っただけだからね!後はミルザさんの所に行って治してもらってね!」

メルは事後処理をミルザへ丸投げした。

ミルザとはこの街唯一の教会に居るピシヨップであり、メルに回復魔法を教えている師匠でもある。

さらに言うとう美人で、淡いグリーン色の美しい髪を払いながら振り向く様はセクシーな黒淵眼鏡と口元のホクロも相まって、村に多数のファンを持っている。

「んだか！したら行ってみるべき！」

ミルザに会う口実ができたからだと思うが、髭おじちゃんは鼻歌を歌いながらスキップして教会へと向かっていった。

その様子を心配そうに見るルベルア。

あんなにスキップしたら、腕ちぎれるんじゃないやね？
ちよつと骨見えてたし。

「ふう〜！危ない危ない…」

メルはわざとらしく、額の汗を拭う仕草をする。

『危ない危ないじゃないよ。ごめんなさいくらいは言つとかなきゃだろ?』
ルベルアの声にメルは「あつ」という顔をする。

「髭おじちやあああああん!謝るの忘れてたああああ!ごめんねええええ!」
メルは叫んだ。260デシベルくらいの声の大ききで叫んだ。

「おー!いいよーい!」

髭おじちゃんはごぎげんである。

『しっかし、離れた位置から木を斬れるか試したらあの太い枝が、あんなに簡単に斬れてぶっ飛んでいくんだからな…:ビビったよな!』

俺がやってみようぜ!って言ったのが原因なんだが…。

髭おじちゃんが死ななくて良かったよ。枝が当たったのが腕じゃなかったらあの詛りが聞けなくなる所だった。

まあ、メルの成長は喜ばしい事だけだな。



人並み外れた身体能力を持つているメル。

それは転生者であり、子供以上の知力を持つていた為にあらゆる物事の習得が速いからだ。

というだけでなく、生まれたときからルベルアの魂と繋がっていて、ルベルアの力の一端を自分の力に変えることが出来るのも大きな要因である。

ルベルアと直接繋がっている事により、他の人には姿を見ることがも声を聞くことも出来ないルベルアの存在を知っている唯一の人間ということになる。

体と魂で繋がった転生者。

そんな特殊な二人ではあるが、3年後に予定しているローグ協会、つまり冒険者の育成支援学園への入学に向けて日々修行中なのであった。

剣も魔法も他の子供達とは比べ物にならない速度で習得していくメルを大人達は神童と呼んだが、イタズラ好きでヤンチャに育ったメルはむしろ他の子供達より怒られる事が多い。

そんなヤンチャなメルだが、ルベルアが心配している事もある。

メルは転生前に辛いことがあったようで、前世の事をあまり話したがらない。

その辛い前世が原因なのか、同世代の村の子供達と一緒に遊んだりすることが殆んど無いのだ。

とはいえ、村の同世代の子供達とは実際の年齢が離れすぎているのだから仕方ないの

かもしれない。

この世界では幸せな人生を歩めると良いのだが……。

あれ？そう言えばメルは元々何歳だったんだろう……。

まあ、何歳でも良いか！

ともかく今のところは明るく育っているのだから。

心配するだけ無駄だろう。

三年後には学校かあ。平和な村でのんびりやってちや三年なんてあつという間に過ぎてしまうだろうな。

俺も7年間、毎日のマナ吸収を怠つてはいないが、今のところマナの許容量に限界は来ていない。限界が来るまではマナ吸収を続けるとするか。

◆ ルベルアの心配を知つてか知らずか、メルは誰に言われるでもなく日々の鍛練を止めはしなかった。

メルの剣の腕はとうに師匠である村長を越えており、ルベルアが相手をしなければ、メルの練習相手を出来る者も村には居ないのだった。

しかし、魔法はミルザから教えてもらった回復魔法の“ヒール”しか使えていないよ
うなので、魔法より剣が得意なタイプであるらしい。

とりあえず日課のマナ吸収が終わったらメルの本の修行に付き合っただるか。
ルベルアがそんなことを考えていた時、二人の体にピリリと何か走った。
それは普段感じることに無い感覚。

これは……！

俺はこの感覚に似た覚えがある。

それは俺が生まれたばかりの頃、ある事情で『悪霊退散魔法』みたいなモノを使われ
た時に受けた感覚と同じだ。

いや、やっぱり違うかも？

んー。まあ、気にしたものじゃないか。

得意の『まあ、いいか理論』で深く考えないルベルア。

その時、『ギラリ！』と空で何か光った。

『ん？なんだ？メル、今あそこで何かひか…』

——ドドオオオン！…オオ…ン！！

「キヤアツ！」突然大地が揺れ悲鳴をあげるメル。

『何か空から落ちてきたぞ?!?なんだ?!?ヤバくないか?』

ルベルアが感じる “ピリピリ” が先程よりも強くなる。

血も汗も無いはずのルベルアだが、全身からブワツと何かが込み上げた。

「ルアさん、村の皆が心配！」

メルが村の中心を見て、ルベルアに “クイツ” と合図を出す。

『体を預けろ！飛ぶぞ！』

ルベルアはメルの体を絡ませたまま宙に浮くと、そのまま村へと向かい飛行した。

衝撃音の聞こえた場所の近くへと、すぐに到着した二人。

『これ以上は人に見られる、ここからは走ろう！』

ルベルアが飛行を止め、メルに言う。

この世界に浮遊魔法が存在するのは分からないが、魔法もよく知らぬ子供が空を飛んで来たらそれはそれで騒ぎになるだろう。そう考えたのだ。

メルはルベルアの言葉に頷き降り立つと、力強く地面を蹴り一気に駆け出した！

体は偽りのない7歳の少女だというのに、その足の速さはルベルアが昔応援していたオリンピック選手など比にならない程の速さだった。

村の中心地、何かが落ちてきたと推測できる場所には砂埃が上がっていた。

「みんな！大丈夫?!」

メルが声をかけるが集まっていた大人達は砂埃の方を見据えたまま振り返らない。

「この村の諸君よ、驚かせてすまない！私はテストアントという者である！君達を害する気はないので安心してくれたまえ！」

砂埃の中から声が聞こえてきた。物音一つ立たぬ程静かな場に、村人たちの緊張感が漂う。

砂埃はまだ舞い上がっており、ぼんやりとした人影しか見えない。

「この村に、少し気になる者がいたのでね……。」

まだハッキリとした姿は見えない。『テストアント』だが、言葉の内容が少し嫌な予感を匂わせる。

「テストアント殿！ 危害を加えないと言うのは本当ですかっ!？」

質問したのは村で一番 騙されやすいと噂される雑貨屋の次男坊。音を聞きつけ、野次馬に來たのだろう。

彼は背が高いのにとっても細く体重も軽いので、村の子供達は彼の事をガリガリガリバーと呼んでいる。

可哀想なことに、本人はそのあだ名があまり好きでは無いらしい。

「もちろん、危害など加えません。ただ、私の期待通りの者がこの村に居たなかったなら

ば、少し残念ですがね…。」

少し特徴的な声でテトインタスが返事をする。

中々取まらぬ砂埃に、ルベルアは少し苛ついていた。

この砂埃は一体いつ取まるんだよ！コイツはどんだけ凄い勢いで落ちてきたんだか。

「そうですか…。」

少しホツとしながらテントスタへ返事をするガリガリガリバー。

まだ立ち込める砂埃の中から、姿を現したテストアント。

その姿を見た者達は、彼が人族では無いことを悟る。

白と黒が入り混じった髪色にかつしよく褐色の肌。その瞳は人間で言う所の黒目の部分が赤、白

目の部分が真っ黒。

この見た目は…、きつと魔族ってやつなのだろう。

服装はジェントルマンって感じだが、こういう奴はどうせロクデモナイ奴と決まって

るよな。

ルベルアは「ジェントルマン風」な格好に対する偏見が強い。

——砂埃が落ち着いてゆく。

と、砂埃の中からもう一人が姿を表した。

後頭部まで続くオデコ、フサフサした立派な髭。つぶらな瞳は恐怖からか、涙でうるうるしている。

誰だ！誰だ！！誰だ！？光る頭に、黒い髭！！

「髭おじちゃん!!」メルが目をパチクリさせて言った。

「んだあ……べえ……。」

硬直していた髭おじちゃんが消えてしまいそんな声をだす。

「ランドルフさん!?!なんでそんなところに!」

ガリガリガリバーが続けて言う。

というか…髭おじちゃんの名前、立派だなオイ。

話の腰を折るように砂埃から沸き出た謎の人間。
その存在にトンタコスも少し驚いている様子だ。

そんな中、村で一番純粋な男が、髭おじちゃんの異変に気付いた。

「あ、あ、ランドルフさん…う…腕があああああつ!」

ガリガリガリバーが麦わら帽子を貰えそうな勢いで叫んだ!

どうしたんだ、ガリガリガリバー!略してガリバー!!

「ランドルフさんその腕、やられたんですか!」

ガリガリガリバーは震えながら髭おじちゃんの腕を指差した!

集まっていた村人も髭おじちゃんの腕に注目した!

髭おじちゃんの腕が……今朝まで全然平気だったはずの腕が……！

折れているではないか!!それも見事にとんでもない方向を向いて折れている!!!これは事件である!!!

「首に尋常じやない量の麻酔針が刺さっている探偵」を呼ぶ必要がある!!
村人達も口をパクパクさせて啞然としている!

そんな中、ガリバーは渾身の力で叫んだ、

「危害は加えないって言ったのに!僕たちを騙しましたねえええええ!!」

「……………」

メルはお口にチャックをしている。

「……………」

俺は言ってもどうせ皆には声が聞こえないしね、しようがないよね。マジで黙ってるつもりは無いんだけど、本当にしようがないし。

「……………」

「……………」

#8 ワプル村の神童Ⅱ悪魔憑きの少女。

太陽の気持ちいい5月の中頃、

普段は穏やかな筈のこの小さな村は騒然としていた。

「これを危害と言わずになんというのですか!!?」

ガリガリガリバーはワプルの中心で叫んだ。

その叫びの対象になっているのはこの男、

テストアントと名乗る魔族のような見た目の彼は、状況が理解出来ないといった様子で顎に手をやり首を傾げる。

テストアントは特徴的な声でガリバーに答えた。

「すまぬが、私はこの者に危害を加えた覚えがない。しかし面倒事は起こしたくないので、この者の腕は私が治しましょう：グラン・ヒール！」

テストアントが魔法を唱えると、髭おじちゃんの腕が緑の魔方陣に包まれていった。

——変な方向を向いていた髭おじちゃんの腕が正しい方向に戻ってゆき、綺麗に

塞がった傷口。

テストアントが使った魔法に感心するルベルア

『凄い！あんなに酷い骨折が一瞬で治っちまうなんて！』

「うおお！治ったべ！元通りさなつたべさ!!あんがと！あんがと！んだども、ミルザさんどこさ行けねぐなつづまったか」

髭おじちゃんは訛りが強い。

「これで私に敵意が無いと分かったでしよう？」

やれやれといった様子のテストアント。

「あああ……、奇跡……。僕は奇跡を見ました！貴方は素晴らしい人だ！聞きたいことがあると言ってましたね、何なりとお答えします!!」

ガリガリガリバーは興奮しながら返答しているが、ミルザが人を治癒するところを見たことが無いのだろうか。

先程まで疑っていた相手をこうも簡単に信用してしまうのだから、コイツの純粋度は世界に通用するレベルかもしれない。

『メルも早くあんな回復魔法覚えてくれよな！ともかく髭おやじの腕…治って良かったな』

まるで他人事のようにルベルアが言うと、

「うん、凄かったね。私もあれくらいの怪我を治せるように頑張る」

とメルが小声で返した。

「聞きたいことなのですが、実は先程もう見つけてしまいましたね。その小さき女の子よ、少し私と手合わせしていただきたい」

そう言いながらテストアントが指をさす。

テストアントの指が向いた先に居るのは――

「やっぱり、私…だよねえ…?」

メルは「嫌な予感が当たった」という風に、自分を指さす。

「手合わせですと!?!この子は確かに凄い才能を持っています…!まだ七歳の…!それも女の子ですぞ!そんな子に手を出すなど黙って見てらられる訳がありませんね!」

どこから湧いたのか、いつの間にか居た村長のジジイが叫ぶ。

「ふむ、それは困りますね。私としても主の命により来ている訳ですから」
テストントはチラツと村長のジジイの方を見て一言呟き、またメルの方に視線を戻す。

周りに集まっていた大人達は困った様子で皆キョドキョドしている。

その様子を見ていたルベルアは、野次馬の中にお馴染みの顔を見つけた。

——ん？集まっている連中の中にモルドーとエリスの姿も在るじゃないか。何やってんだあの二人、娘のピンチだぞ？

「ええっ…と…。」

テストントの「誘い」に、メルはどうしたら良いか分からずモジモジしている。

困ったメルを助けるでもなく、ルベルアが余計な情報をメルに教える。

『メル、左の方。モルドーとエリスがいるぞ』

悪魔は場面など気にせず、すぐに囁きたがるのだ。

“自己中でも良いじゃない、悪魔だもの”である。

「本当だ……！」

メルも二人を見つけたようで、ボソツと言う。

モルドーとエリスもメルの視線に気付に気付いた。

ルベルアはその様子を黄色の眼でジツと見つめている。

モルドーは堪らなく不安な様子だが、隣に居るエリスは……心配……してる様子じゃねえなアレは……。

エリスは子供の運動会に来た親みたいなのりで手をブンブンしている。

声は聞こえないが行けー！ やっちゃえー！ ぶっ○せー！ と言わんばかりで顔も凄く笑顔だ。

それを見たメルがボソツと言う。

「クス。何あれ……普通心配するよね。まったくもう、ふふ」

文句を言いながらメルも少し楽しそうな顔をしており、その顔からは少し緊張感が取れていた。

「よしっ！」

一呼吸したメルがテストラントに向かって歩き出す。

『まあ、これでも神童さんだからな。親（特にエリス）からも信頼されてるって事だな、ククク』

ルベルアがそう言うと、メルはにやけて頷いてみせる。

「くうっ、メル！皆の者、もしメルが危険になったら分かっておるな？」

村長のジジイはエリスの分までシリアスを演じているようだ。

——。

「手合わせして頂けると判断しても良いのですね？」

テストラントが目の前へと歩いてきたメルに問いかけた。

その問いに対して、メルも問いで返す。

「まず、理由をお聞かせ願えませんか？」

テストアントは一瞬考えてから語りだした。

「分かりました。実は我が主はあなたが誕生した時から、今までずっとあなたに興味があつたんですよ。

7年前、双竜星という物が現れましてね。

それは長く生きている者にとって少し特別な出来事だったので。

そのの落ちた日、落ちた方向に生まれた子供は我が主君が臣下に命じて探させた限りではこの村のあなただけでしてね。

つまり、あなたが危険な存在なのかどうかを確かめる為に手合わせして頂きたいのですよ。

見たところ、小さな体の割りに大きな力を持っていてそうですね」

テストアントは嘘か真かは分からないがそれなりの理由を話した。

そして話が長ええ!!

話終わりに、もう一度聞きますか？はい／いいえ

がありそうなくらい長えええ！

自分のボスの名前は言わないように誤魔化してるし、どういう時にメルを危険な存在と判断するのか言わないし……27点つてとこだな。

ルベルアの思いとは裏腹に、ガリバーだけは納得したように何度も頷いている。

「えーつ……と、よく分かんないけど分かりました。やらなきや帰ってくれなさそうなので、やりましょう！」

メルは修行用の木刀をギュツと握りしめると体を落とし構えた。

その姿にルベルアも何か惹かれるモノを感じた。

俺以外の奴と実践するのは初めてなのに、なかなか度胸あるじゃないか。

よし。初の実戦だ、俺も集中するか！

実戦、

メルにとって、ルベルアと対しているいつもの練習と違い実戦においてはルベルアの力をメルと共有できると言うことだ。

といっても魔法は使用者が自ら作り上げたイメージで唱えるものであり、ルベルアの魔法はルベルアにしか使えないのであるが

相手からすればメルは姿しか見えない。が、実際はルベルアも同時に相手にする事になる。

そういった意味で、ルベルアが手を貸すことでメルの戦闘力は大幅に跳ね上がるといふ事だ。

「では、お相手願おう！その髭のお方、開始の合図をお願いします！」

テストアントが武器も持たずに構えながら言うと、髭おじちゃんが頷いた。

——息を飲む村人達。

「だっぺ!!」

髭おじちゃんが合図を叫んだ！

「相手の力量が分からないから、少しずつお願い！」

メルはそう言う素早く後ろに跳び、テストアントから距離をとる。

『任せとけ！とりあえず、パンフアップ、サイドアイ、ソリッドウエボン、身体強化、視覚強化！後は、ソリッドウエボン、武器強化！とりあえずこんなもんか？ヤバそうだったら早めに言ってくれ』

メルの強化レベルといつたところか。

俺の声はメル以外には聞こえないので、相手からしたらメルが無詠唱で身体強化したことになる。

ククク。こちらら悪魔だ、卑怯なんていなよ！

ルベルアは強化魔法だけ使い、戦う二人を傍観した。

手を貸すことでメルの実戦での成長に悪い影響を与えるのではないかと危惧したからだ。

身体能力が強化されたことを感じたメルが、今度は前方に全体重を乗せるとテストスタントへと向かって跳び込んだ。

テストスタントは後ろへ下がったメルに急接近して蹴りを出そうとしていたが、突っ込ん

できたメルを見て脚を出すのを止めた。

テストアントはそのまま身体を半分ひねり小さく後ろへ跳ぶと、メルの攻撃を受ける体勢をとった。

一瞬のうちにメルとテストアントで駆け引きが行われる。

元冒険者である村長も、二人のスピードを目で追うのがやつとな様子だ。

村人に至っては速さを目で追いきれずに、何処を向いているのか分からない。

うおー、コイツ、ポツと出のモブ野郎かと思つたら結構強そうじゃねえか。

メルは分かりやすく突きの構えを見せ、テストアントの反応を見ると首を狙った上段斬りからの中段斬り——とフェイントを入れて木刀を振った！

テストアントは透かさず突きを受け流す素振りを見せたがフェイントに気付いて紙一重で頭を後ろに引き上段斬りをかわし——さらに後ろへ跳んで中段斬りも避けた。

「ほお、すでに中々のモノですね。剣の腕前もさる事ながら……あなた、まさかとは思いますが、無詠唱が使えますか？」

テストアントは息も切らさずにメルへ問う。

「はあ、はあ、んー……無詠唱？ 私は剣の方が得意ですのぞ」

メルは少し息が上がっているがまだ大丈夫そうだ。

『もう少し強化しようか？ それか、俺も攻撃に参加しようか？』

俺とて心配な訳じゃないが、テストアントはまだまだ本気じゃなさそうなので、一応メルに聞いておく。

「ふう、まだ大丈夫。けど、この人の方が強いみたい。もし相手が本気出してきたらルアさんが守ってね」

メルがテストアントに聞こえぬように小声で俺に答える。

「まだイケるようですね、ではー」

テストアントは先程より格段にスピードを上げて、メルの顔めがけて突きを放つ——！

メルはその腕を剣で払ったが、その隙をつかれて脇腹に蹴りを喰らってしまった。

「ケホッ！」

メルからひとつ咳が出る。

その隙を逃すまいと、テストントは小さな突きでメルの顔を狙う。

メルはそれを紙一重で避けることに成功したが、避けた拍子にほんの少し足を纏れさせた。

あまりのスピードに村人達は時間が止まったかのように、先程までテストントが居た場所を見続けている。

汚い手を使わぬ二人の攻防は称賛に価するだろう。

が、汚い手を使ったわけでもないテストントの攻撃に、傍観者の悪魔は腹を立ててい

る。

この野郎！いきなりスピード上げて来やがって！

しかもこんな小さな女の子相手に顔面狙いかよ、

酷い真似しやがって!!

テストントはさらにスピードを上げて、距離を取ろうとしているメルへ、追い打ちの蹴りを繰り出す。

——チツイツ!

辛うじてそれを避けたメルの頬が少し切れ、うっすらと血が滲む。

遂に我慢出来なくなったルベルアが、テストントには聞こえ無いということも忘れ言
い放つ。

『遊びは終わりだ!』

——ルベルアの眼が怒りで黄色から赤へと変わる——

『リヴァンプ身体強化！エンテイシベイシヨン視覚強化！リジエネイシヨン再生強化！オーバースベック限界突破！後の事は考えなくていい！やつちまえ、メル！』

ルベルアは七年で編み出した強化魔法の中でも、特に強力な魔法を連続詠唱した——

「ちよつ！ルアさん!？」

突然体の軽くなったメルは、“わつ”となりながらも地面を蹴り体勢を立て直すと、再び低く腰を落とし剣をかまえた。

ツツ——！瞬間放たれたテストアントの蹴りを横目に見ながら前に踏み込んだ！

前に踏み込んだメルは、そのままの勢いでテストアントの胴体目掛けて木刀を一振りした！

バキイツ——！

テストアントの横腹へ思い切り当たった木刀は先っぽが折れ——折れた剣先は回転しながら飛んで行く。

その剣先は離れて見ていた村人の間を縫って飛ぶと、やがて宿屋の壁を突き破った。

「ウツグハツ！」

——ドオッオン：！！

まともにメルへの攻撃を受けたテストントは呻き声を上げ、身体をひしゃげたまま村の北西の防風林へと吹っ飛んだ。

「あつ……ちやく！強すぎた！」

メルが心配そうにテストントの元へ向かう。

村人達がやっと現状に気付き、ざわつき始めた。

テストントは口から血を流し、地面に倒れたまま動かない。
死んでしまったのだろうか。

アーメン！

と、テストントが震えながら口を動かす

「ぐ……ハア……。私は……本当に木刀でやられたんですか……？」

そうメルに尋ねた後、テストアントは起き上がることに無く気絶してしまった。

『あつ、生きてたか。木刀には違いがないぞ！』

魔法の効果で普通より固かったかもしれないけどな……（小声）

「木刀……だったんですけど……。ちよつとやりすぎてしまいました。ごめんなさい！」

メルはそう言いながら “キツ！” とルベルアを睨んだ。

『すまん、やりすぎちゃったーてへ』

怒ったメルを可愛いと思いつつも、謝るルベルア。

沈黙したままのテストアント、ちよつと手を貸しすぎたかも知れないが、メルの勝利だ

！

「え……と、とりあえずトドメさしますね！」

そう言うときメルはギョツと唇を噛みしめ眼を瞑り、折れた木刀を高々と振り上げた！

——えっ!? トドメさすの!?

俺の無いはずの心臓は飛び出て、そのまま宿屋の壁にめり込んだ! いやそうじゃなくて、

トドメとかさしていい相手なのか!?

メルが勢いよく木刀を振り下ろした!

アヒイ——!!

『防壁陣!』
ウオード

——ギイイイン…!!

ルベルアは咄嗟に魔法を唱え、防壁魔法がメルの木刀を弾いた。

『メルみたいな小さい子供はまだ、トドメとか刺しちやらめええええ!!』

俺の心の叫びがメルの頭に響き渡った……

#9 オトコの象徴。

ワプル村の村長は走った！息を切らせて走った！

村の神童わるがきがまたとんでもないことをしてかしたのではと血の気を引かせながら走った！！

——ワプル村北西の防風林。

「痛つ……、手が痺れたあ！ルアさんいきなり防壁陣なんか出さないでよう……！」
本気で振りかぶった木刀が、硬い防壁魔法に弾かれた為に、手首を痛めて不満顔のメル。

『いやいやいや！メル、ちよつと落ち着け！簡単にトドメなんか刺しちやいけないだろ！この人も命の取り合いまでするつもりじゃ無さそうだったし、聞きたいことも沢山あるし……それに——絵面的に！』

ルベルアは初対面の魔族もどきを全力で庇った。

「だって、ルアさんだって、遊びは終わりだ！ って言つてたじゃん！ 眼真つ赤つかにしてさ。あれはヤル気満々の顔だったよ？ それに、私は村を守ろうと思つたから……」
似非7歳児が的確にルベルアの痛い所を突きながらゴニョゴニョ言う。

「ゼエ……ハア……メルよ、お前は無事なのか!? 何が起こつたんじゃ!? テスタント殿は？」

全力で走つてきた村長のジジイが喉をヒューヒュー言わせながらメルに問いかけた。

「私は大丈夫だよ！ テスタントさんはほら、そこでピクピクしてる」

「なわあー!! テスタント殿！ 息は有りますか!? なんと……、メル！ やりすぎじゃ！ すぐにビシヨップ ミルザをここへ！」

テストアントの状態を見て驚き飛び上がった村長のジジイは甲高い声でメルに叫んだ。

「村長、私ならここにおりますよ。この御方を治療すれば良いのですね？」

声の方に目をやると緑の髪妖艶な美女がこんな所に!! けしからん! あつ。ミルザ

か。

ミルザがまるで用意されていたかのようにすぐ後ろに立っていた。

「おお！ミルザ殿！来てくれておったのか！すまぬがすぐにこの者を治療してくれぬか！」

頼み込む村長のジジイだが、視線はミルザの顔より30センチ程下の方を凝視している。

その様子を見ていたルベルアは憤慨した。

このエロジジイめ！

まったく…何処を見ているんだ……ふむむう…！おお、全く…けしからんふふ、ハアハア。

変態二人の熱い視線を意に介せず、ミルザは魔法を詠唱した。

「この者に光の加護を！グラン・ヒール！」

ミルザが魔法を唱えるとテストアントが緑の魔方陣に包まれ、瞬く間にその傷を癒してゆく。

そこでルベルアはあることに気付いた。

ん？　そういえば…この魔法ってテストアントが髭おじちゃんに使ったのと同じだよな？　気になったルベルアはメルに尋ねた。

『メル、そういうやメルもミルザも光の加護がなんたらって詠唱の時に言ってたけど、テストアントは言ってなかったよな？　同じ魔法なのに。魔法の覚え方の違いか？』

ルベルアの質問に、メルが小声で答える。

「えーと、多分意味はないと思うんだけど、光の加護がーとか言った方が雰囲気ができるからだと思う」

『そ、そうか。なるほど。』

ルベルアは無駄な事を聞いたようだ。

ルベルアが無駄な所に気を取られていた間に、テストアントの回復が終わっていた。

「助かりました。私の油断が招いた結果、ご迷惑をおかけしました。あなた様がたの心遣いに感謝致します」

傷の癒えたテストアントが起き上がり丁寧に礼を述べた。

メルも謝るべきか迷ってモジモジしている。

「傷が癒えたようで、安心しました。もう大丈夫なようなので私はこれで失礼しますね」
ミルザはそう言うのとゆっくりと教会の方へと戻って行く。

腰つき柔らかに歩くその姿を眼で追ったルベルアと村長のジジイ。

目の保養に満足した村長のジジイが、「キリツ」と顔を変えてテストアントに話しかけた。

「ふむ、それでテストアント殿は何者なのですじゃ？見たところこの辺りには居ない種族と見受けられますがの。ここは平凡な村、平和だけが取り柄みたいなものでして。面倒事はご遠慮願いたいのですが……」

村長のジジイは村長つぼい事を言った。

「始めにも言った通り、我が主君はこの村をどうこうする気はありません。ただ、先程は久しぶりに実力者と手合わせする機会が巡ったもので少々熱くなつてしまいました……。それについてはお許し願いたい」

テストアントはその特徴的な声で丁寧にした。

最終的に半殺しにしたのはこっちの方なのに、原因を作ったからと謝るなんて律儀な

奴だ。

我が足元にひれ伏すならば許してやろう！クハハハ！

とか想像してたけど言わなくて良かったー！

「こちらこそ、テストントさんの強さにビックリして加減を間違えてしまいました。ごめんなさい！」

「フフ、小さき女の子に挑み、負け、さらには頭を下げさせたとあつては私も何も言えません。全ては私の落ち度、お気になさらず」

テストントが少し気まずそうにしながらメルに言った。

そのままテストントは言葉が続けた——

「我が主君、我が種族はここよりずっと北にある浮遊の大地に住まう天使族でございます」

——天使族？え？どこの何方が？

「え？主君とその浮遊の大地に住む人が天使さんなんですか？テストントさんは天使さ

んの…えーと」

ルベルアと同じ事を思ったのか、メルがテストアントにごによごによと聞き直す。

「はい、主君を含め私達“天使族”が浮遊の大地に住んでおります」

テストアントがこちらの意図を理解してくれたのだろう、的を射た返答をくれた。

しかし、天使!!?

ルベルアとメルは爪先から頭の上までテストアントを舐め回すように見つめる。

まず全体的に黒と赤を基調としたスーツというかタキシードというかローブというか…軍服というのが一番近いかな。

褐色の肌にはほんの少しかだけ鋭い爪。

白と黒が入り混じった髪色、そして極めつけがその瞳だ。

人間で言う所の黒目の部分が赤で、白目の部分が黒。

ふとルベルアとメルの目が合う。

『どうみても俺たちのイメージの天使じゃないよな』

ルベルアがそう言うと、メルが2回頷いた。

「天使族でしたか。わしも天使族の方は初めてお目にかかりましたのう」

そう言いながら村長のジジイはメルをチラリと目にやる。

「これ、メルや。そのように人をジロジロ見るものではないぞ」

村長のジジイに叱られたメル。

「して、テストアント殿は主君殿になんと報告するのですじゃ？

ワシらは変わらず今まで通りの暮らしをして行きたいだけなのじゃが。

村の何かが主君殿の迷惑となるのであらば出来る限り改善するように努力はします
がの」

村長のジジイはテストアントの眼をしつかりと見ながら、今回の騒動の行方を左右する
芯を突いた。

テストアントは何かを考えている――

「そうですねえ。私も使いとして来ただけです、それらの答えは我が主君へ直接お

聞きになられてはどうでしょう。我が主君の居る浮遊城までは、私が案内致しますので」

テストアントは、ルベルアが面倒に感じるような提案を言い放った。

「なんと…それですと…。誰が行くかの折り合いもありますので、村の者と相談してからでも良いですか？話が決まるまでは宿を用意しますので、そちらでごゆるりとお休み下さい」

村長のジジイは頭をポリツと掻きながらテストアントに言う。

その言葉にテストアントが返す。

「浮遊城へはこの女性、名はメルと言いましたかな？メルさんをお連れしたい。本当は彼女が暴れても主君に危険が及ばぬか試したかったのですが、それを確かめるには私も全力を出さねばならないようです。そうなると村が……」

ですので後は主君の力を信じる事に致します」

そう言ったテストアントはメルの方に手を差し出し軽く会釈をしてみせた。

その仕草にルベルアは少し苛立つ

やっぱりコイツらの狙いはメルか！

しかも、さりげなく「さっきは全然本気じゃなかったしー！」的な事言いやがって。もう少しでトドメ刺されそうだったくせに。

村長のジジイも、まだ信用出来ないといった様子で、テストントへ返事をした。

「待ってくれんかの？どちらにしても村の連中と相談はせねばなりません。メル、テストント殿を宿屋まで案内してくれんか。ワシは皆と話してくる。ではテストント殿、後程……」

村長の一声で、メルはテストントを宿屋に「連行」することとなった。

ただの案内ならわざわざメルに頼む必要はない筈で、村長のジジイの警戒が窺える。

「えと、それじゃあ行きましょう」

メルはテストントに声をかけると宿屋に向かい歩き始めた。

『あんなに居た大人どもは途中から全く居なくなってたな。飽きて帰りやがったのか……
適当な連中だよなあ』

ザツ、ザツ、ザツ——宿屋までは歩くと地味に遠い。

メルが無言で歩いていると、テストアントが口を開いた。

「ところでメルさんはどうやって無詠唱を習得されたのですか？」

まだ戦闘の時の事を気にしていたようで、テストアントは歩きながらメルに質問した。

「ええっと、小さい声で言っただけですよ」

メルが咄嗟に嘘をでっち上げる。

「ふむ、途中、かなり高濃度の魔力を感じましたが……。なぜかあなたからはそれほど魔力は感じませんし。その魔力の流れ方を見るに、自分の魔力を隠せる訳でも無さそうです……。ふうむ……」

メルの返答を聞き流しながらテストアントがブツブツと独り言を呟いている。

ルベルアはそれを聞き、考察する。

テストアントの独り言を聞くに、魔力は隠したり出来るのか。ということは隠さないと

戦闘力が丸分かりになったりするのかな？

俺の魔力は見えてないようだが、一応隠す練習もしてくか。

ルベルアがそんな事を考えていると、いつのまにか宿屋に到着していた。

しかし、宿屋の前では変な夫婦が騒いでいる。

それを見て何故か胸を熱くするルベルアはコツソリ実況を始める。

ドーもー！見てください、宿屋の前で変な奴が騒いでますね！

夫は太つちよでオカツパ頭、奥さんはパンチパーマ、強烈夫婦と言ったところか！相
手にとって不足は無い!!

その相手は一体どこのどいつなんだ!?

「んん!?おいおいおい!あんた!どうしてくれんだこれ!」

変な夫がテストタントの姿を見つけると、いきなりテストタントに突っ掛かったー!

テストタントは様子を見ている。

「あら？メルちゃん！さつきメルちゃんのお母さんから、見かけたらそろそろ帰るよう
に伝えて。って言われてたのよ！早く帰ってあげなさいな！」

変な奥さんが早口で呪文を唱えたっ！

変な奥さんの呪文はメルに炸裂っ！

「あつ、じゃあ私は帰りますねー！」

そう言うのとメルは足早に自宅へと逃げ出した。

『俺はもう少しここに残って様子をみておくぞ』

ルベルアは眼を煌めかせて（といっても黄色い眼は表情を変えてくれないが）様子を
見ている。

「あんた！黙ってないで何か言ったらどうなんだい!？」

変な夫はなおもテストメントに突っ掛かる！

「いや、まずは……」

テストメントは反撃の構えをとった。

やるのか？やらないのか！

「いや、じゃないんだよ!!!まずは謝るべきだろ!!!」

戦闘力5くらいしかなさそうな変な夫の勢いは凄い！テストントの反撃は失敗した
!!

理由は分からんが凄い怒ってるなあ、面白いから良いけど。

しかし、宿屋の親父と女将は一体どうしたんだ？テストントとは今日初めて出会った
筈だが。

テストントは黙ったまま、宿屋の夫婦の顔を眺めている。

宿屋の親父はさらに叫んだ。

「ウチの宿はなあ！今年建て替えたばかりなんだよ!!それがあんたの起こした騒ぎでこ
んななんっちゃってんだよ!!」

熱くなっている宿屋の親父は、綺麗な壁の一部を指差す。

ルベルアもその指の先に視線を送った。

ほう、とても綺麗な壁に……なんということでしょう！何に使うよかよく分からない穴が！子供の頭くらの大きさでしようか！家の中からも外が見えるようにとの匠の心遣いが……ん？こ……これは……!!

一部始終を遊びながら見ていたルベルアだったが、興味本意で穴の空いた壁をすり抜けたその先で、見てはいけない物を見つける。

外壁のに空いた穴を抜けると客間の中になるのだが、客間と中通路の間の壁にこれまたポツカリと抉られたような穴が空いている。

さらにその穴を抜けると、宿の中心へと抜けるのだが……そこには一際太い立派な柱が立っていた。

その柱にそれはあつた……。

まるで下ネタかと言わんばかりに柱の下部、人の腰くらいの位置に突き刺さりそびえ立っているソレ。

新築したばかりの宿の大黒柱に、折れた木刀の先つぽが!!!

事の原因を理解したルベルアは、この場から逃げることを決めた。
よし、メルの所に帰るか……。

スィー！

夕焼けは今日も綺麗だなあ……。

#10 メシドキには来ないで欲しい。

時に、ありきたりな風景は人に安心感を与える。

汚れて帰って来た娘をお風呂に入れて替えさせ、一緒に晩ご飯を作り、

晩御飯が出来るかと娘はお父さんを食卓へと呼んでくる。

お母さんはお手伝いをしないお父さんに小さくため息をついたが、娘はお手伝いのお母さんを独り占めできて少しだけ嬉しかった。

——スィー!!

そんな日常の風景に何かが飛び込んでくる。

『メル！宿屋の親父が怒ってたの、あん時折れた木刀のせいだったぞ！いやー焦ったあ
！』

ルベルアがそう言うと、メルは「えっ、まじ？」という顔をして見せた。

「さあ、早く食べましょう！」

「ご飯の支度が整ったようで食事を促すエリス。

「はあいー！」

子供らしく、元気に返事をするメル。

しかし一人だけ元気の無い男が居る。

ハアとかフウとか言いながらリビングと玄関を行ったり来たりしているのはモルドーだ。

いつもの幸せ顔はどこへやら、今日は少しやつれている。

見慣れぬモルドーの姿にルベルアも考える。

娘が怪物じみたパワーで人を吹き飛ばした上に平然とトドメまで刺そうとしたんだから、シヨックを受けるのも当然か。

いや、モルドーは吹き飛ばした所までしか見てないか。

ガタツ——。

やつと食卓へ来たモルドーが椅子に座り、エリスとメルの顔を交互に見つめる。

「あー、すまないが大切な話があるんだ」

モルドーが暗い顔のまま唐突に切り出したが

——コンツ、コンツ！

モルドーが話を切り出すのを遮るようにドアをノックする音が鳴る。

「モルドー殿!!話が決まったか聞きに来たんじゃが！開けてもらえるかの!」
やたらとデカい声が外から聞こえてくる。それは村長のジジイの声だった。
なんとも近所迷惑なジジイである。

村長のジジイの声を聞き、座ったばかりのモルドーが「バツ！」と立ち上がり玄関へと向かう。

「ああ！村長、実はまだ話してなくて。今話そうとおもってたんです」
モルドーはペコペコしながら村長と言葉を交わしている。

それから振り返り、今度はエリスとメルに向けて言った。

「実は今日、村に居た天使族がメルを『天使族の城』へ客人として招待したいらしいん

だが、その話を聞かされたとき、お父さんは可愛い我が子を得たいの知れない場所に行かせることなんて出来ないって反対したんだ」

ルベルアも一人、頷く。

ふむふむ、まあ親としては当然の事だよな。よし、これで今回の騒動は終わりかな。

しかしモルドーの話はまだ続いた——

「反対したんだが、今回の出来事は村の今後に関わる事になるって村長が言うんだ。これから先、天使族とよい関係を作っていくためにも無下に断るわけにもいかない」と

要は天使族の誘いを断って逆恨みされ、村に侵攻なんてされたら目も当てられない！ってことだな。

悩むモルドーを意に介さず、メルが言う。

「私は行っても良いよ！多分、大丈夫だし！」

言いながらメルはチラッとこちらを見る。

『えっ？ま、まあいざとなったら飛んで逃げればいいか？』

メルのアイコンタクトに対して間拔けな返事をする俺。

メルに続いてエリスも口を開く。

「良いんじゃない？この子強いし！今日だってボカーン！って変な人やつつけたしね。それに可愛い子は崖から落とせ！って言うじゃない？」

なんだその言葉は。この世界のことわざなのか？獅子みたいな考え方だなオイ。

「村から出たこともない子をいきなりそんな所に行かせるなんて！それに遠くへ行ってしまうって、この子に悪い虫がついたらどうするんだい！」

なかなか賛成する気になれないモルドー、声が次第に大きくなる。

七歳の子供に悪い虫が付かないか心配するなんて、こんなんじやあメルがお年頃になつたらと思うと見てられないな。

それに悪い虫はついてないが、もう変な悪魔なら憑いているぞモルドーよ。

「すまんが、話は決まったかの？」

ドアの隙間から村長のジジイが顔を出して結論を急かしている。

「村長〜！ 私行きますっ！」

急かす村長のジジイにメルが答える。

「ええーっ！メル！知らない土地に行くって事がどんなに危ないか分かってるのかい？メルが強い子なのは父さんも分かっているけど、それでも父さんは心配だよ！」

突然のメルの言葉に目を大きくするモルドー。

「行ってらっしやい！」

モルドーを尻目にエリスが言う。

エリス、お前はもうちよい心配しろよな。

「決まったようじゃの。メルよ、急ですまんが明日の朝には向かってもらうのう。今夜の内に服などは準備しておいてくれんか。食べ物も村で用意するでな。」

村長のジジイはモルドーを無視して話を進めだす。

「ちよ、ちよつと村長ー！」

「うぬう、お主の心配も分かるが……。そうよのう、メルを行かせてくれるなら村から礼金を出すことにするとしよう。そんなことくらいしかできんが」

村長のジジイはモルドーを金で買収する作戦だ。

「いや、村長ー！お金の問題じゃなくてですね？メルに何かあつたら大変という話ですー！」

モルドーは金の誘惑にも負けず食い下がる。

◇

ルベルアはいつもと違うモルドーの姿に、少し感動していた。

今日のモルドーはカッコいいじゃないか！そりゃ村から始めて行く冒険地で浮遊城は無いよなあ。

行くのが愛娘となれば尚更だ。

浮遊城なんてゲームなら、後半のイベントで行く所だしな。

初めのうちにそんな所に行っちゃイカンだろう。

初めの冒険は近くの洞窟とかの雑魚退治にしようぜ。

ともかく今日のモルドーは正論を言ってるぞ！

◇

「ふうむ…。仕方ないの、もう一度村の連中と話して来るとしよう」

村長のジジイはモルドーに根負けしたようだ。

これで今回の話は——

「モルドーさああああん！居ますかあああ!?!」

この声は…。

メルとルベルアに「ザワツ」とした感情が湧きあがる。

「モルドーさん！あのねえ！あの天使族に聞いたんだけど、ウチの宿壊したの、メルちゃ

んなんだってなあ！

いやー私もね、子供のしたことにあまり大きい事言いたくないんだけどさ！

ウチの壁だけじゃなく、大事な柱までやられちゃってるからこれはマズイってんで言いに来たんだよ！」

宿屋の親父が現れたっ！

宿屋の親父はターゲットをモルドーに絞り、突っ掛かる！

突然の話にモルドーは目をパチクリさせて言った。

「えっ!? 宿屋の旦那さん!? 一体、なんのはな…」

「えっ!? とかじゃなくてね！ 建て替えたばかりのウチの宿が壊されちゃったの！ メルちゃんに！

ただ、わざとじゃないみたいだからさ！ 全部直してくれるならそれで良いから！」

モルドーの言葉を遮ってまくし立てる宿屋の親父。

知らぬ話の内容と、宿屋の弁償にかかる金額がどれ程か分からない恐怖でモルドーとエリスはお互いを見つめ合う。

——と、モルドーとエリスが同時にメルに問いかけた。
「メル？本当なの？」

メルは一瞬俺の方を見たが、すぐにモルドーとエリスの方へ向き直す。

「私そんなの……知らなかったの……。ごめんささい！」

まるで本当に知らなかったかのように、メルは泣きそうな声で二人に謝った。
なかなかの演技派である。

「うちはそんなにお金も無いし、同じ村の人に迷惑もかけられないし」

モルドーとエリスは困った顔をしながらヒソヒソと相談している。

「ウチも建て替えたばかりだから、〃気にしなくて良いよ〃とは言えないんだよなあ！
すまんけども！」

宿屋の親父は更に追い込みをかけている。

モルドーとエリスは先程より大袈裟に困った顔をして見せた。

ここまで大袈裟だと馬鹿にしているようにも見える。

し、
モルドーは自分のおでこを見ているかのような上目遣いで下唇を突き出した表情を
わな顔を見せている。

馬鹿にしているように、と言うか。
間違いなく馬鹿にしてるだろコレ！

「そんな顔されてもねえ!!」
宿屋の親父はやっぱり怒った。

——その時、一人のジジイが流れを変えた。

現れた村長のジジイが囁いた

「モルドー殿、あの話受けてくれるならば村のお金で代わりに宿を直しても良いんじゃないぞ」

その言葉にモルドーとエリスは変な顔を止めてまた二人で見つめ合うと、急にそそく

さと動き始める。

「はい、メルちゃん。これにクツキーとお水入れておくからね、忘れないようにね！」
エリスが小さな鞆をメルに手渡す。

「メル、これは小さな剣だけど壊れた木刀よりはずっと丈夫なはずさ。護身用に持つて行きなさい。」

モルドーが暖炉の上に飾ってあった刃渡り50cm程の短剣をメルへと渡し、肩をギョツた抱きしめた。

村長のジジイは二人の様子を見てニヤリ、

「ほっほ、宿屋の主人よ、そういうことじゃ。宿は村が直すから気にせんでええ。」

村長のジジイの言葉に納得したようで、やっと帰っていった宿屋の親父。

——村長のジジイとの話も済み、すっかり冷めてしまった晩御飯を食べ終えた後の語らいのひととき、

モルドーとエリスは口を揃えて言った。

「メル、明日は気を付けて行くんだよ！」

「う、うん。分かった。」

そう、大人というのは理不尽な生き物である。

1 1 どうしてソウナルの。

天使族の城へ行くことになったメルは、まるでピクニックにでも行くかのようにウキウキと準備をしている。

—— コン、コンツ！

誰かがドアをノックするがモルドーとエリスの二人は教会で安全祈願をするといつて出掛けており、家にはメルと俺しか居ない。

『誰か来たぞ』

「もうっ、面倒くさいなあ……」

そう言いながらメルは玄関へと向かって行く。

どうせまた村長のジジイだろう。

—— カチャ、「どなたですか？」

そこにいたのは村長のジジイではなく、メルより3つ年上の男の子だった。

男の子の名はバース、暗い青の髪に黒い瞳が特徴的な村の子供の中では希少なしつかり者タイプの少年である。

キリツとした顔立ちがイケメンオーラを出している小生意気なクソガキだ。（※個悪魔的なイメージです）

チツ、イケメンがうちのメルに何の用だ！帰れ帰れ！

その後ろには付いてきただけなのだろう、メルより小さそうな男の子が突っ立っている。

バースの弟であろうか、目の色は同じだが黒い髪をしており、間抜けそうな顔をして鼻に指を突っ込んでいる。

「メル。あのさ、遠くへ旅に行くんだって？」

バースは小さな声でボソボソとメルに聞いた。

ん？この感じ。何かザワザワした甘酸っぱい感情が俺の中から込み上げてくる。

メルは「うん」とだけ言った。

「あ……。えつと……。危険な旅になるの？」

やつと出た言葉を心配そうな顔で口にするバース。

「さあ？」

メルは短く返すと、首を傾げ、両方の手の平をパツ見せる “分かりませんポーズ” をバースに見せた。

なにやら俺の中で、先程までとは違う感情が湧いてくる。

頑張れ、バース！

バースの奮闘を知ってか知らずか、後ろの男の子は鼻に指を突っ込んだまま。

「あ、あのさ。僕、年上なのにメルよりすごく弱いけど…それでも役に立てる事もきつとあるから……だから僕も行くよ！」

バースの頬が紅く染まる。

見直したぞバース、お前は頑張った！

二回も受け流されたのに良く言った!!

お前がついて来るなら、俺がお前も守ってやるよ！

「いや、無理でしょ……。来なくて良いよ。」

はい、ムリー。バース君残念！

メルももう少し歯に衣をとるか、やんわり言ってやれば良いのに、冷たすぎるよな。

それとも、七歳にして魔性の女なのかっ!?

そりゃあ、メルに比べたらバースなんてポンコツのガラクタで使えないクソ団子だよ。

おつと言い過ぎた。

「けど、僕はメルが好きなんだ!!心配だからついていきたいんだよ!」

今日一番の男らしさを見せたバース。

なんと！この子言ったでええええ！おっちゃん応援したる！

「そう、私まだそういうの要らないから。ごめんね。」

悩む素振りも見せずに即答するメル。

バースの顔が一気に暗くなる。唇を噛み締めて、泣くまいと堪えている。

バース、初恋つてのは焦げたゴーヤより苦いよな。

俺も恋愛には苦い思い出しが無いよ。

しょんぼりするバースの後ろで男の子が鼻に指を突っ込んでいる。

いい加減に鼻から指出せよな！

「じゃあ私、準備があるから」

そう言つてメルは自分の部屋へ戻つていった。

その場に残されたバースは見てるこつちが切なくなるくらい涙を堪えている。少年よ、可哀想だが恋した相手が悪い。

あの娘は少年が思ってるよりずっと年上なんだ。

バースは目を一度だけ擦ると、後ろの男の子に声をかけた。

「兄ちゃん、フラレちゃった。……帰ろうか、マドカ」

男の子は返事もせず、歩き出したバースの後ろをついていく。

あれ？今マドカって言ったか？

この世界で俺と同じ名前が居るとは珍しい。

しかも鼻に魔物が潜んでいるような子供だったし。

おし、切ない気持ち切り替えて外でも見てくるか！

スイーーン！

「ちよつと待つて！準備終わったから私も行くー！」

そう言いながらメルがドタドタと走ってきた。思つたより荷物は少ないようだ。

『おう、しかしバースはあれで良かったのか？まあ、俺が口出すことじゃ無いんだがな』
メルの荷物を軽く浮かせながら野暮な事を聞くルベルア。

「うん。私、前世から男性不信だからあれで良いの」

メルは少し俯き、口を尖らせた。

男性不信になった理由は……、聞かない方が良さそうか。

メルは以前から前世の事をあまり話したがらないが、それも何か関係してるのかな。

『そうか、なら仕方ねえな！』

ルベルアは自分の手をひとつ増やすと、その手でメルの頭をワシワシと撫でた。

それを少し鬱陶しがりながら苦笑するメル。

二人がそんな事をしながら歩いていると、村長のジジイの家の前まで着いていた。待ち合わせ場所だ。

「おお、来たのうメル。待つておつたぞー！」

村長のジジイは今日も声がデカイ。

その場に居たのは、事の発端であるテストアント、モルドーとエリスの二人はもちろん、村の命運を背負った状況であるメルの旅立ちを見ようと集まった村人達。

モルドーとエリスはメルへ近づき、お守りと服の上から羽織るローブをメルへと手渡した。

ローブは赤と黒を基調としており、テストアントの服の色合いと少し似ている。

メルへ手渡す際にモルドーとエリスは――

「これは朝、教会でお祈りをして頂いてきたお守りだよ」

「こつちのローブはね、その時にミルザから頂いたのよ、昔ミルザが使っていたんですつて」

——と言いなぎらメルのことをギユツと抱きしめた。

「わあ！ありがとうございます！！私、お守りもローブも大切にするね！」

お礼を言うメルの表情は眩しい笑顔だ。

バースに見せた氷の表情とはまるで別人である。

それに騙されるチョロいモルドーは愛娘に抱きつき、眼鏡が壊れる勢いで頬擦りした。

「絶対に無事に帰ってくるんだよ！メルが無事なら村なんて滅んでもいいんだからね！」

いや、それはダメだろ…。

エリスは他の村人と笑いながら話している。全く、どれだけメルを信頼してんだか。

「準備は宜しいでしょうか？宜しければ出発するとしましょう」

待ちくたびれたのかテストアントが出発を促す。

『そーいやどうやって行くんだろーうな？歩いてくのか？聞いてみてくれよ』
気になったのでメルに聞いてもらう。

「テストアントさん、テストアントさんはお空から飛んで来たけど。またお空を飛んでお城まで行くんですか？」

メルはここぞとばかりに子供っぽく聞く。

聞かれたテストアントは少し口角を緩め、

「ええ、そんなところですね。村はずれの広い場所まで行けば分かりますので、そろそろ出発しましょう」

そう言い、村の北側へと歩き出した。

村の南にはウラド山脈がそびえるが、北側にもツナウという山脈があり、陸路での道は直接北側へは通じていない。

まっすぐ北に向かうってことは、やっぱり浮遊魔法とかがあるのか？空からやって来たしな。歩きじやなくて良かったぜ。

集まっていた村人を含めた集団が、北側の村はずれ目指してぞろぞろと練り歩いて行く。

30分は歩いただろうか、周りにもう家などは無い。

「ここらならば良さそうですね。皆様、私から離れていて下さい」

おもむろに場所を決めたテストントが歩みを止め、村人達に言った。

なんだなんだ、何をするんだ？なんか俺まで緊張してきたぞ！

テストントが大きく息を吸い、集中しました。

期待と不安で緊張し始めたルベルアも、緊張を解くべく大きく息を吸った。

スウウーッ!!

テストアントが魔力を解き放った！

「ドラゴフォーム！」

テストアントが魔法を唱えると共に辺りは閃光に包まれる。

その場の空気も振動し、軽く砂埃が舞った。

コイツは砂埃をたてないと気が済まないのだろうか。

「……」

砂埃の中から聞こえた何かの鳴き声。

メルや村人達がゴクリと息を飲む。

そして、それは砂埃の中から姿を現した！

ルベルアはその姿に衝撃を受けた——。

これは……！ドラゴン!!?ドラゴンなのか!?

ドラゴンにしては……小さすぎる！

ミドリ亀の赤ちゃんくらいの大きさだ。

東京ドーム1／5000個位だ。つっても、もちろん適当だ！

何でもかんでも東京ドームの数で言いやがって！

都会の悪魔共があ！

あつつ、今はそんな話じゃなかった。申し訳ない。

小さすぎないかコレ、「ピエー！」とか言われても何言ってるのか分かんねえな。一応、羽はあるみたいだが。

困惑するルベルア——。

近くへ見に来た村人達も、残念な雰囲気でトカゲを眺めている。

「多分、乗れって言うことだね？じゃあ皆、行ってきますー！」

メルはそう言うのと、三センチ位しかない「テストントドラゴン」に飛び乗った！

——ズシツ！

「プギイ——！！………ピイ………」

血反吐を吐いて動かなくなったテストアントドラゴン。

——えっ？ 死んでる!?

天使使族さああああああああああん!!

ルベルアの心の声は空虚くうきよに響いたのであった。

1 2 カンドウの瞬間。

——小鳥の鳴き声が聞こえるワルプ村北のはずれ。

喉かな風景にポツリと存在している悲しきトカゲの亡骸。

メルは黙祷を捧げた。

ああ、テストアントさん、貴方は結局よく分からないキャラのまま逝ってしまいましたね……。

『いやいや待て待て！まだ助かるはず！というか助かれ！』

しかし、テストアントドラゴン”は今にも命の灯火が消えそうだ。

可愛らしく囁く小鳥の餌になるのも時間の問題である。

『おいおい……どうするよ!?ミルザも来てないし、俺はメル以外の奴に回復系魔法が使

えないし』

ルベルアはそう言いながら一応周りを見渡すがやはりミルザは来ていない。

メルは無惨な姿となったトカ……、テストントをマジマジと眺めながら言う。

「ルアさん、私がヒールするからルアさんの魔力と一緒に重ねられないかな？」

確かに俺の魔力量をメルの魔法に重ねて使えるなら、メルのヒールでも強力な効果を出せるかもしれないな。

『よし、やってみるか！』

メルの体と俺の魂は繋がっている。

なのでメルの魔力の流れを見つけて、そこに俺の魔力を重ねてやれば良いんだな。

でも魔法を使うときにメルが必要とする魔素はエレメントで俺はエレメントとマナの両方、

メルの体にマナが混じっても体は大丈夫なのか？

いや、考えても仕方ない。今は集中しなきゃ！

ルベルアが集中する中、詠唱を始めるメル——
「癒しの女神よ、我に奇跡の力を授けたまえ！」

あれ？前の時と詠唱の言葉違くないか？
つとと、もつと集中しなくちゃ！

メルは渾身の魔力をトカゲに向ける、その手の平からは緑の光が滲み出している。

ルベルアの集中力も最高まで高められ、メルの中にある魔力の流れから本流を探
す。

メルが叫んだ——

「ヒ——————ル!!」

その瞬間ルベルアは、メルの魔力の流れのひとつが一気に太い光の線となるのを感じ
取り、

ルベルアがそこに魔力を流し込むとメルは魔力の流れが爆発的に大きくなった。辺り一面が緑の閃光に包まれる。

— !

眩しい程の光が消えた後、皆の目に映り込んだのはペタンと座り込んだテストント、傷はどこにも見当たらない。

どうやら、トカゲの墓を作る必要は無くなったようだ。

周りで見ていた村人も「腰痛が取れたー!」とか「ずっと痛かった肩が治った!」等と騒いでいる。

『メル、大成功だな!』

俺の言葉にメルの返事が無い。

『メル!?!』

ルベルアが見ると、メルが頭を押さえて蹠っていた。

「テストントも未だ動けないでいるが、今のルベルアにはそれを気にする余裕が無い。『メル!? どうした! 大丈夫かつ!!』」

俺は焦った! とにかく焦った!

「う、うん……。ルアさん……。頭が、痛くて……」

メルの意識はあるようだが、辛そうに両手で頭を押さえている。

焦るルベルアが辛そうなメルへと両手をかざす。

効果が有るかは分からないが一か八か、

『アドレオール
リジエネイション痛覚麻痺! 再生強化!』

ルベルアは祈るように魔法を唱えた!

—。

「あ……。治ってきたかも」

『おお！心配したぞ！おあつ？』

立ち上がるメルを見ていたルベルアは、メルの眼がいつもと違う事に気付く。

メルの眼がオッドアイになっていたのだ。

元々、両眼とも綺麗な青だったメルの眼が、右眼だけ淡い紫色に変わっている。

メルの魔力の流れにルベルアが大量の魔力を直接入れたのが原因なのかもしれない。

『メル！お前の眼、右眼だけ淡い紫色になってるんだが体の調子は大丈夫か？眼は見えるか？』

心配し、続けざまにメルへ質問を投げ掛けるルベルア。

「うん、ありがとう。もう大丈夫みたい。右眼だけ？すごい、オッドアイじゃん！青い眼も好きだったんだけど、とにかく見えてるし眼は大丈夫みたい」

メルはそう言いながら「パンパンツ」と膝元に付いた埃と草を払った。

見た感じフラフラしてないし、もう大丈夫かな。とりあえず眼はしばらく様子を見る
とするか。

さて、テストントは？

思い出したようにルベルアがテストントの方を見ると、テストントは村人達に介抱されていた。

「テストント殿、大丈夫ですかの!？」

村長のジジイがテストントの耳元で大声を出している。

あんな耳元で……なんて迷惑極まりないジジイだ。

「は、はい……。一体私に何が起きたのか、こんな事は今まで無かったのですが……。詠唱を終えてからの記憶が無いので、すみませんが何が起こったのか説明して頂けますか？」

そう言いながらテストントは立ち上がったが、少しふらついている。

「ふうむ！そうじゃのう。テストント殿に離れてろと言われたでな、ワシは500メートル程離れていたでの。

だから良く見えていた訳ではないのじゃが、光に包まれてからお主は消えてしまったんじゃ。

その後、何故かメルがお辞儀をして地面に座ったんじゃ」

村長のジジイは自分から見えた光景をありのまま話す。

が、先程の出来事が見えても聞こえてもいかなかった様でテストントを理解させるのは無理な内容であつた。

村長は何故、500メートルも離れたのかは誰にも分からない。

「光つたということは魔法は……。いや、魔法自体を……。ううむ……。しかし……」
テストントは話を聞きながらブツブツ言っている。

村長のジジイは話を続けた――。

「その後突然メルが慌てはじめてのう、なにやらブツブツ言つた後に地面に向かつて魔法を使つたんじゃ。

それは大きい範囲のヒールじゃつた、するとお主がまた出てきたという事じゃ！
それ以外の事はワシには分からんよ」

村長のジジイは身振り手振りを混ぜながら自らが分かる全ての事を話した。

そこにメルが加わり話を付け足す。

「えーとね、テストントさんはすごく小さなドラゴンになつちやつたんです。それに

乗るのかと思って跨がったら潰れちゃったんです、ごめんなさい」

プギイー！とか言ってたな、よく復活したもんだ。

テストントはメルの言葉を聞き、またブツブツと考え始める。

「なるほど、やはりドラゴフォームに失敗したようですね。私に残った最後の記憶だと、詠唱の時に一気に私と周囲の魔力が枯渇したようで、

その原因は不明ですが魔法発動の瞬間の魔力切れでドラゴンになりきれず、小さな姿になつてしまったと考えられます。

しかし何故……。ともかくドラゴフォームが使えない状態で浮遊城へ向かうには……」

難しい顔をしたまま、悩むテストント。

あれ？詠唱の瞬間の魔力切れ……。？そう言えば、何か心当たりがあるような。

あつ!!緊張して超大量に空気を吸ったような……。俺が空気を吸うと……。

途端に挙動不審になるルベルア。

そんなルベルアに斜め後ろから痛い程の視線を送る者が居た。

「ルアさん、急に慌て出してみたんだけどどうしたの？」

テストントさんが魔法失敗したのって、あの瞬間にテストントさんと辺り一面の魔力が無くなったからなんだってさ。

ルアさん……、何か知ってるんじゃない？」

オツドアイへと進化した7歳女兒は小声だというのに迫力も以前の1.2当社比倍だ。

メルに問い詰められたルベルアは笑って誤魔化す。

『いや〜、ハハハ。わざとじゃ無かったんだよ』

何があつたかは言わずに、少しの間この場所から離れておくとしよう…。

ルベルアは離れた場所へ飛んでいった――。

その後ろ姿を確認するように眼で追うメル。

ルベルアが遠くへ行ったのを確認したメルは、混乱しているテストントに声をかける。

「えっと、テストントさん！もう一度魔法を使ってみて貰えませんか？

きつと次は大丈夫だと思います。私、先程ヒールを使う際に魔力を使いすぎちゃつて。

その時に余分に溢れた魔力はまだ周りにあると思うので」

メルにはもう、テストントの失敗の理由が分かっていた。

「むう、メルや！その眼はどうしたんじゃ!？」

「わっ！本当だ！メル、その眼はどうしたんだい!?ちゃんと見えてるのかい?痛くないかい?」

「あらあ！メルちゃんその眼、とっても素敵じゃない！凄く綺麗！」

村長のジジイとモルドーとエリスがぐいぐいとメルに近寄り、話に横槍を入れる。

「うん！見えてるし、痛くないし大丈夫だよ！皆、テストントさんがまた魔法を唱えるから離れて！」

そろそろ出発したいメルは、半ば強引に三人を押し返す。

余り時間をかけたらルアさんが戻って来るかもしれないし。

そうだったら、またテストントさんがピクピクする事になるかもしれない、それだけは避けなきゃ！

テストントは少し不安な顔をしながらも、メル提案に頷いた。

「やってみましょう、村人も離れてくれたようですし。ただ、メルさんには言っておきましよう。」

今から使う魔法は私の体をドラゴンに変化させる魔法なのですが、通常だと翼を合わせ約十メートル程の大きさになります」

テストントの言葉を申し訳ない気持ちで聞くメル。

あ、そうですよね。

ちよつとおかしいなあとは思ったんだけど……。

さつきは踏み潰してごめんね、テストントさん。

「はい！分かりました！」

メルは返事をしながら大きく頷いた。

テストタントは自分の魔力を確認し、魔法を詠唱した。
「では、行きます。ドラゴフォーム!!」

カッ——!!閃光が辺りを包む。

バサッ!!——空を叩く轟音と共に砂埃と草が舞い、周囲からの視界を塞いだ。

——やがて視界が開けると大きな白い竜がそこに居た。

「成功です」

謎の音が響く。その声は特徴的だがテストタントより低い声、
そう「テストタントドラゴン」の声だ。

「わあ!凄いい!!竜なんて初めて見ました!!」

私は本当に感動した、自分の目の前に竜が居るのだから!

元の世界では架空の存在であり、それでいて数多の物語や映像に使われるあの竜がいや、実際は小さいドラゴンをさつき見たけど、あのトカゲはノーカンだし！
大きなドラゴンはもう、本当にすごいっ！！

メルは眼をキラキラさせて興奮している。

メルだけではなく、村人達も大歓声を上げて騒いでいる。

——すると、テストントドラゴンの成功に気付き、ルベルアが戻ってきた。

ルベルアも一目見るなり大興奮、

『ふうおおおおおお！スゲエエエエ！カツケエエエ！竜だぞ！これが竜だぞメル！！
すげーよ！練習すれば俺もなれるのかな！？ハア、ハア！ムハー！』

俺はこの世界に転生できて良かった！

心からそう思えるほど感動している！！

「ちよちよ、ちよつとルアさん、あんまりハアハアしないでね！気持ちちは分かるけど、ね

!？」

メルは小声で興奮するルベルアを制止した。

メルの声に、ルベルアは「ハッ」となる。

確かに、またテストアントがドラゴンから小鳥の餌に降格するのはマズイ！気を付けなければ。

——バサッ!!

テストアントが出発を促すかのように翼を羽ばたかせる。

その羽ばたきでまたも砂埃が舞う。

いい加減しろよコイツ！何回うちの可愛いメルを砂まみれにすれば気が済むんだ！

トカゲにシテヤロウカ!!

いや、落ち着け俺！ドラゴンのカツコ良さに免じて許してやろう！

「行きましょう、さあ乗って」

テストアントドラゴンはメルが乗りやすいように気遣い、片翼を地面につくまで下ろした。

「はいつ！失礼します！」

ダンツ！——スタツ！

返事と共に勢いよく地面を蹴り、テストアントドラゴンの背中に飛び乗ったメル。テストアントドラゴンの気遣いは無駄に終わってしまった。

すまん！うちの子、そういう所あるから！！

「フフ、元気が良いですね。ではしっかりとお掴まり下さい！」

赤と黒の瞳でメルが乗ったのを確認し、羽ばたき始めるテストアントドラゴン。

バサツ！！バサツ！！

テストアントドラゴンが浮き上がっていく——

「皆あ——！行ってきたま——す！！」

メルは集まっていた村人達に大きく手を振る。

それを返すように村長のジジイ、モルドー、エリス、そして村の皆が盛大に拍手をして手を振った！

段々と皆が小さくなっていく。

おや、あそこに居るのはバースじゃないか！

見送りに来ていたのか、一途ないい子だ。

と、弟も居るなあ。むむむ…。

『サイドアイ視力強化！』ルベルアは自身に強化を使った。

………！

やっぱりに鼻に指突っ込んでる！！

雰囲気台無しだよ全く！！

色々あったがこうしてメルとルベルアは天使族の住む場所『浮遊城』へと向かい飛

び立ったのであつた――

1 3 命のオンジンはアナタ。

エンドルゼア東、そこには異常なまでに興奮する小さな女の子と悪魔の姿があつた。

「すごーい！景色が綺麗ー！ー！うわあーい！」

『俺たちは竜に乗っている!! 竜だぞ!! ヒヤッハー!!』

テストントドラゴンに乗りワルプ村を飛び立ったメル（と、自分で飛べるくせに乗っている悪魔）は北にそびえるツナウ山脈へと差し掛かっていた。

『プルルルルルウィツファイー!』

「ウイイイイッヒイー!」

「あの、喜んで頂けて私も嬉しいのですが、もう少し静かにして頂けますか? 何せこの姿だと聴力が普段よりかなり高いものでして」

特徴的な低い声で言うテストントドラゴン。

ルベルアの声はテストアントには聞こえないので、メルは一人でアホみたいにはしゃいでいた事になる。

「あつ、すみません……」

耳まで真っ赤にして謝るメル。

しかしそれでもこの興奮は冷めるものではない。

ドラゴンの存在しない世界から来た二人にとっては夢のような出来事なのだから。

「テストアントさん！本当にすごいです！！もうツナウ山脈の山頂を越えるんですね！」

「フフ、せっかくですので少し山肌を掠めながらツナウ山脈を越えて行きましょうか！
しっかりとお掴まり下さい！」

何だかんだ言いながら上機嫌だな、テストアントドラゴン。

ニクい演出じゃないか。

「わあ！低空飛行ですね!!見たいです!うわあ!わくわくするー!」

メルはテストタントの提案に喜び、しっかりと掴まりながら明るい声を出した。

キイイイイン!——

風を斬って降下して行くテストタントドラゴンが尾根のすぐ上を狙って飛んでいく!

尾根は早送りの映像のように近づき、その尾根の上スレスレをテストタントドラゴンが飛び抜けた!

バツチイイイン!——

ん?

尾根を通りすぎる瞬間に何か聞こえた気がするが…。

「い……っ痛いー!!何か当たったー!痛いよー!」

酷い音の後に、おでこを押さえたメルが痛がり始める。

「むっ!?!どうしましたか?」

「ふええん、何か硬い虫みたいなのが顔に当たりました……」

オッドアイを涙でシヨボつかせて答えるメル。

気づけばメルのオデコの真ん中が赤くなっており、

まるで額の秘孔でも突かれたかの様だ。

「なるほど、地面が近いと虫が居ますからね……、上空に戻りましょう」

テストントドラゴンは少し申し訳なきそうに言った。

初めてドラゴンに乗ったメルの思い出は、オデコに硬い虫がぶつかった記憶として残ることだろう。

メルの興奮は完全に冷め、

黙りきって死んだ魚みたいな目をしている。

下を見渡せばワルプ村側とは反対側のツナウ山脈北側の景色が広がっている。特に気候が違うわけでは無さそうだが、ツナウ山脈南側よりも緑や木々が多く感じる。

『なあ、メル！あとのくらいで城につくのか聞いてみよーぜ？』

「えー、別にいいよ。そのうち着くでしょ…」

俺の声に素っ気なく返すメル。

テンション下がりがりすぎだろ！怖いわ！

「そうですねえ、後少しで見えてくると思いますが」

聴力の上がつているテストアントドラゴンはメルの「一人言」が聞こえたようで、到着時間を教えてくれた。

5分……

10分……

ルベルアの体内時計はかなり正確だ。

『メル、トイレは大丈夫か？』

「うん」

20分……

たまに小さな村が見えたり、湿地が見えたりしていたが、緑の多い地はまだ続いている。

30分……

またひとつ小さな山を越えると、少し岩場の割合が増えた。

40分……

つて：…おいおいおい！テストントさんよおー！

何が後少しだコンチクショー！

もういつそこでお前を叩き落として自分で飛んで行こうか？

アアン!?とか言っつてやりたいが、我慢するか……。

約1時間……

「さあ！見えてきましたよ！あちらが我が主君の治める浮遊城です」

そう言うテストアントドラゴンの声は少し高く、嬉しいのが俺にも伝わってくる。

「……………」

メルは険しい表情をしたまま、唇を噛み締めて押し黙っている。

「フフ、少し時間がかかってしまったので疲れてしまったのですね？城に着きましたら主君に合う前に少し休憩致しましょう」

黙っているメルの気持ちを察してテストアントドラゴンが声をかける。

少し時間がかかってしまったので。じゃないよ！

お前は5分つったんだぞ！5分て！

あれから一時間は経つとるわい！

「……………て」

ん？

「はや……て」

『メル？何か言ったか？』

「早く降りて！って言ってるでしょーオオオ!!」

突如として鬼の形相で咆哮したメル。

メルの小さな体からは想像できないほどの音量は、まるで魔法が使われたかのように音の衝撃波を作り出す。

『おおっ?!』

ルベルアも驚き跳び上がった

「プギイイイイイイ！」

メルの超音量の咆哮にテストアントドラゴンの鼓膜が破れ、耳から血を出し叫び声を上げた。

テストントドラゴンはそのままフラフラと浮遊城めがけて落下して行く。

「……………!!」

メルの様相は依然として鬼のままである。

よく見ると両手でお腹の下の辺りを押さえている。

えっ!?まさか!?メルの奴……。

と、とにかく!この状況を何とかせにやー!!

ルベルアは魔力体である自らの体に力を巡らせた。

気を抜いてすり抜ける事のないように、イメージは巨大な手と翼!

グググ!変化してゆくルベルアの体――

『ガアッ!!』

ルベルアは巨大化させた手で落ち行くテストントドラゴンを“ガシッ”と鷲掴みに

し、メルをもう片方の手で「ふわっ」と掬うように掴み上げた。

——落下が早い！

ぐう、しかも握り潰さないように加減するのが難しい!!けど、失敗する訳にはいかん！

——ブワッ！作り出した翼を広げる

少しでも落下の勢いを殺して浮遊城に着陸出来れば良いが——

粘るルベルアをよそに、浮遊城は目前へと迫っている。

『ウオオオオオオ！』

——ブワアッ！ルベルアは浮力を高める為に限界まで翼を広げた

浮遊城は近づくと、かなりの大きさがあつた。

城の中に天使族と思われる人達の生活圏もあるようで、住人たちが不安そうに落下し
てくるドラゴンを見上げている。

『グギギツ！』

ルベルアは歯を食い縛ったが全ての勢いを消すことは出来なかった

ドオオツ…ン…！——

……。

『はあ、はあ、何とか…なったあー』

ルベルアは着地に成功した！と言って良いだろう。

ルベルアは、着地の直前に体の下の部分を伸ばし地面に突き刺した、それにより地面
にはボツコリと穴が空いてしまった。

とはいえ、テストアントドラゴンもメルも無傷で助けることに成功した。

いやー、危なかったー！…じゃない！

危機はまだ去ってないんだ!!

『メル!』

俺はただメルの名前を呼んだ、皆までは言うまい!

「ごめんなさい!」

メルがルベルアの手から飛び出す。

—

「すいません!トイレ貸してください!!」

メルは必死だった!誰がなんと云おうとメルは必死なのだ!

天使族の一人が全てを察してくれたのか、空からやって来た謎の女の子を怪しみもせずある方向を指をさした。

「トイレはあそこです!!」

メルはその場所を確認すると力強く地面を蹴った。

もはや「走ると出ちゃう」とかいふ次元では無いらしく、もの凄いスピードである。

「もう少し!!」

メルが叫んだ――

ルベルアもメルの背中を押すように叫んだ!

『行っけえええええ!!』

――少ししてメルは申し訳なさそうに戻ってきた。

『お帰り、無事に済んだようだね。さて、メル君。』

君はアレかね? 漏らすくらいなら天使の一人や二人、亡き者になっても良いという考えなのかね?』

わざとらしくメルに問いかけたルベルア。

「ううっ…、ごめんなさい…。」

まさかあんな事になるとは思わなくて…。」

メルは萎びた風船のような顔をして謝った。

そして「ハッ」として周りを見渡す。

「あれ、ルアさん…テストアントさんは何処？大丈夫なの？」

『ん？ああ、魔法解除（ディスプレイマジック）でテストアントのドラゴン状態を解除したら天使族の人が駆けつけて来てな、どうやら医務室に連れてったみたいだぞ』

その時の天使族の女性は綺麗だったなあ。ムフッフ

——と、治療を終えたテストアントも戻ってきた。

メルの事を恨んでなきや良いんだが、

あの状況だから怒ってるかもなあ。

「テストアントさん！私、あんな事になるなんて思わなくて！ごめんなさい！」

戻ってきたテストタントを見るなりメルが謝った。
するとテストタントは言った。

「メルさん、あなたの所為ではありません！むしろ貴方は命の恩人です！」

『えっ？』『えっ？』

続けるテストタント——

「確かにメルさんの声で私は耳をやられました、しかし鼓膜など回復魔法ですぐ治るものです。問題はその後です」

『…………。』『…………。』

「あの時、私は何者かにより体の自由が奪われたのです！抗えぬ程の強大な力で！恐らく伝説の12神の悪戯か、何処かの強大な魔族の仕業でしょう。

あなたが落下の衝撃を和らげていなければ私は確実に死んでいたでしょう。

本当にありがとうございます……！」

「う…え…つと。気にしないでください…」

メルはそう言いながらルベルアの方をチラツと見る。

『あの時、コイツはメルの声で完全に気絶したよな？』

耳からドバドバ血を流してさ！おまけにトイレ以下の存在にされてよ？へえー、そっかー。俺は悪者かー。』

ルベルアは不貞腐れた。

そりゃ、俺なんて影状態から実体化しても結局メル以外の奴は俺の姿が見えないよ。それは分かってるさ。

けど、あんなに頑張ったのに悪者扱いは酷いよなー。

そんな俺の様子を見たメルが、身振り手振りで…

“私は分かってるから！”

“ルアさん頑張ったから！”

“ルアさん、大好き！大人になったら結婚して！”

という仕草をしている。

あ、いや最後のは違うか。

んー、まあメルが分かってくれてるなら良いか。

それにメルが天使達から恨まれる事になったら大変だったしな、うんうん。

そうだ、俺は器は大きく、心は広く！良い悪魔なんだ！

気を取り直したルベルアは、メルに優しい言葉をかけた。

『まあ、俺はメルが——』

「しかし、あの様な感覚は初めてでした。あー、おぞましい！まだザワザワしますよ気持ち悪い」

——無事だったからそれで良いさ』

だがルベルアの言葉に被せる様に、テストントがその身に感じた嫌悪感を伝えた。

『……………。』

「……………」

ダアれが命の恩人だと思ってるんじゃない！

このクソピクピク天使野郎がああああ！

握り潰してやろうかクルアアア!

怒り狂う悪魔を尻目にうつすらほほ笑む女の子が居た。

(はあ、怒られなくてよかった!)

1 4 威厳は時に暴力とナリテ。

ここはワルプ村からドラゴンに乗って片道2時間40分、

天使族の住む地 『浮遊城』

浮遊城には、城だけでなく城下町も含まれており、

島の端に行かない限り浮いている島という感じはしない。

島が空を動いているわけでもなく、800年程前からずっと同じ場所で浮かび続けているとか、なんとも不思議な島だ。

この浮島の特徴としては、見上げる空が素晴らしく綺麗である。

何にも遮られずに、見渡す限り淡い青色が広がっているのは雲より高い位置にあるからであろう。

街並みも美しく、白い石畳の道や白い石壁の建物など、白い石が多く使われており、それが空の青と非常によく合っている。

俺の建築魂が刺激される町並みだ。

生活環境としては高度な位置にもかかわらず、酸素も薄くなく風が強いわけでも寒いわけでもないとメルが驚いていた。

この状態を保っているのは魔法や結界の類いなのだろうか。

島に住む天使族は動きを見る限り大人しそうな人が多く、

男は寡黙、女はおしとやか、といった雰囲気であるが実際はどうなのだろう。

見た目は人族と同じく十人十色、けれど髪が白と黒の混合色で眼が黒目の部分が赤、白目の部分が黒——というのは皆同じらしい。

天使って言っても、俺のイメージとは全然違う。

命の恩人を気持ち悪いとか言っちゃうような恩知らずな奴も居るしさ。
くっそー、テストントの奴。

いつかお礼を言わせてやりたいぜ！

メルがそんなルベルアを一瞥（いちべつ）する——

「ねえ、ルアさん！まだ怒ってるの？」

メルが上目遣いをしながら、キュツと脇を閉めてグーにした両手に顎を乗せる
超すーばーぶりっ子甘えん坊” ポーズで聞いてきた。

それを見たルベルアから、負のオーラが消えてゆく。

くう、色気ひとつ無い七歳のカギんちよなのに……中身が子供じゃないだけに女の武器を知ってやがるぜ、未恐ろしい奴め!!

『怒ってないわい!』

くうー、照れてしまったあ!

完全に俺の敗けだあ!

俺達がここで暇そうにしているのには訳がある。

テストントが先に主君の所へ報告に行き、調見の準備が出来たらメルを呼びに来る。という事らしいのだが、まだ暫くかかりそうだ。

『メル、まだ時間あるだろうし、ちよつと城下町を探検に行こうか』

「うーん、けどこの『鐘の広場』で待ってるように言われたし」

『それじゃあ、俺はちよつと見てくるわ!』

綺麗なお姉さんが沢山居るかもしれないしな、ククク。

「えー、待つてよ! 私も行くー!」

結局ついてくるんかい!!

城下町にはどこで仕入れてくるのかは分からないが、新鮮そうな果物を置く店や肉を置いてる店まで存在していた。

天使でも肉とか食べるんだなあ、なんとなくベジタリアンだと思ってたけど俺の偏見か。

『おつ、喰い物屋があるぞ、行ってみよーぜ!』

見つけたのは軽食屋といった感じの店。

「わっ、なんか良い匂いがする〜！けどルアさんて食べ物食べれるの？食べてる所を見たことないけど」

メルという言葉に固まるルベルア。

あれ？そういうえば俺ってこの7年ちよつとの間、空気だけで満足して生きてきたのか？食べ物に対する欲求は感じたことが無かったけど、

そのことにすら気付かず生きてきたなんて。

『メル、確かにそうだな。この体の所為なのか今まで食べるって事を考えたことすら無かったよ……。実際、物を喰えるのかも分からん』

「よし！じゃあ何か買ってくるから試してみようよ」

暫くして――

「買ってきたよー！」

メルが可愛らしい小瓶を持って帰って来た、やっぱり女の子だな、スイーツか。

『お帰り、なんだそれ？』

「えーとね、ラミスっていう鳥の肉を骨付きのままトロトロに煮込んだ物みたい」

そう言いながらメルはルベルアに小瓶の中身を見せる。

『おお、フルーツとかスイーツ系を買ってきたのかと思ったら、なかなか渋い選択だな！
見た目的にはトロトロに煮た手羽先って感じか』

「あつ、フルーツが良かった？私、手羽先って食べたこと無いから食べてみたかったの」
少し照れて頬を掻くメル。

『あー、俺の世界だと誰でも食えるくらい普通にあつただけだな。俺の知ってる味と似てるならきつとメルも気に入るさ！』

「あ、いや、うん……そう……なんだ。まあ、とにかく先に食べてみてよ。ルアさんって私にしか見えないけど、もしルアさんが物を食べれるなら他の人からは食べた物がふわふわ浮いて見えるのかな？」

んー、言われてみればそうなのか？

『まあ食つてみれば分かるか、どれどれ——』

俺は小瓶の中から鳥肉を取り出し、

トロトロとした肉が垂れ落ちる前にスツと口へと運ぶ。

モグ……モグ……。舌の無い俺にも味覚は……あるようだ。

少し塩味の付いた肉が溶けて口いっぱい旨味が広がる。

……ゴクリ！

『——んん、旨い！何故俺は今まで食事を忘れてたんだ、こんな楽しみを！この世界の料理も旨いじゃねえか！メルも食べてみるよ、イケるぞ！』

ルベルアは食事の素晴らしさを思い出した。

「う、うん！私も食べる！——もぐ…もぐ…。　　ごくん…。」

あゝっん！美味しい！もつと買ってくれば良かったあ！お金ならあるし、買ってこようかな」

メルはトロトロ手羽先をかなり気に入ったみたいだが、何かを思い出したようにルベ
ルアの方を「バツ！」と見る。

「うーん、やっぱり私じゃ分かんないや！もともとルアさんが透けて見えてる訳じゃな
いし」

『ああ、そう言えば周りから見たらどうなってるんだろうな。ちよつとあの人の前を
チヨロチヨロしてみるか』

あの人というのは、路地に設置されたベンチに座り本を読んでいる天使の女性、
色白な肌が日の光に薄く輝き、腰くらいまでありそうなツヤツヤした髪を頭の横で束
ねてある。

たまにそよ風がその髪を揺らすのが女性は気にせず赤い瞳で本を読む。

◆ 天使だ！

テスなんかかってエセ天使とは違う、本物の天使だ！

しかも、ワンピースのスカートである！

俺が彼女の前をうろつく、すると彼女には俺の姿が見えないので、宙に浮かぶ手羽先もとい「手羽先の亡霊」だけが見える！

え？ シュールすぎる？ そんなのはどうでも良いんだ。

彼女はそれに驚き後ろへひっくり返る。

そこが重要だ！

椅子に座るスカートの女性が後ろにひっくり返る、

すると素敵な光景が見えてくるだろう？

そう言う事だ…。

◆ 全ての神々は我が計算の前にひれ伏すが良い！

『じゃあ、試してくるわー！』

ちよつと緊張する、

スウーハアー！スウーハアー！

「ちよつと！こんな空の上で何かあつたらどうするの!?!スウハア禁止だよ！速く行つて
きつて！」

——女性の前まで来たルベルア。

まだ女性に反応は無い、というか彼女は本に夢中だ。

『全然みてくれないぞ?』

俺がそう言うのと、メルは女性に声をかける。

「あの、鐘の広場はどちらへ行けばありますか?」

すると女性は本を読むのを一旦止め、広場への道をメルに教え始めた。

ルベルアはその間に女性の目の前をこれでもかと、伝説の魔物「G^ジ」のように動き回
る！

しかし女性は一切反応せずニコやかに道を教えた後、再び本を読み始めた。

メルはペコリと頭を下げ、その場を離れた。

「食べた物も見えないみたいだね。え？ルアさん、なんでガツカリしてるの？見えない方が安心して食事できるじゃん」

メルがガツカリするルベルアを置いて、鐘の広場へと歩きながら言った。

クツソー、女子には分からないさ!!

——俺達が『鐘の広場』へ戻ってくると、既に待っていたテスタント。

「メルさん！何処へ行ってたんですか？我が主はもうお待ちですよ」

「ごめんなさい。少し街を見物してたら迷ってしまつて」

メルは咄嗟の嘘を自然に言える子に育つた。

「そうでしたか、貴方は私の恩人です。あとでたつぷりとご案内しますよ。ですが、今は謁見の間へ向かいますよう」

三度も殺されかけた相手を恩人と呼ぶテストタント。

城へ入ると、謁見の間への道は入り口から真っ直ぐに続いている。数人の天使族兵士が警護しているとはいえ簡単な造りであり、外敵の侵入などがあつた場合の守備が心配になる造りだ。

通路脇にある部屋にも沢山の兵士が居るのだろうか。

俺がそんな事を考えているうちに、謁見の間の入口へ到着した。

メルは少し緊張しているようだ。

それが伝染し、俺にも緊張が走る。

スウー、ハアー、スウゝゝギユウツゝ痛ツ！

メルが俺の尻（的 な位置）をつねり、キッ！と睨みつけた。

『あつ、ああスマン。スウハア禁止だったな』

深呼吸さえ出来ないなんて、俺にとって世知辛い世界だぜ。

「我が主！客人をお連れしました！」

——ギイイ。

テストアントが叫ぶと、謁見の間の扉が勝手に開いた。

部屋の中には兵士がそれぞれ五人づつで通路を挟んで整列している。

その先の巨大な椅子に座るのは背丈がテストアントの倍はあろう天使族だ。顔の周りに蓄えた髭と鋭い眼光が異様な雰囲気を作り出している。

ひと目でそれがテストアントの主君なのだと分かる。

ただならぬ威圧感を放つ天使族の王が、見た目とは裏腹に優しい声で言った。

「入るが良い」

「はっ！」

テストアントは「さあどうぞ」と、一度メルをポンと叩いた後で部屋へ入った。

「お邪魔します!!」

メルはガチガチに緊張しながらテストアントに続く。

失礼します！ではなく、お邪魔します！と言うところ可愛いんだよなあ。まあ、俺も緊張してるんだが。

俺はメルにピツタリとくつついて行つた。

近付くとその威圧感は更に増す。

天使族の王はかなり長い刻を生きているのだと見た目で分かるが、その気配は現役バリバリの戦士と言つた所だ。

天使族の王は眼前まで来た人族の女の子をまじまじと眺め……

「ふうむ。テストントの報告は聞いたが、余は其方が生まれた日に同じ方角から不吉な力を感じてな。テストントを倒す實力からも只者とは思つておらぬが、一体何者なのだろうか？」

うえええ怖ええええ！

優しそうな声なのに、なんちゆう迫力だよ。

「あ、あううあわわ、私は——

あまりの迫力に泣きそうなメル

——わ、わだすは村の子、あつワルプ村の子供ですだ！」

緊張のあまり田舎っぺみたいな話し方になっている。

『メル、落ち着け。お前はテストタントの恩人なんだからドンと構えとけ』
ルベルアの声に、メルは一瞬 “ビクッ” としたが小さく頷く。

「緊張してしまい、すいません。私はワルプ村で育てられた普通の子供です。村には剣や魔法を教えてくださいる人が居て、小さな時から色々教えてもらいました」
メルはうつすらと汗を滲ませ手をギュツと握りしめている。

王の表情は変わらず、

やがて王は顎に手を当てながら言った。

「ふうむ、では其方は何者であるか？」

!!!

ま、まさか!?

姿が見えないからとお気楽にしていたルベルアだったが、一気に緊張が高まる。見ると、メルも急激に汗をかいている。

二人の焦りも仕方のない事、

今まで何度も試したが誰かにルベルアの姿が見えたことなど無いのだから。

どうする! どうしたらいい!?

王が再び口にする、

「むう? 聞こえなかったか? 其方は一体何者なのだ?」

—。

く、答えるしかないか……、

『俺は——』

「我が主よ、私はテストアントです」

不意を突いてテストアントが答える。

!?

ふあっ!!?

メルも “アイアイ” みたいな目をして、テストアントを見ている。

驚く俺達をよそに表情を変えない王が答え返した——

「ん？ ああ、テストアントか。」

「……。」
『……。』

コイツ、許すまじ！

15 理不尽は罪無き者をナカセル。

迫力たっぷりの天使族の王は頭が少し「アレ」だった。

『焦ったー!』

ルベルアの言葉にメルがコクコクと頷く。

「我が主、この者は私の恩人でもあります。 謁見が終わったのちには城下町を案内し

ようと思います」

一歩前に出たテストアントが王に頭を下げて述べる。

つまり謁見は終わりということだろう。

一時はどうなるかと思ったが、何事も無くて良かったぜ。

テストアントの言葉にゆっくりと頷くと、徐に立ち上がりメルの前に歩み寄った王、小さなメルが余計に小さく見える。

「ふうむ、人族の少女よ。お前は珍しい眼をしておるな」

メルは背筋を「ピーン！」として答える。

「はっ、はい！」

王が体を屈め、大きな体を小さくしながらメルの顔に自分の顔を近づける。

えっ？キスすんの？スキンシップの挨拶か!?

口をキュツと縛り少し顔を引くメル、

露骨に嫌そうな反応だ。

王は顔が付かないギリギリの所で動きを止め

——。

「すん…すん…。ふむ、やはり臭うな」

メルの匂いを嗅ぎ失礼な一言。

「あつ……す、すみません」

俯き体を縮こめるメル、その顔がぐんと赤みを増す。

確かにメルは色々あつて汗をかいたりもしていたが

旅に出たのは今日なのだから、まだそこまで臭くないだろ。

いきなり人の匂いを嗅いで臭いは無いよな、

失礼な王様だ。

俺がそんなことを考えていた矢先、王は腰に備えてある大きな剣に手をかけた。

なっ——!?

ヒュツ!!——ギャリイン!!

咄嗟にメルを抱いたルベルアの体は謁見の間の扉を突き破り、城の入口まで吹き飛ばされた。

「きやああつ！何が起きたのっ!？」

ルベルアに抱かれたメルが叫び声を出す――

『王の奴が剣に手をかけたと思つたら、いきなり剣を抜いて振り切つてきやがった!!
なんだか分からんが今の一撃、完全にメルを殺す気だったぞ!』
ルベルアはガードが間に合つていなかったら、と想像しゾツとした。

「我が主よ！一体何を!？」

遠くでテストタントの声が聞こえる。

テストタントも何がなんだか分かつていないのだろう。

ヒュッン!!

――なあつ!?!ギィイツン!!

一瞬で目の前に来た王の一撃をなんとか受け流したルベルアは、メルを抱いたまま横に跳んだ――

なんつつうスピードとパワーだ！

『理由は分からんがやるしかないみたいだ！メル、魔法詠唱する少しの間任せて良いか！?』

「ごっごめんルアさんっ！王様の動きが速すぎて私じゃついていけなさそう！」

王の追撃は続く――

――ヒュンツ！――ヒュ！ヒュン!!

『くっ、分かった！なら少しキツめに包むぞ！我慢してくれ！』

「うん！お願い！」

風圧だけで斬れてしまいそうな王の斬撃をギリギリで避けるルベルアがメルに言う
と、メルも体にグツと力を入れた。

王が本気で向かってくる限り、俺の存在がバレないように周りの眼を気にしてたんじゃ殺られる！

『飛ぶぞ!!』——シユンツ!!

ルベルアは一気に浮遊城から200メートル程上空まで飛び上がった。

『ふう、なんだってんだ一体、またボケてるのかな?』

「うーん、どうなんだろう。人族が嫌いなのかな?」

『とりあえず、今のうちに強化魔法かけとくぞ。相手が王様だからって黙って殺られるくらいならこつちも本気で行ってやろうぜ』

「王様……、私が良い子じゃないから怒ってるのかな」

『ああ?何言ってるんだ?良い子、悪い子なんて人によって基準が違うもんなんだって!そんなのいちいち気にしてたら人生損するぞ!』

「けど、私のお父さんは……、人を刺したから。周りの皆から悪い人って言われてたよ……。だから私も悪い子だって……」

ルベルアの影に包まれているメルが小刻みに震え出す。

急にメルが何でそんな事を言い出したのかは分からないけど、俺は昔から人を励ますのが苦手だ！

俺の頭じゃ相手に合わせた言葉なんか浮かばん！

『だあー！メルも前世は中々ディープな人生だったみたいだな、お前の父さんは人を刺したのか……！でもそれは、悪い子じゃなく犯罪者って言うんだ。そしてな、悪くないお前を悪者扱いした奴等が本当の悪い子なんだ！覚えとけ!!』

あれ？俺ちよつと調子に乗っちゃった!?

いや、俺は異世界人なんだから、これくらい言わないとノリが悪いと思われるだろ？
異世界人は調子にのるものなんだ！

独自の理論を作り出すルベルア。

『それにな、今の俺達は王様に反撃しても良いだろ』

「うう…うつ…。ふ…ぐう…。なん…で…？正当防衛だから？」

いつの間にか完全に泣いていたメル、

何かが切つ掛けてでメルのトラウマが引き出されたみたいだ。

『違いーよー俺が悪魔だからだ!!』

ルベルアは嫌な気配を感じ「キツ！」と下を向く――

王が何かしてきそうだが、今のメルを戦わせるのは気乗りしないし、

仕方がない…アレを！

いや、ここだとまだ城下町の人に被害が出るか。

◇

――約四年前、俺は自分の能力の凄さに酔っていた。

この世界の魔法は、自分のイメージとそれに見合う魔力さえあれば自由に作ることが

出来る。

それに気付いたとき、中二心に火がついた俺は、メルと考えた名前“ルベルア”の由来とした悪魔をモチーフにして強力な魔法を作り出そうとしたのだ。

特質の能力で魔力が有り余っていた俺はそれら三つの魔法を作ることに成功し、作った魔法はぶっ放したくなるのが脳筋の性。

その安易な考えで村からずっと東側へ行った所の草原に、新たな湖を作ってしまった。

幸いにも村人からは星降り、つまり隕石が落ちたという事で落ち着いたが、その時の罪悪感で自ら封印していた魔法があるのだ。

◇

——あの王は頭のネジが数本抜け落ちてるが、強さは本物だ。

メルが本調子じゃない今、俺の実体化だけじゃ戦闘が長引くだけだ。

使うか、それともこのまま逃げるか……。

——
!!

下から何か飛んでくる！

竜だ……それも一体じゃない、

10体以上の竜！

バサアツ！バサツ！

「むう、人族の娘が踞ってるだど？どんな手段を使って宙に浮いておるのだ。空を飛ぶような魔法を使えるほど魔力は感じられんが」

テストアントドラゴンに乗ってやって来た王、

周りのドラゴンは城に居た兵士で間違いないだろう。

王の言葉を聞くにメルを完全に包み込んだ状態でもルベルアの事は見えていないのは明白である。

そんな王達にとって、空中でポツンと泣いている女の子はさぞ不思議な光景であろう。

テストアントドラゴンは黙っているが、無理をしているようにも見え、恩人と戦いたく

はないが王に逆らうことも出来ない……といった所であろうか。

「……………グスッ。」

メルはルベルアが思うよりも重症らしく膝を抱えたまま震え続けている。

『王様！まずは理由を言ってくれ！』

と言つても俺の声は聞こえないんだよな。

「ふうむ、見えぬ力で我が剣を防ぎ、空をも飛ぶ。魔力も感じられんものになあ、ふつつふ。本当に何者なのだ！貴様から奴の臭いがするのは何故だ!!」

「……………何の事か分からないよ……。分かる訳無いじゃん。」

「我が主、メルさんには戦う意思が感じられません、なぜ主はそれほどまでに怒っておられるのですか？」

王を鎮めるように語りかけるテストメント。

「テストントよ！若輩の貴様では知らぬだろうがな、1200年前に我ら天使族と戦争し、その果てに我らが大陸の多くを落とした魔王、忘れはせん！」

魔王ハールバドム！奴の臭いがこの少女の右眼からするのだ！邪魔立てするなら貴様も死ぬか？テストントよ」

王から放たれる殺気が膨れ上がる。

テストントはメルの方ををじつと見た後、顔を伏せ沈黙を守った。

王が怒ってる理由をなんとなく、理解したルベルア、

しかし、それを聞いた事でルベルアにも怒りが湧く。

今でも大きく感じた浮遊城は昔はさぞデカイ大陸だったんだろうよ。

もしかしたら、ここ以外にも沢山存在してたのかも知れねえ。

それを落とした魔王つてのと同じ臭いがしたのはきつと、俺の所為でメルの右眼に魔族と同じ魔力回路が宿ったからだろうな。

だからって千年以上前から生きてる奴が、千年以上前の事でたかが七歳児相手にここまで怒ることないだろ！

ルベルアの瞳が黄色から赤へと変わってゆく。

『これだから年寄りには昔のことばかり引きずりやがって！城下町で平和に暮らしてる天使が沢山いるのに平気で暴れるしよ、相手してやるからかかってこいよ！』

—— シュンツ!!ルベルアは300メートル程西へ移動し、王を待つ。

自分の攻撃で城下町に被害が及ぶのを嫌がったからだ。

『アンテイシベシヨン視覚強化！』

それはルベルアが覚えている中で最高のしかくきようか視覚強化魔法。

おー、探してる探してる。必死だなあ。

メルはルベルアの中で膝を抱えたまま顔も埋めている。

ふう。

『メル。お前は生まれた時から“呪いの悪魔”魔に憑かれてたな、それは今更どうしようも無え。けどな、その代わり何があつてもお前を一人にはさせねえ！だから今は安心し

てそこで泣いとけ!』

うおー!クツサイセリフを惜しげもなく言つてやった!

クツサー!!恥ずかしー!!帰りにー!

けど……これは俺の本心だ!!

おっと、王に場所が気づかれたな。

王と天使族の一団は浮かんで見えているメルの上に、凄いスピードで向かってくる。とは言つても魔法で視覚強化済みのルベルアからすれば、まるでスロー再生だ。

さて、やるか——!

「小娘が、またも逃げおつて!次は逃げる間もなく首を飛ばしてやるわ!!」
王様は殺る気に満ち溢れている。

チャキツ! 剣を抜き放つ王——

——ルベルアの怒りと集中力が最高に達する。

『泣いて謝るなら今のうちだぞ天使族の王よ！』

目覚めし悪魔伯爵!!』

#16 ミンナと寝ると寝付けなイから起きとく。

集中力が最高に達したルベルアは魔力を爆発させた

『目覚めし悪魔伯爵！』

詠唱の瞬間と共に黒い霧が辺りを包み込む。

「むっ、止まれテストント!!皆も待て!!……………なんという魔力、これ程の魔力を隠していたとは!小娘の分際で小癪な!」

突撃を止め兵を制止した王は黒い霧を払おうと力任せに剣を振る。

しかし霧は払われる事無く、その中心へと吸い寄せられるように集まって行き、やがて禍々しいルベルアの姿を映し出した。

王と一団は突如現れた黒き化物を見上げ絶句、

大きな王より遥かに巨大な黒い影、頭には二本の鋭い角、丸く光る不気味な赤い瞳。

如何にも強靱そうな腕の先には狼のように鋭い爪が黒い光沢を見せ、その体の下側は鋭い牙を持つ大蛇の影となっている。

その姿に十体のドラゴン達は後退りし、王でさえ一瞬呆気にとられた。

動揺する戦士達を気にかける事もなく、黒き化け物から腹の奥を震わせるような声が響き渡る。

『その反応、ここまでしてやっと俺の姿が見える訳か……。四年前じゃ、こんなに多くの魔力は使わなかったからな』

ルベルアは実際の所、少し嬉しかった。

何をしてても、声も姿も伝えられなかったというのに、こうして姿が見え声を聞いている者達が居る事が。

状況が違ったなら抱きついて涙していたかもしれない。

「おのれ、化物め！幻魔族か？それが貴様の正体か!!我が積年の恨み、今こそ晴らそうぞ！」

周りのドラゴン兵とは違い王の戦意は失われる様子がなく、剣を握り直し切っ先をルベルアへと向ける。

『なんでお前に恨まれなきやならねえんだ、俺もメルも生まれて七年しか経ってないってのに大昔から生きてる奴に恨まれる筋合いなんて無いんだよ！まあ、やられっぱなしも癪だし折角だから相手はしてやるけどな！』

悪いがお前の機動力の弱点は知ってるんだよ。

「舐めるなよ化物め！」

王はテストアントドラゴンを巧みに操りルベルアの右後ろに回り込んだが、ルベルアは難なくそれを眼で追っ——

うっ!?!光が！

太陽を背にして回り込んでいた王、逆光によりルベルアの反応が僅かに遅れ、その隙に上段に構えた剣を一気に振り切った。

避けるのは間に合わないが、避けるまでも無い！

『オオオオオオオオウウウウオオオオウ!!』

雷鳴の数倍の大きさの咆哮、音の衝撃で王の体は仰け反り、空気は激しく振動、それと共にテスタントドラゴンの耳からは血が流れ大きくふらつく。

テスタントドラゴンと違い聴覚がそれほど高くないドラゴン兵でさえ意識が薄れ落下しかけた者も多い。

テスタントの上でバランスを崩した王は矢庭に体勢を立て直したが、その僅かな隙を突いてルベルアが急接近し、大きな手を広げ爪を立てた両手で王を挟み潰す。

——ガギイインツ!!

火花を散らす爪と剣

ギギ…ギチ…ギ…ギ…ギ…!

巨大な両爪を剣を横にし辛うじて受けた王だが、そこをルベルアの影の大蛇が狙い飛び付く。

剣を塞がれている王は迫る影の大蛇を一蹴、その勢いを利用し後ろへ跳躍した、跳躍

した先に足場が無い事など考えずに。

「むっ!!しまっ…!!」

後ろへ跳んだ王の動きに意識が朦朧としているテストアントドラゴンについてはいけず、霞む意識の中で王を眼で追うのがやつとであったのだ。

『オオオオオオオオオオアアアウウウウ!!』

ルベルアが再び容赦のない咆哮を上げ、衝撃波となった声がドラゴン化した天使達を襲う。

連続して三半規管を揺らされたドラゴン兵達は完全に戦意を失い上空からフラフラと落ちて行き、とうとう到頭テストアントドラゴンも重力に抗う事無が出来なくなり落下を始める。

耳が良すぎるのも考えものだな……

テストアント、お前は以外と良い奴だったよ。

あれ…？あいつ、あのまま落ちたら死ぬのか？

死なれるのは困るけど、今は王を倒すことに集中しないと！

落ち行く王を影の大蛇が追撃、影の大蛇は双頭となって王に襲いかかる。

ギツ！ギイーン！

「くうああ、まだだ!!……ドラゴフオーム！」

双頭の大蛇を弾いた王が魔法を唱え、光を纏う——

やっぱり王も竜化を使えるのか!!

——光が収束し、ドラゴンではなく人型のまま背中に翼を生やした王が姿を現す。

ビュ！ビュワツ！——

ルベルアの影の大蛇の攻撃はこの間も続いていた——が、

キュツ!!——

王は翼を捻らせ、その反動で影の大蛇の攻撃を避けると

——ツスパッツ!!

そのまま体を回転させ、下から振り上げた剣でもう一本の大蛇の頭を切り落とした!

「ゼエ…ゼエ…。魔族めが!お前を終わらせてやろう!」

先程までは息切れ一つ無かった王が、呼吸を苦しそうにしている。

を?もしかして魔法を使ったせいなのか?メルと同じ剣士特化で魔法が苦手なのかな。

どうであれ、俺としてはこの好機を逃す訳にはいかない。

『メルを泣かせた分は返させてもらおうぞ!』

ルベルアの意思に呼応して両眼に魔力がみなぎっていく。

高ぶるルベルアの魔力に対抗するように、軋むほど体に力を溜め始める王。

「余の期待に応えよ、神器・ソートオブリッラ選定ノ剣!」

王は詠唱しながら力強く羽ばたき更なる上空へ舞い上がると、光りを放つ剣の切っ先

をルベルアへと向けて一気に急降下した。

王のスピードが音速の壁を破り、ツッパアン！と音を立てる。

王が急降下を始めるより少し早く、魔力を爆発させていたルベルア。

俺も《アウオーク・アモン》の真骨頂を見せてやるよ！

『クロノスチエイ
刻の悪戯！』

ルベルアが魔法詠唱を終える頃には、王の剣が既にルベルアの額を捉えていた。

額に突き刺さる刃は放っている光の輝きを増しながら頭深くへとめり込んでゆく――

――！

「フハハ！討ち取つ――」

王の剣がルベルアの頭を貫通するかと思えた刹那、黒い影が広範囲に広がり、辺りが闇に包まれる。

――「つ取ち討！ハハフ」

その広がった闇が再び収束をはじめると、王の頭上に 剣が突き刺さったはずのルベ

ルアが拳を構えた状態で現れ、

王がそれに気付く間もなく巨大な拳が渾身の力で繰り出される。

——ツドツオオオツンツ!!

「!!——つガッふっ!!」

堪らず王の口からは多量の血が吐き出され——

全身にめり込んだ巨大な拳は勢いが殺される事無く振り抜かれた。

キユンツツ!!——ドツツガアツツン!

無防備に受けた攻撃に対処する術もなく、とてつもないスピードのまま地上へと落下し叩きつけられた王。

巨大な拳に残った手応えで、勝利を確信するルベルア。

「ルアさん!」

『おっ、もう大丈夫か?』

「ルアさん！私の我が儘だけど、テストントさん達助けられないかな!？」

メルの言葉に「ハッ」とするルベルア。

確かに死なれたら後味が悪い！テストント達が落ちはじめて一分近く過ぎたか!? ここは雲よりも浮遊城よりも高い位置だ、地上までならまだなんとか！

『行こう！防壁陣！』

ルベルアは出した防壁陣に、バネのように丸めて力をためた影の大蛇を押し当て、同時にその力を解放した――

ヒュアツツ！ツパアン！

ドラゴン達はふらふらと落下していたが、ルベルアはそれを追い越しあつという間に地面を捉える。

王は見えなかったけど、下にクレーターがあるから多分あれが王だよな。

キュッ！ツ、ブワアッ！

ルベルアは大地にぶつかる前に急停止したが風圧で砂埃が巻き上がる。

『影の大蛇よ！ドラゴン共を喰い千切れ!!』

じゃなかった!!

『影の大蛇よ！ドラゴン共を受け止めろ!!』

ルベルアから一斉に十数本の影の大蛇が飛び出すと、ドラゴンを啜えて地上へと降ろした。

ふうう、これでひとまず安心か。

王様は分かんけど、アイツは丈夫そうだから多分大丈夫だろ。

「あの、ルアさん……」

『あ、おお。もう出しても大丈夫だよな、スマン スマン』

メルは奴、少し眼が腫れぼったいけど気にしなくとも良さそうかな……とにかく無事で良かった。

「ルアさん……」

『ん？』

「……ありがとう」

ルベルアの事をギュツと抱きしめたメルは色々な思いをのせ、精一杯の笑顔を見せた。

『……………！う……………おう!!』

危ない、グツと来た！まあ、涙無いんだが。

おっと、魔力無限さんの俺とていつまでもこの姿じゃちよつとキモいか。

『メル、元に戻るから少し離れてくれ』

「うん！」

『デイスベル
霧散！』

ポアツツ——！

黒い霧が辺りに散り行き、巨大な黒い悪魔は姿を消した。
だが、メルは霧が消えた後もキョロキョロしている。

ふういー、疲れた疲れたー！気分的に！

『さて、メル。とりあえずみんなを連れて浮遊城に行こうか！』

ん？いつもより高い声が出るぞ？

メルは俺の方を見て「ビーバー」みたいな顔をする。
「わぁー！ルアさん！ええーっ！」

『どうちた！メル！』

何処かから、ヘリウムガスを吸った変態みたいな声がする。

——ん？まさか俺の声か!?

「ルアさんが！小さくなっちゃったー！ー！ー！！」

『えー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！！（ソプラノ）』

#17 今度こそ寝 ムリたい。

エランゲル北東のとある場所、

そこに存在するは、天使族の住む島 “浮遊城”

その浮遊城から少し離れた地上に寝転がる11人の天使の姿があり、その脇には小さな星降りでもあったかのように小さなクレーターができていた。

クレーターを覗くと “うんせこらせ” と動く女の子の姿があり、

『おいつちよ！おいつちよ！』

「プハハッ！ルアさん、その声やめて!!」

戦いの衝撃により、瓦礫に埋まった天使族の王をほじくり出そうとしていた。

なぜメルが笑っているのかと言うと、戦いが終わり魔法を解いたルベルアは、魔力を使いすぎたらしく仔猫程の大きさになってしまい、

そこから更にドラゴン化が解けていかなかった天使を元に戻す為に、デイスベルマジック魔法解除”を使ったルベルアは、その所為で消しゴムのカス位の大きさまで縮まった。

この状態のルベルアが声を出すと、”とんでもなく高い声”であり、メルはその声が笑いのツボに入るようだ。

俺の声はメルだけに聞こえる思念みたいなモノなのに、何故そうなるのかは分からん。まあ、どうでも良いか！

『むむむー！どんだけ埋まってんだコイツユ!!』

ルベルアは豆粒みたいな小石をひとつ持ち上げると、ふわふわ飛び、30センチ程離れたところに小石を置く。

『ハア、ハア』

もう20回は岩を退かしてるのに、王の野郎全然出てこねえぞ。

「プハハハツ!! ルアさん本当意味無いよね、それ。沢山空気吸ってみても元に戻れないの?」

すっかり元気を取り戻したメルは笑いながらも黙々と瓦礫を退かす。

『そうなんだよ! 空気を吸っても魔力にならないってことは、あの魔法を使うときにこの辺りのエレメントとマナも根こそぎ吸収しちゃったんだろうな!』

何度も試しているのだが、スウウー……………やはり変わらないか。

「あつ! 王様の足が出てきた! 今 “ピクツ” って動いたから生きてるよね!?! 良かったー!」

『それは良かったけど、また暴れたりしないよね…………』

この状態の俺じゃあ、もし暴れられたら王の鼻息だけで完敗する事間違いないだろう。

少しビクビクしながらもメルと俺は王を掘り出した!

(掘り出したのは殆どメルだが)

ピクリと動いた王は細く眼を開きジツとメルを見つめる。

「む…う。人族の少女…、…う…余は生きていたか…」

ゲツ！意識あるんじゃない！空気読んで気絶しとけよ!!

「はい、他の皆さんも無事…えっと、生きています」

「そうか…。すまなかつたな…」

「…はい！」

王の言葉に何を感じたのか、メルはギュツと唇を噛み締め俯いた。

さすがの俺も今のメルの顔を見ようなどと野暮な事はすまい、

『良かったな、暴れなくて！後はどうやって上に戻るかだな』

スツと一度だけ目を拭ったメルは、腕を組み足をトントンしながら考える。

「うーん、今のルアさんじゃあ完全無理だし。とりあえずテストントさんを回復して連れてってもらうとか?」

『なるほど、それが一番可能性あるか。テチュタントなら起こしても戦闘にならないだろ』

テストントの方へ歩いていくメル、小さすぎるルベルアはメルの肩に埃のようにくっ付いている。

テストント等はいつまで気絶してるんだか。確かにアレは咆哮と言うよりは、魔力を乗せた衝撃波」と言った方が正しいが、そろそろ起きても良いだろ。

「テストントさん、今 回復させるからね!癒しの女神よ、我に奇跡の力を授けたまえ……、ハイーツ!!」

詠唱の途中に突然肩をビクツとさせるメル。

メルの肩にくっ付いていたルベルアはその反動で悲しいくらいぶっ飛んだ!

『うわーっメル!どうちたー!?!』

綿毛のように飛ぶルベルアが緩やかな風に乗リフワフワと漂う。

ポヨン、ポヨン――

「モ、モモ、モンスター!ルアさ、あれ?ルアさん何処っ!」

謎の生物に狼狽えるメル、気付くと目の前に大きなジェル状のモンスターが居たのだ。

これは……、スライム!

テストントが少しスライムと重なっており、上半身の服がシユワシユワと溶けている。

……え?溶けるの?これ。

スライムと言えば服が溶けるのは定番かもしれないが、

なぜ男の服を溶かすんだ！この無能モンスターが！！

しかし、ここにはグラマラス美女が居ない！

まあまあデカさだけど、一匹持って帰ってミルザにでもぶつけてみるか。

綿毛のように飛んでいるルベルアが、不埒な事を考えている間にもスライムはシュワシュワしている。

「あつ……あつ……あつ……あつ……あつ……」変態みたいな声を出すテストント。

てか、お前もう気絶から目覚めてねえ？

「嫌ー！！私が溶かされるのもヤダけど、皆の裸を見るのも嫌だー！！」

メルがテストントを凝視しながら叫び、モルドーから貫つたショートソードをグツと握りしめた。

ポポヨン！ポポヨン！ポポッン！！

殺気に反応したのか、突然にスライムがメルを目標にして突進。

「キャッツ!! ホント、なんなの!」

メルは文句を言いつつも上に跳びスライムの突進を避け、跳び越えた際にスライムの上部を斬りつけた――

タンツ!――シユツツ!!

スタツ…!

攻撃を受けたスライムは見る間に動きが鈍くなり、やがて動きを止めた。

ポヨ……シユワアア……。

スライムは形を崩し、水溜まりのように地面に広がる。

「えっ? これで倒したの!? ……弱いっ!」

生まれて初めてのモンスターであるスライムを倒したメルだが、喜びよりも驚きの方が大きそうだ。

ポヨヨ!! ポヨン! ポヨツ! ポヨヨン!

「えー！一匹じゃなかったの!？」

メルを挑発するように四体のスライムが自由に動き回り、何故かスライムが群がっているテストタントは上着が溶け、褐色の肌と乳首が露になっている。

「もうっ!!」

——ヒュッ!

「なんで!」

——ツスパッ!

「こんなこと!」

——シュッッ!

「しなきゃなんないの!!」

——シュパパッッ!

スライムの間を縫うように駆け抜けたメルは、瞬く間に四体を仕留めると、

——ピチャツ

綿毛のような悪魔がスライムの残骸の上に ふわりと落ちた。

『しゅげーなー！メル！カッコ良かったジョー!!』

ん？俺の下半身が、

スウウー！

大きくなっていく!!

あつ、決して下ネタでは無い！俺が保証する！

スライムの残骸に接触した部分が大きくなっていき、それと同時に残骸が消えてゆく。

『い、これは。もしかして……』

何かを思い付いたルベルアは、思い切り空気を吸い込み始める。

スウウウウウウー!!

——！ズズズズツルツ！！

『うおっぷー！』

息を思い切り吸うルベルアはスライムの残骸をも強引に吸いこむ。

うーん、無味無臭だが、テストアントの乳首をシユワシユワしていたスライムだと思うとやるせない気持ちになるな。

グググツ……、ボンツ！

『うおー、戻ったあ！助かったぞ、メル！』

「わあ！良かったあー！これで安心だね！」

俺とメルは手を取り合って喜んだ。

魔力の蓄積量はまだ全然足りない気がするが、皆を連れて浮遊城へ行くくらいなら余裕だろう。

「じゃあ、お願い！」キラキラした眼で言うメル、

『よしっ！任せとけ！』

それに応え王とテストアント、10人の天使兵に実体化した影を絡ませてゆく。

『準備オーケーだ！行くぞメル！』

「うんっ！」

ルベルアは体をバネのように変え、地面に踏ん張り力を溜めると――

グググ……ググ……！――ダアツツアン！！

上空へ向かって一気に飛び上がった！

上空に……上く……。

メルが氷のような眼で俺を見る、

『ス、スマン！重くて無理だった！』

魔力が全快じゃない俺はなんて不甲斐ない悪魔なんだ。

そのまま30分ほど時間をかけて俺達は浮遊城へと戻ってきた。

グツタリした王、気絶している兵士達。

そんな彼らをふわふわと宙に浮かせながら飛んできた小さな女の子。

浮遊城の住人達にはルベルアの姿が見え無い分、余計に不気味な光景であっただろう。

「すいませーん！だれか、王様達に治療をしてあげて下さい！」

メルがそう叫ぶと、沢山の天使が集まって来て王様達を医務室へと運んでいった。

俺達はくたくたに疲れていたの、浮遊城・城下町の食事所 兼 宿屋のラムリス亭
“で一泊することにした。

『はあー、たった一日で色々ありすぎて、すっかり疲れちゃったなー！』

風呂上がりで髪を乾かしながらルベルアの愚痴を受けているメル。

「そうだねえー、今日はもう寝よう……」

俺は普段なら眠らなくても問題ないんだが……今日は……。

——眠……い。

——翌朝、

「メル様、起きてください！どうか城へお越し下さい！」

むにや、この特徴的な声は……、テストアントか？

おつ、テストアントか！無事で何よりだ。

「ふあ……あ。テストアントさん、おはようございます」

半ば強引に起こされた宇宙の戦闘民族みたいな寝癖がついたメル、そのままテストアントに城へと引つ張って行かれた。

「メルさんをお連れしました！」

テストアントの声に「謁見の間」の扉が開かれる。

——ギイイイ……。

謁見の間の扉は王の所為で壊れたはずだが、元通りに直っており、部屋の中の兵士達、そして王、皆初め見たときと変わらぬ様子である。

「ふむ……。昨晩はよく眠れたか？メルよ」

「は、はい！とてもゆっく良くゆっくくりと眠られました！」

相変わらず緊張しているメル、

一体何と言ったのだろう。

「であるか……。それは良かった」

王は納得したように頷き、さらに言葉を続けた――

「して、お主は一体何者なのだ？」

あー、やっぱり聞かれるよな……

姿見られちゃったし。

しかし、姿を見せれる程の魔力はまだ無いしなあ、

仕方ないからメルに答えてもらうか。

今さら隠すよりはその方が良いだろ！

『メル、悪いけど俺の代わりに説明してもらっても良いか?』

こういう時、普通に会話できないというのはかなり不便である。

小さく頷くメルの拳には、ギョツと力が入る。

「わた」

「主よ! 私はテストタントです!」

テストタントがキリツとした表情で言い放った。

「おお、テストタントか……………ハア」

俺とメルは長い悪夢でも見ているのだろうか…………。

って、いいかげんにしろ!!

#18 偉いヒトの話はナガイ。

“浮遊城” 謁見の間、

しやしやり出たテストタントの返事は、天使族の王に沈黙をもたらず。

いや、なんか喋れよ！

「テストタントよ、少し外してくれ」

王がポツリと命じ、それに従い部屋から出るテストタント。

「ふむ、まずは今回の件について余が詫びるのが先か。確かメルと言ったな、余が持つ過去の私怨を其方に強引に押し付け、その命を奪おうとしたことを心より謝ろう」

王は玉座に座ったまま少し頭を下げた。

なんて偉そうな謝り方なんだ、

床に頭を擦り付けて足でも舐めやがれコンチクショー！

おっと、俺には足無いんだよな。

王は更に続ける――

「しかし、言葉だけでは足りぬだろう。余が死ねば浮遊城は落ちるのだからな……つまり其方は余だけでなく浮遊城に生きる者達すべてを生かしてくれたという事になる。そこで、詫びとして余の側近であるテストタントの首を渡そう。どうか、首ひとつで今回の事を不問にしてくれ」

そう言うと、今度は立ち上がり深く頭を下げた。

――はっ？首？いやいやいや怖い怖い怖い！

脇に控えている兵士達も動揺して動くのが見える。

もちろん動揺したのは兵士達だけでは無く、

「ちよつ、ちよつとお待ち下さい王様！ どうしてそう言う話になるんですかつ!! 私
はテストタントさんの首なんて欲しくくないですつ!! 絶対に要らないです! 絶対に絶対!!」
メルは必死に訴えた。

が、そんなに必死に嫌がると逆にテストタントが可哀想に思えてくるのだが、首を欲しがるメルなんて見たくないしまあ良いか。

「ふむ。テストタントの首では納得できんか。とはいえ余の首を渡しては皆まで地上へ落ちる事となる、渡す気も無いがな。ひとつで足りないと言うことならば……」

ブツブツ言いながら、王は控えの兵士達を眺める。

その視線を受けた兵士達は先程よりも動揺し、鎧をガチャガチャと鳴らす。

この王様、発想が本当イヤ！

「王様！私は誰の首も要りません!!ただ、私やワルプ村の皆の事をそつとしておいて欲しいです!!」

メルは叫びながら、激しい身振り手振りで称号「首コレクター」の獲得を拒絶する。

「何も要らぬか。何も渡さなくとも其方が暴れないと言うのなら、それは悪くない話だが」

王は少し不思議そうな顔をして頷いたが、まだ少し信用できないといった様子だ。

つて、元々もともと暴れたのはアンタだろ！

「はい、何も要りません。けど、出来ることならワルプ村と仲良くして頂き、私がこの島で自由に歩くことを容認して欲しいです」

メルはそう言うのと体をくねらせ「おねだりポーズ」をした。

メルのやつ、子供の必殺ポーズを使うとは！

「この島を其方の自由にさせろと申すか！むむう、つまり余にワルプ村の傘下に入れと!?」

途端に険しい顔を見せる王。

コイツは何言つてんだ、あんな田舎村の傘下になんか入ったら村長のジジイが調子に乗るだろ！思い違いも大概にしろよな！

「えっ！いや、そうじゃ…」

メルが慌てて言いかけたが――。

――王は聞かずに話を続けた。

「いや、本来ならばあの時奪われたはずの命。やむを得ないか……ならばひとつ、余の質問に答えるが良い」

「あつ、えつ?えつと、はい」

メルの情報処理は追いつかない。

「あの時、余はどうやって負けたのだ?其方は余の剣を、あの『最強の切り札』を避ける間など無かったはずだが」

王は悔しそうに、自分より実力が上の者が居ることを思い出し顔を強ばらせ、メルに問う。

「えつ……と。私は分かりませんが…、ちよつと聞くので待ってください。ルアさん……?」
メルは俺の方を見ると、体をくねらせ助けを求めるように聞いてきた。

俺にはそんな格好しなくても普通に答えてやるのに……

『あー、あれはな……』

が、またも人の説明を待たずに話し出す王。

王（コイツ）はどうやら、マイクを持つと離さないタイプだ。

「む？ルア？ここに其方以外の者が居るのか？」

「はい、私が生まれた時から一緒にいる悪……、妖精が居ます。普段は私以外の人は姿を見ることも声を聞くことも出来ないのですが、あの時妖精さんは私を守ろうとして凄量の魔力を使ったので王様や兵士さん達にも見えたのだと思います」

言葉を選びながら説明するメル。

それを聞いた王は一瞬目を瞑り考えると“カツ”と眼を開き言った

「あの黒いのはお主の真の姿では無く、その妖精だということのか!!」

「はい！妖精さんです！」メルは「ビクッ」と肩を上げ、イエツサー！とでも言わんばかりに即座に返事をしたが、

「あの見た目は悪魔であろう!!」

王の眼は血走り、鼻息荒く妖精論を却下。

「はい！悪魔です!!」

王の迫力に背筋が伸びきったメルはあつさりと認めた。

天使と悪魔じゃ犬猿（けんえん）の仲だろう、

これはヤバイ流れか。

「そうであったか、幻魔族の類いか？まだこの世界にも悪魔が生きていたか。大昔、瞬く間に魔族が増えてな……それまで魔族の上に君臨していた悪魔族も数には勝てず、気付けば悪魔族の姿を見なくなつたのだ。それは天使族もまた同じだがな。種族で言えば古き喧嘩相手であるが、この世界に新たに生まれたばかりの悪魔ならば余の知る魔族と

は何の繋がりも無かろう。しかし、ならば何故ハールバドムを思わせる臭いを感じたのか……余も鼻が狂ったものよな」

王は遠くを見つめ、顎の髭をゆっくりと触りながら語った。

これは、大丈夫なパターンか。

「……。」

メルはモジモジしている、なんと返事をすれば良いか分からないのだろう。

「分かった。この浮遊城が傘下に入ることを認めよう！但し、お主は自由にこの街と交流してもよいが——」

が？何か嫌な予感がする…

——お主が交流している間はその悪魔と戦わせて貰おう！」

王は眼を輝かせ言い放った！

「えと、ルアさん、良い？」

モジモジしながら聞いた来たメル。

うーん、そんな可愛い顔で頼まれてもなあ……

『また小さくなったりしないかなあ。俺はこんな体だから殺られるとは考えにくいけど、命の取り合いなんて嫌だしさ』

メルがうるうるで見つめてくる。

『まあ、いつか』

「王様、私を守護してくれている「ルベルア」という名の悪魔さん、彼が良いと言ってくれたのでその条件をお願いします！あつ、傘下とかは考えなくて良いんで」
メルはクネクネしながら王に伝えた。

今はクネクネポーズ要らないんじゃないのか？

「そうであるか！余の枯れた闘志もまた燃え盛るといふもの！しかし、殺されては敵わぬからな、保険という意味で其方の傘下には入らせて貰おう！ガツハツハツハ！」

うわー、コイツ。戦闘狂バトルマニアかよ！

「テストアントよ！話をついた！戻って参れ!!」

王の呼び声にテストアントが謁見の間へと戻ってきた。

「我が主よ、どのような話になったのでしょうか」

テストアント、危なくお前の首はメルの物となってスプラッター人形の横に飾られる所だったぞ。

「うむ、我が『浮遊城』はワルプ村……もとい、メルの傘下となった！明日までには全ての住人達にも周知の事実とせよ！」

「なっ……主よ！聞き直すことへの無礼をお許しください！本当に宜しいのですか!?!」

堂々と言い放った王に対して、テストントは驚きを隠せずに聞き返す。

「ミハエル・カーライルの名において宣言する。考えは変わらん！皆、メルに無礼を働くことの無きようにせよ！」

脇に置く剣を掲げ力強く言い切る天使王ミハエル――

「ハッ！では今すぐに知らせてきます！メルさんには後程この街をご案内致します！」
そう言うと、テストントはミハエルへ一礼し、直ぐに謁見の間を飛び出した。

というか、王様の名前が初耳なのだが、
いかにもって感じの名前だな。

大事になった話を聞き、ずっとモジモジしているメル。

「ふう、これ以後には引けぬな！ガッハハ！まあ、余は良き遊び相手が出来たことを喜ぶとするか！メルと、確か……ルピーリアとか言ったな。未永く宜しく頼むぞ！」

ミハエルはそう言うと、メルへ手を差し出した。

「はい！こちらこそ宜しくお願いしますー！」

『聞こえないだろうけど、宜しくな！後、名前全然違うぞ！』

ミハエルとメルはガツシリと握手をした。

「あの、ミハエル様…」

可愛らしくモジモジしながらメルが呟く。

「どうしたの？メルよ！其方は小さき少女だが、余を負かした悪魔の主なのだ、もつと胸を張るが良い！」

ミハエルは優しい声だが、その言葉はとても力強く頼り甲斐がある。

「すみません、ミハエル様……あの……トイレを貸して欲しいのですが」

耳まで真っ赤にしたメルがボソボソと言った。

ずっとモジモジ クネクネしてると思ったら、トイレ我慢してたんかいいいいっつ！！

来る前にしとけよ！ばかちんがっ！！

メルに頼まれ、ミハエルが叫ぶ――

「我が盟主メルにトイレを案内せよ、メルが漏らすは、余の顔に泥を塗る行為と思うがよい！全ての天使は全力で支援せよ!!」

ミハエルはどうでもいい事を、世界の危機かのように叫んだ。

メルの顔は煙が出そうなくらい赤くなり、そのまま控えの兵士達に担がれて城の外へと運ばれてゆく。

——暫くして、城の外で大きな歓声が湧き起こった。

メルはこの日を一生忘れないだろう……。

思いがけない事が沢山あったとはいえ、まだ二日目のこの旅。

天使族がメルの傘下に入るといふ驚きの結果をもって、ルベルアとメルの“初めての”おつかい”が完了した。

まだ来たばかりだから、もう少しゆっくりしてから帰るとするか！

た。その頃、危機を脱した一人の少女は浮遊城の住人達に訳もわからずに胴上げされていた。

#19 子供の成長トハ…。

メルとルベルアが浮遊城に来てから三日目の昼下がり——

ここは浮遊城の図書館、

天使の女の子・リエルと俺の可愛いメルが楽しそうに話している。

「わあく！見たこと無い本がいっぱい！！リエルさん、これ全部読んでも良い本ですか!？」
高級と言われる本がビッシリと並ぶ光景に、メルは興奮していた。

「ええ、もちろんです盟主様！盟主様をよよ喜ばせるのがわたつ私のししし仕事ですの
で！」

リエルは、突如メルの案内役に抜擢された女の子であり突然の大役に緊張を隠せていない。

というのも、初めはメルの案内役としてテストスタントがついていたのだが、テストスタントがあまりにも仰々しく住人達に紹介して歩くので、メルがミハエルに言っただけで案内役を変えてもらったのだ。

そこでミハエルが気を利かせて――

「ならば歳の近い娘の方が良からう！リエルをメルのご案内役にせよ!!」

と、即断で選出された案内役がこの娘。

リエル、22才、スリーサイズは……俺の影をこう…伸ばして巻き付ければ……分か
…

「ちよつと！ルアさんの変態!!」――ギユウツ!!

こちらを鋭く睨み付けたメルは、俺の尻(的な位置)をギユツとつねった。

『いだだだ！ヒイツ！俺が悪かった!』

――で、

話は戻るが“年の近い娘”でリエルが22才なのは、天使族は長寿であるが故なのか、あまり子供が生まれない種族らしいのだ。

つまり、他の地で天使族が生き延びていない限りはこの世界で一番若い天使がリエル

という事になる。

そして22才ではあるが、天使族の寿命から言うともまだ幼児であるために、見た目はメルより少しお姉さんかな？と言ったところ。

「リエルさんつ、この大きな建物は何ですか？」

メルは扉が固く閉ざされた白い壁の大きな建物を見上げて聞いた。

「はいっ、盟主様！こっここは、魔法研究所です！！主に回復魔法に力を入れて研究しているらしいです！！私も入ったことがあります！」

リエルはビシツ！と「気を付け」の姿勢をして答える。

前世で俺が中学生だった時の体育教師「松本」よりも綺麗な「気を付け」だ。

「そうなんだあ……。……。あの、リエルさん？」

「盟主様！リエルと呼び捨てて下さい！」

メルのふんわりした呼び掛けに、兵隊のような返事を返すリエル。

なぜこの娘はこんなに肩に力が入ってるんだらう。

「そうですか…、じゃありエルも私の事をメルと呼び捨てにしてください」

メルはニコリとして言った。いや、「ニヤリ」か？

「えっ！そっそそそれは、そんな事したらテストタント様に」

リエルはオモチャみたいなきで狼狽えながら道の脇にある白い石垣の方にチラリと目をやる。

——ヒュッ！

リエルの視線を察知した何かが素早く動き隠れた！

「はあくん。ルアさん、お願い」

メルは俺の方を向いた後に、石垣の方へクイツと視線を送る、まるで山賊の親玉みたいな仕草だ。

『へいつ！オヤビン！任せろでヤンス！』

そう言うのと、ルベルアは少し高く浮き上がり石垣を見下ろす。と、哀れな男が丸見え

となる。

はあ……

ルベルアはため息を一つだけつくくと、手だけを飛ばして獲物を捕らえた。

——スイーン！……ガシッ！

「あつ！くつ！これは……ルベルア様ですね!? 一体何を……! あつ！や……お止め下さあつ！
アツヒヤヒヤヒヤヒヤ!!」

石垣の影にいた男が悶える。

スマンな、手が勝手にくすぐっているだけだ、俺の意思ではない。

「もうっ！テストアントさん！ リエルさ……あつ、リエルに変なこと言ったでしょ！
私はリエルさ……あつ、リエルにお友達みたいに接してもらいたいのに!!」
悶えるテストアントに言いつけるメル。

「アツヒヤヒヤヒヤヒヤハ!!」

テストントは悶えている!!

「お、お友達……盟主様に私なんか……」

リエルはモジモジしている、

モジモジしているがトイレを我慢してる訳では無いだろう。

「リエルさん……あつ、リエル！堅苦しい案内役なんかじゃなくて、私の友達になつてくれませんかっ？」

言い慣れない言葉に少し恥ずかしそうにするメル。

「そ、それは。メ……メ……、盟主様がそう言つてくれるなら！良いですよね!? テスタント様！」

赤い眼をキラキラさせて何うリエル。

「アッ……ヒヤッ……ヒヤッ……ヒヒッ……！」

テストントは悶えている!!!

「ちよつとルアさん！もう良いよ!!」

『テハツ』

「ゼハーツ…、ゼハーツ…、わ…。分かりました…！メル様がそれで良いと言うのなら…ハア…ハア…」

テストアントは息を絶え絶えにしながら承諾、これによりメルの転生後初めての友達ができた。

「じゃ、じゃあ行こっか！メル！見せたいところが沢山あるよ！」

「うん、宜しくねっ！リエル！」

リエルは急に可愛さを増してメルの手を引っ張ってゆく、

なんて微笑ましい光景だ…俺も混ぜてくれないかな。

「ハア…ハア…。ルベルア様はまだここに居ますか？」

唐突に聞いてきたテストアント、

仕方がないから俺は地面をカリカリと引っ掻いて返事をした。

◇ そういえば、それについて気付いたことが一つ。

◇ この世界に来て、俺もメルも言葉は皆同じように通じるから、共通の言葉しかないと思っていたんだが、それは転生者特有のスキルだったらしくて、文字は日本語と全く違うモノだった。

俺の姿が見えない王に「宜しく」と書いて見せたのだが――

「むう……。これは天使族の知らぬ文字だ。昔の悪魔達が使っていた文字とも違うものではないか……」

とミハエルを不思議がらせた。

ってことは声を聞かせられない俺が文字で会話しようとするなら、この世界の文字の勉強をしなければならぬという事だ。

なので今はメル以外の人には引っ掻いて音を出すか直接触る等の行為でしか、俺が居ると伝える事が出来ないのだ。

◇

「まだ居りますね。ルベルア様、そろそろ我が主との約束の時間ですよ？」

あー、もうそんな時間かよ！

ミハエルと俺の模擬戦闘デレトの時間が近いらしい。

ルベルアはもう一度カリカリと地面を引っ搔いてから城へと向かった。

約束を守るために、昨晩は少し遠くまで飛んで目一杯魔力を溜めておいたし。

きつとミハエルも喜ぶぞ！うふふふ。

—— 2時間後、

バサバサとはためく茶色のマントの化物と天使王ミハエル・カーライルが浮遊城西の空でバチバチと魔力を散らしていた。

『ハア、大魔法無しじゃキツツー！』

ルベルアはマントを羽織り、ミハエルに居場所が分かるようにして戦っている。

姿の見えないルベルアと戦闘訓練するためにミハエルが考えたので、確かにこれならルベルアが居る位置は分かるだろう。

俺が正直に、体に羽織っていることが前提だな。

「ハアーツ……ハアーツ……疲れたぞ!!ルベルアよ！」

呼吸を荒くして叫ぶミハエル。

そりや疲れるよな。

2時間ぶつ通しでやるのが間違いだろ。

ルベルアはミハエルの肩をポンポンと叩き、ミハエルはそれに答えて剣を納めた。

今日の模擬戦闘デトの終わりの合図だ。

王を乗せて城の一角の部屋まで戻ると、ルベルアはマントを脱いで部屋に置かれた鈴

を一度だけ鳴らした。

“またな”の合図である。

「うむ！中々良い汗をかいたぞ！また頼む！」

鈴を聞いたミハエルは一言残して部屋を出て行った。

この部屋だけではなく、ミハエルは俺の為にと城のあちこちに鈴を設置、二度鳴らせば“来た”の合図で一度だけなら“またな”の合図。

なんとなく、秘密の恋人みたいな扱いだ。

さて、メルとリエルはどこに行ったかな？

俺とメルはお互いの位置を感じ取れるから探すのは簡単だ。

スイーン！——

お、居た！

鐘の広場のベンチに座っているメルとリエル。

『メルー！面白い事あったかー？』

「あつ、ルアさんお帰り！長かったね！」

メルは飴玉の様な木の実を口の中で転がしながら言い、それに合わせてリエルも挨拶をくれた。

「お帰りなさい、ルベルア様。お疲れ様です！」

俺が居る方向は全然違うが、可愛いから許す。

「ルアさん、私決めたことがあるんだ！」

メルは立ち上がり城下町をグルリと見渡しながら言った。

『ん？どうした？トイレの場所を増やしてもらうのか？』

「違うよ！私ね、暫くここで暮らそうと思うの！」

——えっ？

『暫く？あんまり長すぎると村の奴らが心配するぞ』

俺はメルを心配して泣きじやくるエリスの姿は見たくない。

正直、モルドーはどうでも良いけど。

「うん、ちゃんと顔は見せに行こうと思うから時間のある日は村まで連れて行ってね。あのね、学校に通う前までここで暮らそうと思うの」

この島で何を見たのかは分からない、けれどメルの気持ちはもう決まっているみたいだ。

学校に通う前まで……約3年間か。

皆、寂しがるだろうなあ……。

『まあ、メルが決めたことだし良いか』

「ありがとう！ここに暮らすとルアさんも毎日大変になると思うけど、宜しくね！」
メルは言いながら、一度リエルの方を見て「やったね」という顔を見せる。

——ああ！メルが浮遊城で暮らすつてことは、ミハエルとは遠距離恋愛じゃなく、
毎日のように模擬戦闘しなきゃならないつてことか……。

それは……、確かに大変だ！

『まあ、そう決めたのなら明日には一度村へ戻るぞ。話は早い方が良いからな』

「うん！わかった！」

“初めてのおつかい”は“初めての家出娘”になってしまったようだが、果たしてエリスとモルドーはこのショックに耐えられるのだろうか。

#20 近くで見てもワカラナイモノ。

——浮遊城 鐘の広場——

何百年も静だったこの広場。

しかし今日は住人達が一人の人族の少女を取り囲み、なにやら騒がしくなっていた。少女は天使王に認められ、天使族の盟主となった子である。

だが、集まった住人達の殆どは少女よりも、久しく見ていなかった。『明るく笑う王』を目当てに集まっていた。

それでも、中には「初めて盟主様が来た時に、私がトイレの場所を教えたのよ！」とか「私があの時、盟主様のためにトイレのドアを開けたの！」などと話している人達もいる。

天使族の中でも盟主・メルはすっかり有名人名となったようだ。

「二人なら大丈夫だとは思いますが、道中気を付けてな！戻ってきたら宴でも開くとするか！ガハハハハ！」

笑うミハエルは初めて見たときより、かなり若く見える。

一度、村に戻るメルにミハエルは二つの物を手渡した。

村で騒ぎを起こした事への謝罪の品と、メルの傘下に入ったことを証明する文書だ。

それを受け取ったメルはミハエルにペコリと頭を下げ、笑顔で返す。

「それでは、行つてきます！」

メルはルベルアの存在が皆に分かるよう、背にはらりと布を掛けてから跨がり、リエルに向かい両手を振る。

『よし、行くかうか』

「うん！」

ルベルアは背に乗ったメルを影で包み込むと、魔力を溜めた。

ググ…グググ…！——ツツキュツンツ！！

ルベルアは一瞬でトップスピードに達するとそのままの勢いで飛んで行く。
メルはルベルアの影で包まれており、快適そうだ。

「んルルアルアサンン!!ハハヤハヤスギギギイ!!」
メルの顔の皮はブルブルと震えた。

前言撤回、メルはあまり快適そうではない。

「ギギツ……………」

……………。静かになったメル。

すまん、急加速は控えた方が良さそうだな…。

飛行するルベルアは流れる景色を堪能し、想いを巡らせた。

◇

来るときは見てなかったけど、低空で飛んできると時々モンスターも見えるな。小さな村も見えるけど、モンスター対策は大丈夫なのかな。

自分で飛んでみてよく分かる、

この世界は広くて美しい。

この広がる自然、俺が住んだ“北海道”を思い出すなあ。

けど、この世界の方が人間が余計な手を加えていないから、美しさではこっちの方が上かな。

もし普通の人間に転生したら、俺はこの世界でどう暮らしていたんだろう。

◇

ルベルアがそんなことを考えてしまう程に綺麗な景色であった。

メルは気絶しちゃったからな、ワプル村から浮遊城に戻る時は少しゆっくり飛んでメルにも見せてやるか。

——ルベルアが浮遊城を飛び立って一時間と少しが経った頃、早くもツナウ山脈へと差し掛かっていた。

そろそろスピードを落とすでしょうか…。

急加速の反省を活かして緩やかに減速したルベルア、

自転車と同じくらいのスピードまで落として飛行しながらも、ツナウ山脈を越えてワプル村目前に差し掛かった。

『メル、起きられるか？そろそろ着くぞ』

「うんっ、ふあああ…。ここ…どこ？」

気絶したまま眠ってしまったメルが、大きなあくびと共に目を覚ます。

『おう、起きたか？もうツナウ山脈を越えたからな、ワプル村はもうすぐだぞ』

ルベルアはそう言うのと、メルを包んでいる部分の影を少し開いて外が見えるよう小窓を作り出した。

「わあー！気持ちいい！あつ、でも虫が来たら守ってね！」

メルは何かを思い出したようにおでこを擦る。

『このスピードなら大丈夫だろ、もう見慣れた場所だな』

「村が見えてきたー!!」

村を見つけたメルがはしゃぐ。

「おおー、なんか久しぶり……あつ！」

『浮遊城で当たり前にしてたから忘れてたけど、このまま飛んでいたら大騒ぎになるよな』

「あつ！そうだね、誰かに見られる前に降りよう！」

ルベルア達は村を出発した時と大体同じ場所へと降下した。

浮遊城を出発してから一時間と三十分くらいであった——

——ストツ。

「うへへ！ルアさんっ、先に行っちゃうからね！」
着地するなりメルは村へと走り出した。

メルの前世の両親は、そこにどういった理由があつたのかは分からないが、彼女に愛情を与えることが出来なかつたらしい。

親の事を思い出すと全身を震わせて涙をながす程に。

そんな彼女が会うのを楽しみにして走り出す姿は、ルベルアのおっさん心をキュンとさせた。

モルドーとエリスは変なところもある。が、メルの笑顔を見るにきつと素晴らしい親なのであろう。

ルベルアも久しぶりのワプル村に、わくわくしていた。



さて、俺も久しぶりに村長のジジイにイタズラしてくるか！

見慣れた景色。見慣れた連中。

あー、やっぱり故郷は良いなあ。

村長のジジイは…と、…あれ、居ないな。

メルが帰って来た知らせでも聞いてモルドーの家にでも行ったのかな。

とりあえず村長のジジイの歯ブラシを…!!

歯ブラシの入った棚に鍵が付いているだど!?

おのれ!ジジイめ!無駄な対策を…。仕方ないから鏡に“た…すけ…て…”とで

も書いとくか。読めないだろうがな。



ルベルアは四日振りに日課イタズラを済ませてモルドー宅へと向かった。

モルドー宅はまだ午前中だと言うのに“わいわい”と賑わっており、いつもの顔触れも集まっている。

お?あの様子だとメルも今着いたばかりか。

早く帰ったと思ったけど、メルの奴、自分で村中に知らせながら走ってきたんだな。

「メル、う！本当に……本当に無事で良かったあ〜！」
モルドーは号泣しながらメルに抱きついている。

悪い奴じゃないんだが、締まらないお父さんだ。

モルドーは両鼻から鼻水を流し、左鼻の穴から鼻提灯（はなちようちん）を出している。
る。

「お父さん、泣かなヒツ！ちよつと離れて……」

メルは貰い泣きしそうになっていたが、モルドーの鼻提灯（はなちようちん）を見て
一気に引いた。

「そうなのよ！えっ？バース君が？えーっ、あはは！」
エリスはバースの母親と談笑している。

四日振りに娘が帰って来たのにマイペースすぎだろ。

あと、何か知らんが笑われてるぞバースよ。

「メルよ、戻ってきた所悪いのじゃが天使族との話はどうなったんじや?」

村長のジジイがモルドーの背中を擦りながら尋ねる。

「はい、天使族の王ミハエル・カーライル様から村長に書状を預かってます。あと、テスタントさんが来たときの騒ぎのお詫びの品も頂きました」

メルはそう言うと、小さな鞆からミハエルの書状と小包を取り出し村長のジジイへ渡した。

村長は書状を見る前に、メルの様子から悪い事態にならなかったことを察し安堵の表情を浮かべる。

「そうか、此度は小さなお前に任せてすまんかったな。ご苦労であつたぞ、メル」

村長のジジイはたまに村長つばい事を言う。

「はい、私は大丈夫です。それよりも村長、小包の中身は何ですか?早く見たいです!」

小包を出したメルは途端に子供のように「そわそわ」して村長のジジイを急かしだす。

「まって、急かすでない……。どれ……」

村長は一旦、書状を懐に入れて小包を開く。

ガサ…ガサガサ…。

——！

小包なは深い青色の石が入っており、
青の石は不思議な光を放っている。

おおー……！

集まる村人達の口から感声が洩れる。

村長のジジイが石をまじまじと眺めながら言う。

「なんとも美しい石じゃが、一体どうしたものかの」

その言葉にメルがポツリと言った。

「ラピスラズリ……!」

ラピスラズリ、俺も前世で名前くらいは聞いたことがある。
女の子が好きそうなパワーストーンだったか？

「なんじゃと!?!ラピスラズリとな!?!それは真なのかメル!」

村長のジジイは急に取り乱してメルを問い詰める。

「えっ!う……うん、昔お店の広告で見……」

メルは村長のジジイの勢いに慌てて答えようとした――

『メル!ちよつと待った!店はマズイだろ!』

それを聞き、今度はルベルアが慌ててメルの言葉を止める。

ルベルアの言葉にメルは“ハッ”とした顔をして言い直した。

「あの、天使の王様が昔お店で買ったって言ってました!」

「ふうむ。ラピスラズリと言えばワシが剣士をしていたときに噂だけは聞いたことがあるのじゃが、確か凄まじい力を持った古の宝石じゃったかな……。そんな宝石を店で……。？大昔には普通にあつたんじゃろうか」

村長のジジイはラピスラズリを大切そうに包み直すと、徐（おもむろ）に小包をテーブルへ置き、懐からミハエルの書状を取り出し、封を切った。

「どれどれ……」

余を含む天使族、浮遊城はメル傘下と成った。

詳しいことはメルから聞け

メルに持たせた小包には天使族の秘宝の一つである

“天ラピスラズリを象徴する石”を入れておいた

此れは邪気を払い幸運をもたらす力を持つ

盛大に奉り村の繁栄に役立てて欲しい

それと一つ

人には姿の見えぬ 余の使い魔を貸した

メルにしか使えぬがその存在を理解せよ

ではいつか逢えることを願う

天使王 ミハエル・カーライル

◆
なんて偉そうな文書なんだ…。

天使の王様がこんな俗な文章を書くなんて、元の俺なら絶対に想像出来なかったな。

書いた本人を知ってるから納得できるけどさ。

そして最後の文、使い魔って俺の事だよな…ククク。

先にメルとミハエルで口裏を合わせてくれれば村の手前で降りなくても良かったの

に。

◆

村長のジジイは一文、一文、ゆっくりと読み上げた。

「ワシら人族よりもずっと高貴な種族じゃと思つとつたが、案外親しみやすそうな王様じゃのう。ラピスラズリはやはり凄い物じゃったか！天使族の秘宝と書いておるが、店で買ったとは」

書状を読み終えた村長のジジイが難しい顔をしてテーブルの小包を眺める。

「それで、結局ミハエルさんと何があつたの？」

談笑を止め、静かに話を聞いていたエリスがメルに問いかけた。

そりやそうだ。肝心な事が何も書いてなかつたからな。

「えつとね、ずうーっつと暇してた王様が、久しぶりに楽しめたからお友達になろう！って言つて、私を盟主にしてくれたの！」

メルの天才子役ぶりが発揮される。

が、危険だった部分を誤魔化した所為で支離滅裂な説明となつてしまう。

「まあー！王様とお友達になっちゃうなんて凄いいじゃない!!」

——ムギユ〜〜！エリスが力強くメルを抱きしめ、豊満な胸がメルの呼吸器を綺麗に塞いだ。

村長のジジイが何かを納得したように、「ポンツ」と手を打つ。

「そうじゃったか。心配しておったが天使の王が平和的な考えで良かったのう！しかし、メルを盟主とし傘下に入るとは破天荒な王様じゃのう。

まあ、これで今回の件は終わりでいいかの。ゲイン殿、早速ラピスラズリを奉る祭壇を作る打ち合わせをしようぞ」

村長のジジイはすっかり安心し、大工のゲインを連れて自宅へと戻っていった。

村長のジジイが家に戻る頃には、モルドー宅に集まっていた村人達も解散し、家族水入らずの状態となっていた。

しかし、モルドー宅ではメルからの重大な発表が残されている。

皆が帰るのを見送ったモルドーとエリス。

モルドーは食事テーブルの椅子に座り、エリスは温めていた料理をテーブルに並べ

た。

「皆帰ったね。お昼の時間は過ぎちゃったけど。ご飯にしようか、いっぱいメルのお話も聞きたいしね！」

モルドーは四日振りの家族勢揃いをととても喜び、ぽっちやりした頬が上に上がっている。

「そうね！今日は丁度メルちゃんの大好きな、芋と豆の煮付けよ！」

エリスが素敵な笑顔でモルドーに賛成する。笑顔が可愛いなあ。

つてか、7歳児の好物シブすぎだろ！

ルベルアはメルがこれから両親に話す内容を知っている。

数日ぶりのメルとの食事を嬉しそうにするモルドーとエリス、この後の展開を想像したルベルアは、二人が可哀想に思えた。

“俺には見えてられない”

ルベルアはそつとメルに近づき囁く。

『メル、俺は少し散歩してくるから。その、なんだ……頑張れよ。途中で考えが変わったならそれでも良いからな?』

俺の言葉にメルはこちらを“チラツ”と見て僅かに頷いた。

どうやらメルの考えは変わらないらしい。

—— スウーッ!

ルベルアは壁をすり抜けモルドー宅を後にした。

はあ。

メルの近くに居てあげるべきだったかな?

いや、きつと大丈夫だよな。

昼時の村は外に居る人が少ない——

おつ!あれはメルにこてんぱんにフラれたバースの弟じゃないか、珍しく一人か?

一体、こんな所で何をしてるんだか……あつ、やっぱり鼻に指突っ込んでる！

バースの弟、マドカは鼻に指を入れたままテクテクと歩いている。
やることの無いルベルアは何も考えずにその後についていく。

ここは……村長のジジイの家じゃないか。

マドカは何も喋らずに無言で村長の家に入って行く。

「なんじゃこりゃあ！悪魔!!悪魔の仕業じゃ!!」

家の中から大きな声が聞こえてきた。

村長のジジイがルベルアの悪戯ラフレターを発見したのだろう。

そのまま村長のジジイは教会の方へと走っていった。

シユタタタツ！——

足速えーなオイ。

マドカはドアのすぐ近くに居たのに気づかれずに放っておかれた。影の薄い子である。

マドカは無人と化した家の中をトコトコ進み、
ルベルアはそれをじつと眺めている。

子供だけど、平気で人ん家にずかずか入って大丈夫なのか？

(※ルベルアの日課は村長宅での悪戯である)

住居不法侵入である！打ち首じゃ！

いや、打ち首はやりすぎか。

マドカは村長のジジイの書齋へと入ると、机の一番下の一番大きな引き出しを開けた。そこに入っていたのは一つの小包。

まさか？ルベルアは少し「ザワツ」とした。

マドカは躊躇すること無く小包を取り出し、手際よくその包みを開ける。

さすがにまずいな、止めよう！

傍観をやめ、マドカに近づくルベルア。

今ならミハエルの使い魔として天使族の秘宝を守ったって事にもできるだろうし、マドカはまだ小さな子供だから未遂なら怒られるだけで済むだろう！

そう考えたルベルアは手を伸ばした――

「僕は七歳だよ。だけどね、中身が無いの」

ルベルアの背筋に寒気が走る――

今まで一切喋ることの無かったマドカが突然口を開いたのだ。
感情を出すこと無く……ただ、謎の一言を。

マドカが「両手」でラピスラズリを持ち上げると、

栓の抜かれた彼の鼻から見えない何かが溢れ出る……。

ルベルアの伸ばした手はラピスラズリに触れ――

意識が……

遠く……

光が……

眩しい……

――
!!

「先生来て下さい!!
深澤ふかざわ 円まどかさんが目を開けてます!!」

#21 二つのセカイ。

◇

—日本、北海道のとある病院—

田舎にしては大きな規模のその病院に意識不明の重体患者が運ばれた。それ自体は悲しい話ではあるが、珍しい話では無い。

少し変わっていたのは、警察の調べでも彼がどうやってその状態になったのか分からない事と、彼は極希な「身寄りの無い人」だったという事だ。

病院理事長も、身寄りの無い事実が纏められた書類と彼の容態を見た時に、お金の事は諦めた。が、せめて最後の刻まで見届けようという精神で治療が続けられていたのだ。それは彼を預かってから一ヶ月と二週間が経った日だった。

◇

「先生来てください！^{ふかざわ}深澤 ^{まどか}円さんが目を開いています！」

静かな5F病棟にそんな声が響いた——

——天井が見える…。

木造の優しい造り……ではない。

白のボード天井に白い蛍光灯が二本並んでいる。

俺は周りを見渡した。……痛っ、体が痛い。

まるで自分の体では無いように固まっている。

「今こちらに先生が向かってるので、まだ寝ていてくださいね。ずっと寝たきりだったから……体、硬くなってますから。」

清楚な雰囲気的女性看護師さんが優しく語りかけてくる。

なんて優しい口調、彼女は“天使族”よりずっと天使だ…。

……!!天……使族……?メルは……?……メル!!

俺の脳裏に、つい先程までの事が鮮明に甦る。

しかし、ここはどう見ても元の世界、俺は微かに動く手を持ち上げ、自分が“影のよ

うな悪魔”じゃないことを確認した。

俺は長い夢でも見ていたのか？

そう思った時、この世界で最後に見た光景を思い出す。

「あの、看護婦さん……、俺と一緒に病院に運ばれた女の人は助かったんですか？」
俺はなんとか掠れた声を絞り出し、看護師さんに尋ねた。

それを聞き看護師さんが不思議そうな顔をして首を傾げる。

「えっと、深澤さんが運ばれた時、一緒に運ばれた人は居ないですよ？」

居ない……？

ああ、そう言えば二人一緒に倒れていたとしても同じ病院に運ばれるとは限らないんだっけか。

「そう……ですか。違う病院かもしれないませんが、一緒に倒れていた女の人が居るはずなんですけど、助かったかどうか分かりませんか？」

俺は少し質問を変えて尋ね直す。

看護婦さんは変わらず不思議そうな顔をしている。

そして教えてくれた、

「多分、まだ少し混乱していると思うのですが、深澤さんは一人で倒れていたんですよ。頭に怪我をして倒れていたの、警察が色々調べたみたいですけど、今も詳しいことは分かっていない様ですね」

そんな……そんなはずは……！

シャツ！——

ベッドの周りを仕切っていた薄いピンク色のカーテンが勢いよく開けられ、そこから医者が顔を覗かせるとポツカリと口を開けた。

「驚いた……。深澤さん、お帰りなさい！あなたが目を覚ましてくれたのは奇跡ですよ！」
医者は興奮気味にそう言う俺の手をギュツと握りしめた。

思い返せば俺の人生は不幸と奇跡から始まったんだよな。

俺は悟った、これが自分に起きた第三の転機なのだ。

第三の転機は酷く曖昧で、それでいて確かに感じさせた。もう可愛い相棒と一緒にいられないのだと……。

それからの俺はリハビリの毎日。

祖父母が残してくれた遺産と、相手も居ないのに貯めておいた結婚資金により、お金の心配が無かったのは幸이었다。

一日の入院費二千円上乗せでインターネット環境付きの一人部屋にしてもらった俺の元には、たまに建設業の仕事仲間が見舞いに来て面白い話をして行くくらいで、それ以外の時間は備え付けのパソコンで暇を潰した。

リハビリ、ネット、リハビリ、ネット。そんな暮らした。

二ヶ月が過ぎ、毎日のリハビリの甲斐もあり、体も普通に動くようになった頃、ネットの中で俺は一つの気になるモノを見つけてしまう。

自分に起こった事件の手掛かりが何か無いかと、この街の情報を色々探していた時だ。

小さな街なので必然と同じような事ばかり書かれた掲示板、そこには行方不明の人の情報を交換するための欄があつた。そこに並ぶ数名の名前、そのひとつ。

田^た渕^{ぶち} 芽^め溜^る 17才。 捜索中。

俺は全身の毛が逆立つような感覚を覚える。

情報は警察から出されたもので、時期は一ヶ月と少し前。

俺が倒れていた時期と重なる！

俺は「自分の街」の名前と田^た渕^{ぶち} 芽^め溜^るという名前を入力して、検索をし直した。

検索結果で出てきたのは芽^め溜^るの方ではなく、田^た渕^{ぶち}と言う男の名前。

5年前に起きた殺人未遂事件の犯人の名前だ。

浮遊城でのメルと言葉を思い出す。

“私のお父さんは殺人未遂で——”

俺の足から背中までが一気に鳥肌を立てる。

メル……。あの時、ビルに居た女の子がメルなんだ！

愚か、あまりにも愚かすぎる！

俺は何故 今までそれを考えもしなかったんだ！

あの日同じタイミングで転生した俺達、

同時に死んだ人と考えるならあの娘しかいないじゃないか。

しかし彼女はこの世界の記録では死んで居ない、となると神隠しというやつなのか

あれはやはり夢じゃ無かった…。

気付くと俺の両目からはボロボロと涙がこぼれ落ちていた。

// 芽瑠 // 再度キーボードを叩く。

街の名前を入れ忘れた検索に出てきたのは、知りもしない地下アイドルのブログと、芽という文字と瑠という文字の説明。

何やってんだ俺は、今調べたいのはそんなことじゃない！

街の名前を入れなきゃ……。ん？

瑠は一文字だけでは意味を持たぬ文字……。

瑠璃として初めて意味をなす。

一文字だけでは意味を持たぬ……。

俺の心に何かが引つ掛かる。

瑠璃とは———！！

そこで俺に衝撃が走った。

瑠璃^{るり}とは、今で言う宝石のラピスラズリを表す……！

ラピスラズリ!!

何かに駆り立てられた俺は、軋む体で椅子から立ち上がり、すぐに病院からの外出許可を貰うべくナースステーションへと向かった。

それを手に入れたからと言ってどうなる訳でもないだろう。

けど……俺が今、何よりも欲しいのはラピスラズリだ！

俺の個室からは直線通路から一度左へ曲がらなとナースステーションには行けない。
い。

焦る必要など無いのだが、俺の足はこの二ヶ月の間で一番速く動いている。

左へ曲がり、あとは真つ直ぐ行くだけ!!

——!!そこで俺は足を止めた……。

角を曲がると目の前に小さな少年が立っていたからだ。

「なんで、なんで君がいるんだ……」

立ち止まった俺は見えてはいけないものを見たかのように呟いた。

その少年は鼻に指を入れ、こちらをジッと見ていた。

「僕には中身が無いの。本当はあったはずなんだけど。おじさん、僕に中身を頂戴……」
少年は表情を変えることもなく、まるで感情が無いかのように淡々と言った。

“あの世界を知る前の俺だったなら、幽霊の類いかもしれないと思えば必殺の”
踵落としネリチヨギ
を披露していただろう。

いや、この軋む体じゃそれは無理、ローキックが放てれば御の字といったところか。

そんな事、どうでもいいよな……俺は少年を知っているのだから。

この少年はあの世界が夢じゃ無かったことを、今ここで証明している。

「俺はあの世界で、俺がメルを一人にはさせないつて約束したんだ。だから俺に渡せるものなら渡す。その代わり、あの日のあの場所へ戻して欲しい」

戻ってきたこの世界に何の未練も感じない訳ではない。

仲の良い奴も居るし、本やゲーム、言い出したらキリがない程好きなことも多い。

けど俺はあつちの世界で大切なものを見つけてしまったから、守りたい約束があるから、その為に来ることをしたいんだ！

「あの日にはもう戻れないよ？」

相変わらず表情こそ変えないが「当たり前前だろ？」といった様子で言う少年。

「それでも、俺は行かなきゃならないんだ！」

俺はさすがのような気持ちで少年にぶつけた。

「なら、僕が深澤円ふかざわまどかになっても良い？」

少年は言った。善意も悪意も感じさせない声で言った。

「そうしたら俺はこの世界での記憶を無くしちゃうのか？」

祖父母に貰った沢山の幸せ。それを捨てるのはここまで大切に育ててくれた大好きな祖父母に対して酷い仕打ちではなからうか……。

俺の心に祖父母への罪悪感が生まれる。

「違うよ。深澤円ふかざわまどかの記憶と思い出は僕とおじさんの二人のモノになるんだよ。ただ、お

じさんはもうこっちの世界に戻ってこれなくなるけどね」

少年は俺の心の奥まで見透かすように言葉を発している。

俺は少年の眼を見て心を決めた。

「……………。分かった、それで良い」

……。この世界で今まで助けてくれた皆、ごめん！そしてありがとう、新しい俺の事も宜しく頼む……！

少年が服に付いた大きなポケットから青く光る石を取り出し——
その石を両手で持ち上げた、あの時のように——。

栓の抜かれた彼の鼻に見えない何か吸い込まれていく。

やがて少年はグングンと大きくなり、鏡でも見ているかのように俺と同じ姿になり

「じゃあな、悪魔さん」。向こうの奴等は俺のことを忘れれると思うけど、俺はもともと居ない存在だったから気にしないでいいよ」

「さつきまで少年だった俺」が俺のような口調でそう言い　ニカツ　と笑う。

ああ、銀歯の場所まで同じだなあ——

俺も意識が遠くなる中　ポツリと言った。

「俺を宜しくな。円」

円

俺は額に新しい傷のついた見慣れた顔に別れを告げる――

光が……眩しい……

待ってろよ……メル！

そうして俺は『第三の転機』を自分で選び光の中へ消えていった――。

二章 黒ノ王

#22 セカイの時差、邂逅シ。

霸王歴1391年——エンドルゼア北東部

そこには短い草の生い茂る草原と、所々に見える岩肌に囲まれ、簡素な木造の建物がポツポツと並ぶ小さな村「ハクヌカ」がある。

とても小さな規模であるその村の周りで白いドラゴンに乗った者達が一本角を生やした大型の鳥型モンスター、ホーンバードと戦闘していた。

「そつちに行つた！素早いからよく狙え！」

白黒の長い髪をなびかせスラリとした女戦士は、逃げ惑うホーンバードを目で追いながら後ろに続く味方に指示を出す。

「任せてっ、リエル！右！」

ドラゴンに乗りホーンバードと戦っている者の中で唯一雰囲気異なる少女が居る。その少女は巧みに自分の乗るドラゴンに指示を出しホーンバードを追い詰めて行く。

「たあつ！」——ビュンツッ！

「ギエエエエエ——！」

少女が剣を一振りするとホーンバードが断末魔の叫びをあげて地上に落ちていった。

「良くやった！今ので全てだ、ハクヌカに戻るぞ！」

スラリとした女戦士はそう言うと、自らのドラゴンを翻し地上に見えている村へと向かい、他の四体のドラゴンとそれに跨がる男女の戦士達もそれに続いた。

モンスターの驚異から救われたハクヌカの村人達は歓声で戦士達を迎える。

「天使族の皆様！今回も本当にありがとうございました！」

集まる村人たちの中から一人歩みでたハクヌカの村長はお礼を述べ、戦士達に深々と頭を下げた。

「礼には及ばんさ、我々も食料や生活用品を沢山頂いているからな。今日狩ればまた数は村の戦士達だけでも大丈夫だろ」

スラリとした女戦士は歯切れの良い言葉で返す。

「そう言つて頂きありがとうございます。さあさ、簡易なものですが食事を用意しましたので食べていってくださいや！」

そう言うのと村長は用意してあつた食事を村人達に運ばせた。

外に並べられたテーブルには、パンや肉。この辺りで取れる食用植物が彩りよく入れられたシチューなどの食べやすい物が並べられてゆく。

「みんな、ハクヌカ村からの厚意だ、喰おう」

スラリとした女戦士の言葉を聞き、周りのドラゴン達が姿を変えてゆく、
気付くとドラゴンは一体も居なくなり、9人の天使と一人の人族が食事を囲い、
わいと喋り出した。

「アリエス様！私達の動き、どうでしたか？」

人族の少女がスラリとした女戦士・アリエスに尋ねた。

その横では少女と同じくらいの歳に見える天使の女の子が、パンをかじりながら女戦士の返事を待っている。

「ああ、メルもリエルも良い動きだったよ。もう竜騎士ドラゴンナイトを名乗っても良いんじゃないか？」

アリエスは笑顔でシチューを掬いながら二人を誉めた。

「しかし、この辺りもすっかりモンスターが増えたな！」

戦士の一人が行儀悪く、食べカスを飛ばしながら言う。

「そうだな、五年前にツナウ山脈界隈に黒い鳥の王がやって来たのが原因だろうな。すっかり鳥型のモンスターが増えちゃった」

食べる手を止めアリエスが答える。

「いつまでも天使族の人たちにワプル村に居てもらおう訳にもいかないんだけど…。私がもう少し強くなるまでは迷惑かけるね」

人族の少女メルが申し訳なきように皆の顔を見回す。

「何言ってるの、メルは私達の盟主なんだからそんな事気にしなくても良いんだよ」

ドラゴン化をしてメルを乗せ戦っていた天使の少女リエルはそう言いながらポンと胸を叩いた。

「その通りだぞメル！お前が来てからというもの、何百年も暇そうにしていた我らが王も楽しそうなのだから気にするな！」

男戦士の言葉に、他の戦士達も笑い頷く。

戦士達がそんな談笑をしている最中、そこへ猛スピードで向かってくる影がひとつ。

その影にアリエスが気付き、

「あれは、テストアント様か？」と眼を細め一言呟いた。

戦士達の間を割って降り立った白いドラゴン。

それを見たハクヌカの村長は慌てて近寄り挨拶を交わす。

「これはこれは！テストアント様！よくぞおいで下さいました。浮遊城に送れる分の食糧はまだ少し足りてませんが、良ければ持って行って下さいませ」

テストアントは白きドラゴンから天使へと姿を変え、村長に言葉を返す。

「いや、村長。お気持ちはありがたいが食糧を頂きに来たわけでは無いのです」

村長に軽く会釈を済ませ戦士達の方を向いたテストアント。

その顔は難しく、良い知らせでは無いと戦士達が察するには充分であった。

「何かあったのですかね？」戦士の一人が尋ねる。

「うむ、戦闘で疲れているであろう皆には悪いが、ワプル村に常駐していた戦士の一人が浮遊城へモンスターが出たと知らせに来たのだ」

「常駐の戦士達」とは天使王ミハエル・カーライルの命を受け、ワプル村に滞在したままワプル村を守っている天使達である。

その実力はアリエスを除き、今ハクヌカで戦っていた戦士達より一つ上をいく者達である。

その「常駐の戦士」がわざわざ浮遊城まで知らせに行かなければならない程のモンスター

となれば、通常のモノでは無い。

それはここに居る者にとって、想像に難くなかった。

「我らが主と直属の兵士は知つての通り、浮遊城を離れられない。よって、皆はワプル村へと加勢に行つてもらえぬか？浮遊城に居た戦士達も数パーティは向かっているのですか……」

特徴的な声で語るテストアント、その表情が「行けば無事では済まないかもしれない」と物語っている。

その言葉に一番慌てたのはメルであった。

「あ、あの！私は行きます！私だけでも行きます！」

「まあ、待て、焦るんじゃない。みんな、腹一杯喰つたか？」

肉を頬張りながら戦士達に声をかけるアリエス。

「おうー！」

「いつでも行けるぜ？」

「まあ、なんとかなるさ」

ムグムグと急ぎ、皿の物を口に運んでいた戦士達から、そんな声が飛び交った。

「みんな……ありがとう！」

メル之眼に涙が潤む。

「お礼なんて要らないよ、メルの故郷をモンスターが好きにさせたらミハエル様に怒られるもん。それに私とメルはパートナーじゃん。ほら、行くよっ、ドラゴフォーム！」

リエルは早口気味にメルを捲し立てると、魔法を唱え体を竜に変化させた。

タンツ！——ファサツ。

身軽にリエルへ飛び乗ったメル。

「リエル、お願い！」

その一声を受けワプル村へと向かい飛び始めたリエルドラゴン。

「よーし！みんな続け！」号令をかけるアリエス。

それに応え、ドラゴン化したパートナーに乗り空を駆け出した戦士達も、見送るハクヌカの村人から激励の言葉を浴びながら南に進路を取る――

「待っててね！お父さん、お母さん！村のみんな！」



エンドルゼア東部――ワプル村

「村人達は無事か!？」

ワプル村に常駐している天使の戦士達。

そのリーダーであるガツシリとした体つきの男戦士・トマスが緊張した面持ちで味方の戦士に確かめる。

「村人達は無事だ。しかし、なんだこれは……。何が起こってるんだよ」
戦士の一人が目の前の光景を呆然と眺めながら言った。

戦士達の耳にモンスターの叫び声が止むこと無く聞こえてくる。

「グエエエ！」

「ギエエエ！」

「クアアツ！」

いつも通りに、ワプル村の周りを飛び回るホウキ頭の鳥型のモンスター、ブルームヘッド達を狩っていた天使族の戦士達。

だが、二時間と少し前にここらでは見掛けない、大型の異質なモンスターが現れたのだ。

その出現に呼応するように大量に集まってきた鳥型のモンスター達。

その異質なモンスターが現れた時、戦士達はついに「黒き鳥の王」が自ら襲ってきたのかと思った。

しかし――

「ギャアアア！」

「グルウアア！」

「ガアアウウ！」

また三体のモンスターが絶命した。

そう……モンスター達が死んだのだ。

様子を伺う戦士達に異質のモンスターが何かを口にした。

『キイエモイエカ……オアアラエンシソクオ……』

大地の底で亡者が叫んでいるような、

言葉なのか呻きなのか分からない、そんな声で。

「消えてもらおうか、愚かな天使族よ……?」

トマスが異質な魔物の言葉をなんとか聞き取り繰り返す。

「やはり、こいつも敵なのか……! 言葉を喋れないところを見ると知能は低そうだが、モンスターも俺達も無差別に殺するつもりか!?! どうする……トマス」

戦士の一人が額に大粒の汗を浮かばせながら 小さな声で言った。

「奴が何者だろうと逃げるわけには行かないのだぞ! 奴がこつちに攻撃を始めたら村人達だけでも守らなければならん!」

怖じ気付く戦士達に渴を入れるトマス、しかし、トマス本人も流れる程の汗を滲ませている。

異質なモンスターが再び何かを口にした。

『オオオ……カヌイガアオオアジャハア……!』

「オオオ、下等種族共は邪魔だ……。つて言ったよな?」

トマスは、とても言葉と言えない声を必死に翻訳する。

その行為に意味があるのかは分からないが、相手が相手だけに少しでも不安要素を無くそうと試みていたわけだ。

しかし、不安は無くなる所が増すばかり。

「本当かよ、だとすればいつ村を襲って来てもおかしくないぞ! 応援はまだ来ないので!?」

叫ぶ戦士は応援が向かってくるであろう北の空を見上げるが、そこには味方の影すら見えず途方の無い絶望感を覚える。

「仮に全速力で向かって来てたとしても、まだ来ないだろうな。皆、覚悟を決めろ、俺達は天使族のドラゴンナイトだろ!」

怯える仲間を、そして自分自身を鼓舞するように言ったトマスが力強く剣を握りしめると、その声に合わせてそれぞれの戦士達が竜化した。パートナーに乗り武器を構えた。

天使族のドラゴンナイトである誇りが震える手足を鎮め、トマスの力強い言葉が覚悟を決めさせた。

「行くぞ!!」

「おぉーっ!!」

勇ましく飛び出した戦士達が鳥型のモンスターの間を縫って異質のモンスターへと向かって行く――

「みんなぁーっ!大丈夫っ!」

響いたのはメルの声――

ハクヌカ村に居た戦士達は、先ほど常駐の戦士が眺めた場所より遥か上空から滑空するよう駆けつけたのだ。

その瞬間、異質のモンスターが一段と大きな雄叫びをあげる。

『オオオオオオオオオオエルルウ!!』

『ダアアウハアウドオオ!!』

と同時に異質のモンスターから黒い腕が伸び、数体残っていた鳥型のモンスターを全て握り潰した――!

突然の出来事に攻撃を仕掛けようとしていた戦士達は体勢を崩してしまふ。「しまっ……、気を付けろ！次が来るぞ!!」

一際大きくゴツイドラゴンに乗ったトマスも体勢を崩し、必死な声が響く。

止まらなかったのはただ一人、メルだけだった。

「わあああああつ!!」

異質のモンスターを目の当たりにし、叫ぶメル。

その声は戦士の雄叫びと呼ぶにはあまりにも明るい声だった――

「わあああああああ!!」

タンツ――！メルがりエルドラゴンの背を蹴り異質のモンスターへと飛びかかった

！

仕留めるつもりの特攻ならばあまりに無謀、危険極まりないその行動に、戦士達は皆等しく息を飲んだ。

パフツ………!!

— ?

メルは異質のモンスターに抱きついていた。

「えええええええ——つ!?!」

息を飲んでいた戦士達は目玉が飛び出るほど驚き叫ぶ。

メルは溢れる涙を隠しもせずと言った。

「グスツ………おかえり………!! ルアさんっ!!」

#23 その時、俺ハ。

光に包まれて全てが真っ白になった…。

この感覚は前にも二度経験がある——

気付くと俺は鳥の声がさえずる森の中にいた…。

「ギヤアアアス！」

「クワアアア！」

「ギイイイイイ！」

いや、これ…さえずるとか言うレベルじゃねえ！

なんか小鳥ってか、馬鹿みたいにデカイ鳥だし。

てかモンスターじゃねえ!?

いや、今はそんなことより俺の体がどうなってるかだ。

影だ。影のような黒い手、体。足は……無い。

顔は見えないけど、きつと知ってる顔だろう。

戻った！悪魔の体だ！俺はこの世界に帰って来た！！

くうー！このなんとも言えない感覚！

愛しかったぜ！悪魔ボデイい痛だだだ！

エンドルゼアへと戻った喜びに浮かれるルベルア、その肩（的な部分）に突然小さな痛みが走る。

見ると鳥型のモンスターが俺の肩に止まり、せつせとツツいていた。

「キイエエエエエエエエエエエ！！」

うるさつ！耳元（耳は無いが）で鳴くんじやないよ！

チチチチチチチチチチチチチチチチチチ!!

鳥型のモンスターが奇声をあげ、休むこと無く俺をツツいている。

チチチチチチチチチチチチチチチチチチ!!

親の敵のように俺をツツいている。

チチチチチチチチチチチチチチチチチチ!!

それはまるでマシンガ……っ痛てえつつつてんだろ!

あまりにも執拗なツツキ攻撃に俺の我慢も限界に達し、右手を振りかぶった。
ツパン!! 「ギャピツ!」——ツカサツ。

鳥型のモンスターは俺の渾身の張り手で吹き飛んで落ちて行く。

はあ、まったく……人の喜びに水を差しやがって!

しかし、メルはどこにいるのかな？全く分からん。

いつもならメルの居場所は感覚で分かるはずなんだけど……。

メルと離れすぎてるってことか？とりあえず飛んで周りを見てみるか……。

俺は体に「ギュツ」と力を入れ、力強く跳ねた。

よいつ、しょ!!——ズシン!!

しかし飛んだはずの体は、すぐに地面へと落ちてしまった。

あれ？

俺はもう一度、齒を食いしぼり力を溜めると、空へ向かってとび跳ねた。

もういつ、ちょ!!——ズシン!!

一回目と同様に、ほぼ浮き上がることなく地面へと逆戻りする体。

飛べない……、そんな……。

二ヶ月人間として過ごしたから、この体での感覚が鈍ったか？

俺は嫌な感覚を覚え、改めて自分の体を触って確認した。
そこで違和感に気付く。

俺、太ったか？ つか、俺デカくね？

おかしい、何かがおかしい。

——ガサガサツ！

考え込むルベルアの足元（足は無いが）で何かが動く。

——ピョンツ！

小さな動物が草の陰から飛び出した。

おっ!?! なんだ、ウサギか。

つて、ウサギちつちええー!!

胡麻みたいな大きさじゃねえか！

イヤ、胡麻は言い過ぎか……米粒？うーむ……
って、それはどうでも良いか。

改めて周囲の景色と比べると、自分の体が以前よりも遥かに大きくなっている事に気が付いた。

俺は低スペックの思考回路をフル回転させ答えを導き出そうとしたが、マドカが言っていた「あの瞬間には戻れない」という言葉に鍵がある、という推測で終わった。

なんかよく分からんけど、俺が向こうでリハビリしてる間に、世界の状況も俺の体型も変わっちゃったみたいだな。

もしかしてメルの居場所が分からないのもその所為か？
無事だと良いんだが……。

俺は暫く考え込んだ後、状況を知るためにもワプル村を目指すことを決めた。
村に行くにしても、ここが何処かも分からないんじゃないんじや話になんねえよな。

やっぱり跳んで場所を確認するのが手っ取り早いかな、気合いを入れて……とうっ!!
——ブオツ!!……ドツシイイン!!

ルベルアはこの巨体からは想像出来ない程の情けないジャンプをする。そのジャンプはソファから転げ落ちる様な、鈍臭い猫を彷彿とさせるモノであった。

ふいー、体が重い。でも見えた！間違いない！

今見えたアレはワプル村だ、やっぱり村の近くだったか！

それにドラゴンみたいなのも見えた、あの白いドラゴンはきつと天使族だよな。

この鳥型のモンスターから村を守ってくれてるのか？

前はこんなの居なかったのに……とにかく行ってみるか！

村の方向を確認でき、俺の心は高鳴った。

やっとメルに逢えるかもしれないと、そう思った途端に重くなった体を忘れて軽やかに進んで行く。

——ズリ……バキツ……バキイ……ズリ……メキメキ……

俺は、まるでカタツムリのように下半身を引きずりながら木を薙ぎ倒して進んだ。

自然破壊も甚だしい迷惑な悪魔である。

いつの日か募金と植樹をするから、今は勘弁してくれ！

進みだしてどれくらい経っただろうか、思っていたよりも早くに村の手前へとたどり

着いた。

俊敏とは言い難いが、大きいモノが進めば小さいモノよりも目的地に速く着くということであろうか。

例えば、人間とゾウでは歩幅が大きく違う。同時にトコトコ歩けば確実にゾウの方が早いのだ。

しかも、ゾウは時速40キロ以上で走ることができるのだから。

但し、この世界の場合、俺は前の体の大ききで空を飛んだ方が断然速いのだが。

村の手前へ着いた俺はくると一周回りながら辺りを見渡した。

周囲には遠くから見たよりも多く鳥型のモンスターが飛び交っている。

先程とび跳ねた時には、天使族と思しきドラゴンが戦闘していたはずなのだが、この場所へと近づく途中でパツタリと見えなくなっていた。



天使の連中は休憩時間か？モンスターが居るのに随分と余裕があるんだな。

仕方ねえ、メルが何処に居んのかも分かんねえし、天使が休憩してる間は俺が代わりに働いてやるか！

村のレディー達が襲われたら可哀想だしな。

◆ モンスター共よ、悪いが俺の「リハビリ・パートツー」に付き合ってもらおうぞ！

飛び交う鳥型のモンスターを見つめながら、俺は自分の体の感覚を確かめた。

えーと、指を伸ばすイメージで……ヒュツ！

ドスツ！——「ギャヤアア！」

よしっ！大丈夫だ。

ヒュンツ！——グサツツ！…ビュツ！——ドシユツ！

「クワアアア！」「ギエエエ！」

良い感じだ。体は俺の意思で動いてくれる。

鳥型のモンスターを何体か倒した頃、俺は自分へと向けられる視線に気付いた。それはワプル村に設置された見張り台からのモノ。

あれ？前はあんな見張り台無かったんだけど

——ん？

なんだ、天使の奴等居るじゃん、休憩はもう終わったのか？

あんなところで見てないで一緒に戦ってくれば良いのに。
全く、大変だろうと思って手伝ってやってんのに、サボるなんて酷い奴らめ。

そう思いながらも、俺はモンスター狩りを続けた。

ヒュヒュンツ——シユツ!!

——ドドツ…トスツ!!

「ギエエエエー!」 「グルウアア!」 「ガアアウウ!」

ふう、結構片付いたけど…まだ居るな。

天使族はまだ見張り台から動かない。

それを不満に思いながら見ていた時、俺は大きな落とし穴に気がついた。

そうだよ!俺の姿を知ってる天使族なんて、ミハエルとテストメント、あとは一緒に戦った兵士達しか知らないんだ!!

そりゃビビるよなあ、いきなりこんな化け物が現れたんじや。

あれ?そもそもなんで俺の姿が見えてるんだ?

うーむ、関係あるとしたらやっぱりマドカの一件だよな。

まあ、今は深く考えなくても良いか。

んー、つて事は、声も聞こえるのか？物は試し！

俺は見張り台に居る天使へ声をかけてみた。

『聞いても良いか？お前達、天使族だよな？』

俺の声に天使族が酷く動揺し仲間と顔を見合わせたり武器を握りしめたりしている。

——ん？聞こえ……てるよな？

するとガツシリとした体格の天使族が俺の声をなぞるように言葉を発する。

「消えてもらおうか、愚かな天使族よ……？」

——えっ？なんて？

それを聞いた他の天使はオロオロと騒ぎだし、俺を見て敵とか皆殺しだとか言う者や、村の方を指差す者、遠くの空を眺めたりしている者も居る。

——どうしてこうなった!?

ちよつと聞いただけなのに！ほんと、泣くぞ！！

悪魔だつて一生懸命に気を使いながら生きてるんだぞ！！

とりあえずガツッシリした体型の天使の聞き間違いだと教えてやらなきや！

『おいおい！！待てよ少しは！聞き間違いないか！』

俺の言葉を聞き、天使族の表情が凍りついた。

その顔を見た俺の心も凍りついた。

——絶対なんか勘違いしやがった！！

固まっていた天使の連中は急になんのканのと騒ぎだし、武器を手にしたり、ドラゴン化したりと戦闘体勢を整える。

おいおい！俺を狙ってるのか？まさかな、いや……俺か。

はあ。しゃーない、なんとか防御だけでやり過ぎすか。

怪我をさせるわけにもいかないし、鳥型のモンスターからも守ってやらなきやいけなし。見た目が悪魔つてのも大変だなあ。

スウー…ハア…。

おしっ！へこんでてもしやーない！

気を取り直して……………、

—!!

—今、確かに……………、

—やっぱり感じる!!

ため息をついた時……………イヤ違う。

息を吸ったとき、体にビリビリ力が入ってきた！

ああ、そうだ。そんな事も忘れてたよ。

忘れる訳も無い筈なのに、これも“里帰り”の影響か？

この体は空気を、その中に含まれるエレメントやmanaを吸うことで力を出せるんだっ
たな。

ククク、たった二ヶ月しか経ってないのに忘れるなんて。

メル！今なら何処に居るか分かる！

近い、きつとメルも俺を感じてるはず！

感動の再開に余計なモンスターは邪魔だ！

俺は四方八方で飛び交う鳥型のモンスターの全ての位置を魔力の流れから把握し、間髪入れずに魔力を解き放った――

『ダークハンド!!』

体から無数に伸びた影の手が、迫るドラゴンナイト達を避けながら鳥型のモンスターだけを握り潰した。

それとほぼ同じ瞬間、俺の魔法の間を縫って、綺麗な白毛のドラゴンに乗った少女が空から駆けてきた。

乗っていたドラゴンの背を蹴り、俺の体目掛けて真っ直ぐに飛び込んだ少女――

その時、少女の不思議な色の眼からキラリと一つの雫が落ちた。

飛んできたきた少女を優しく受け止めた俺にも熱い感情が溢れる。

メル、ああ……大きくなっただな！

メルは俺に抱きつき顔を埋めたまま、しがみつくと手に、より一層の力を込めた。
「おかえり……！ルアさん……！！」



『ダアアダアアイバアアアメエエラウ！！』

（ただいま、メル！）

「ヒイツ!!なにその声!!キモすぎ!!」

メルが毛虫を見るような眼で俺を睨み付ける！

——これが、 “悪魔ルベルア” 再誕の瞬間であった。

2 4 調子に乗るとロクな事にナラナイ。

魔光粒星・エンドルゼア——
まこうりゆうせい

霸王歴1391年、この世界で八年振りに出逢った者達が居た。

今、ワプル村付近からは地獄の亡者の呻き声というか、一度マイクを握ったら二度と離さないゴリランボー部長の地獄のリサイタルというか……。

そんな声が、モンスターの襲撃から隠れている村人達をガタガタと震え上がらせていた。

目の前で何が起こっているのか分からずに固まっている天使族のドラゴンナイトも、危険を感じ武器を握り直す。

諸悪の根源は、久しぶりのメルとの再開に喜び興奮するルベルア。

『アニイツデエダアヨオオオオ！』

(逢いたかったよ！)

「ヒイイ！ゾワゾワするう！」

メルは喜んでいない。それどころか、口をへの字にして嫌がっている。その様子を見たルベルアは少し「しょんぼり」して少し俯き考えた。

ほんの少し見ない間に反抗期が来てしまったのか……。

もう！お父さんの洗濯物と一緒に洗わないでって言ったじゃない!!とか言う歳になっちまったのかな。

まあ、子供が居なかったから言われたこと無いけど。

しかし、ルベルアの精神力はまだ尽きてはいなかった。

巨大な黄色の瞳でじっと見つめ、様子のおかしなメルに問い詰めた。

『ドボオオオジダアドオオエラウウ!!』

(どうしたんだ、メル！)

「だから、何言ってるか分かんないってルアさん！」

腰に手をあて怒っているメル。それはまるで、悪いことをした子を叱る親そのものであった。

巨大なルベルアが可愛らしい少女に叱られている姿は、事情の知らぬ周りの天使達の眼には酷く不気味な光景として映る。

なぜメルが怒っているのか、その理由が分からずに困るルベルアはもう一度頭を働かせ考えた。

何言ってるか分からないとは、言葉が通じなくなっただのか？

いや、メルの言ってることは分かるのだからそれは無いか。

うーむ…。

俺が悩んでいると、メルの乗っていたドラゴンが木の枝に止まり、可愛らしい天使族の女の子へと姿を変えた。

——ん？この子には見覚えがある……。

リエルじゃないか、少し成長したな！

俺は知ってる顔の発見に嬉しくなり、意気揚々と声をかけた。

『オボボボ！リデエドウウ！！』

（おおーリエル！）

言いながら「やあ！」と手を上げて見せたが、その所為で無駄に巨大な右手が周りの

木の枝をバキバキと散らした。

「キヤアアアーツ！」絶叫するリエル。

「こらっ！ルアさん！いい加減にして!!」

リエルが泣いた事でメルの怒り度も上昇する。

ルベルアも困惑し、泣きそうだ。というより、もし涙があるのなら、既に号泣していた事だろう。

そんな中、ルベルアとメルのやり取りを見ていたアリエスが、ククアドラゴンに乗ったまま二人の目の前までやって来た。

「メル、そいつはお前の知り合いなのか？危険が無いなら他の仲間と避難した村人達を呼びに行ってくるが」

アリエスが折れた木の枝を受け止め、その枝で自分の肩をトントン叩きながら言った。

「あつ！アリエス様。うん、大丈夫です！こんな見た目だけど、他のモンスターが来ても守ってくれると思うから！」

メルは自信満々に答え「グツ」と親指を立てて見せる。

「ふはっ！ そうか。気持ち悪い巨大なモンスターかと思ったが、メル信頼は厚いな」

そう言うと、リエルを除いた他の天使達に、村へ行くように指示を出したアリエス。

村へ向かって行く仲間を目で追った後、そのままルベルアへと向き直り、査定でもしているかのようにジツと見つめだす。

初めて見る天使の姿に、ルベルアも興味津々に視線を寄せた。

この人は見たことないな、アリエスっていうのか。

天使族だつてのは見た目で分かるけど、綺麗なのに男みたいな喋り方をする人なんだな。なんかさつきからジロジロ見てくるし、俺の事を舐め回すように……はあ……舐め……回すように……はあ……はあ……見てくる……んはあ。

おっと失礼。昨今の環境問題について考えていたのだよ。

メルからの冷たい視線で正気を取り戻すルベルア。

俺をジロジロ見ていたアリエスは「ふーん」と気の抜けた声を出した後、ぶつきらば

うな言い方でメルに尋ねた。

「なあ、そいつ。前は普通に喋れたのか？」

『イバボボオサバエルルウオオ!!』

(今も喋れるよ)

「ちよつと！ルアさんは黙つてて！シャラップ！えつとね、前は私にしか聞こえなかつたんだけど、ちゃんと喋れたよ！」

俺に対するメルの当たりが非常に強く感じるんだが、気のせい……じゃないよな。——
——ん？前は喋れたよ？

アリエスは納得した様に小さく頷く。

「そうか。なら今そいつは喋れてないって事に気付いて無いんじゃないか？」

アリアスはメルに向かってそう言い残すと、跨る美しい白竜へ「ククア、行こう」と意思を伝えワプル村へと向かって行つた。

泣き止んだりエルは、我関せずといった様子で呑気に木の実を食べている。

——喋れてない？俺が？

「ルアさん？私の言ってることは分かるんだよね？」

アリエスの言葉で僅かに不安を覚えたメルはルベルアにしがみついたまま、巨大な黄色い目をのぞき込み問いかけた。

『ボボボ！』

(分かる)

「うーん……どうしたら良いのかなー。このままじゃ大きすぎて、建物とか壊しちゃうから村にも浮遊城に入れないし」

ブツブツと呟きながら真剣に考えるメル、俺は解決策を探るでもなく、目の前で悩むメルの様子を観察していた。

ちよつと見なかったただけでずいぶん成長したなあ、元々可愛いかったけど、さらに可愛くなってるし。

女の子は父親に似やすいと聞いた事があるけど、メルはエリス似で良かったよ。暫く無言で悩んでいたメルから、*「あつ」*という声が漏れる。

「そっだ、ルアさん。沢山、たあーつくさん息を吸ってみて？」

メルが一生懸命悩んだ末に出した答えだが、俺と大差ない思考回路だ。

うーむ、それはさつき試したし、息を吸ってもダメだと思うなあ。

——とは思いつつも、また怒られるのが嫌なので、メルの言うことを聞いておく。

俺は巨大な体を大きくへこませ、それと同時に全力で空気を吸い始めた。

スウウウウウー！！ズウアアアアアア！！ズズウゴゴゴゴ！！

辺りには、とんでもない轟音が響き渡っている。

やがて俺に吸い込まれる空気が、まるで竜巻のように渦となってゆく。

シュゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

——シュポッ！シュポポッ！！

うっ、小鳥を三羽吸い込んだしまった。

一部始終を脇で見たりエルだが、吸い込まれてしまった小鳥の姿を目の当たりに

した事で、恐怖を感じ、吸い込まれまいと必死に木にしがみついた。

ルベルアの肩にしがみついているメルは顔の皮はブルブルと波打っている。

「ヒイヒイヒイ！や、やりすぎヒイヒイ！」

——シュポンツ！！

あつ。

うっかりメルを吸い込んでしまった俺は、慌てて息を吸うのを止めた。

空気を吸うのを止めた俺の口からは、無事に小鳥とメルが出てきたが、酔っぱらいのようにフラフラしている。

俺がもの凄く怒られたのは言うまでも無いだろう。

しかし、莫大な量の吸気を行ったからなのか、大きな影の体に力が満ち始める。体が巨大になっていた分、超大量の魔素が必要だったということなのだろうか。

ググ……！グググ……！！

巨大な体が音を上げながら引き締まっていく！

『ウオオオオオオオ！』

『ツプハア！戻っ…たあー！』

俺の体は元の大きさに戻り、いや、以前よりも引き締まっている。

『メル、今度は俺の言葉が分かるか？』 恐る恐る聞くルベルア。

「うん…、うん！分かるよ！ルアさん!!」 メルは顔を綻ばせて答える。

「えーと、この人…この悪魔さんがルベルアさんだったのね？本当に居たんですねえ」

ボサボサになった髪を手櫛で整えながら言うリエル。

「あつ、うん！そうだよ！これがルアさんだよ！」

答えるメルも髪がボサボサである。

竜巻にでも巻き込まれたのかな。

あ、いやスマン。反省してます。

俺はメルを持ち上げ、ふわりと浮き上がると、リエルの所へ飛んで行き、

『リエルにも迷惑かけて、悪かったな！こんな姿だけど宜しく頼むよ！』

そう言いながら、頭の角をポリポリと掻いた。

「はい！こちらこそ宜しくお願ひします！」

リエルは可愛らしい笑顔を見せて、90°。腰を曲げてお辞儀をした。

凄く深いお辞儀だな！意外と真面目な娘なのかな？とても良い子だ。

「じゃあ、村に行こっか！皆が心配してるかもしれないしさ！リエルもルアさんに乗って！」

俺の背に乗ったメルが「良いよ」と手招きをすると、リエルが木の枝から飛び乗ってきた。

美少女二人を背に乗せるなんて、夢のようじゃないか！

ムフフ…。

『じゃあ行くぞ、適当に掴まってくれ』

と言っても村はすぐそこなんだけどな。

フワアッ！… —— ビュンツ！

村では俺……………、メルへの帰りを待っている村人達が中央広場に集まっており、そこにはアリエス達の姿もあった。

スィーーン、スタツ！

メルとリエルは軽やかに広場の地面に降り立ち、それをモルドーとエリスが出迎えた。

「メル！一ヶ月振りじゃないか！もつと帰って来てお父さん達に顔を見せてくれよ！」

モルドーが興奮気味にメルへと近づく。

モルドーの調子は変わっていない。が、少しだけ老けたか？

「お帰りなさい、メルちゃん！リエルちゃんも元気そうね！んもうつ、髪の毛ボサボサじゃない！女の子なんだからもつと髪をとかなきゃ、せつかく可愛いんだからね。ふふ」

エリスは笑いながらメルの髪を手でとかした。

エリスの様子は相変わらずだな、まだまだ若いお母さんだ。

この夫婦、少し見ないうちに以前よりもモルドーとエリスの釣り合いが取れていない気がする。やっぱりモルドーは老けたか？

天使族と話していた村長のジジイもメルの元へ歩いてきた。

「メルよ、調子はどうか？腕は上がったかの？」

村長のジジイはメルの体つきを見ながら染々と聞く。

変な目付きで見やがって、このエロジジイめ！

しかし、皆がメルを囲ってわいわいするばかりで、俺にはあまり反応が無い。

俺とて、こんな見た目だから期待してた訳じゃないけど、村人のあまりにも薄い反応に少し寂しさを覚えた。

『なあ、メル。ワプル村のみんなには俺が見えていないのかな？』

しかし、それに答えたのはメルでは無かった。

「いんや、おぬしの事は見えておるよ。話しかけて良いものか迷っておったが、ミハエル殿から聞いておりましたでな。長く姿が見えないとは聞いておりましたが、戻ってきたのですな？」

村長のジジイは改まった口調で俺の言葉に答え、気になっていたであろう事を尋ねてきた。

村長のジジイは一体どこまで知っているんだ？

戻ってきたのですな？ つてことはつまり使い魔うんぬんって話の事か？ ……えつと。考える俺の様子から察してくれたのか、メルが村長のジジイの言葉に付け足した。

「うん！ ミハエル様の使い魔が居なくなつてしまつたから、代わりにミハエル様の友人が私の守護者になつてくれたんだけど、やつと用事が終わつて来てくれたの！」

メルが俺の方をチラチラと見ながら説明口調で話す。

その不自然なメルの口調に、村長のジジイは少し首をかしげる。

「うん？ メルに聞いた訳ではないのじゃが…。これからはメルを守ってくれると言うのなら有難い話ですじゃ。 ……しかし、天使族の王であるミハエル様の友人にしては悪… ……ゴホッソ」

ジジイ、最後に何を言いかけたんだ。

ともあれ、メルと村長のジジイのやり取りで、大体の自分の立ち位置を推測することができた。



つまり、一度姿と名前さえ認識してもらえば、それ以上は騒ぎになら無いように根回ししておいてくれたということか。

ミハエル、気が利くじゃないか。

確かに、そういう話なら俺とメルと一緒に行動しているのも不思議じゃなくなる。

ワプル村やメルの事を守ってくれてたし、俺が帰って来たときの為に根回しをしてくれてたり、色々やってくれてたとは……。

浮遊城にもお礼に行かないと、だな！

とにかく今日は、戻ってきた世界をゆっくり噛み締めるとするか。



俺がミハエルの助けに心の中で感謝していると、一人の女性がメルに近づいてきた。

「お帰りなさい、メル。前にあげたローブ、そろそろボロボロになる頃だと思って新しくショートローブを作っておいたのよ。是非持つて行って」

女性はしつとりとした喋りでメルに手作りのローブを手渡す。

緑の髪に伊達眼鏡。口元のホクロがセクシーな女性が……って、ミルザじゃないか。

ミルザは全然変わってないな！

お礼のお辞儀をしたメルは、手渡されたローブを広げた。

「わあ……このローブ凄く可愛いっ、ありがとうミルザさん!! 大切に着るね!」

ミルザからもらったローブをギュッと抱き締めながら大喜びしている笑顔の可愛い……。

折角声が聞こえるようになったんだし、俺もミルザと話したいな。

挨拶でもしとくか、生まれた時からの顔馴染みだしな、クク。
後ろから近付いて“だくれだ！”でもしてやろう。

一方的ではあるが、生まれた瞬間から知っていたミルザに、初めて姿と声を知つても
らせる事を“わくわく”しながら、俺は定番の悪戯を仕掛けた。

スイーン……。

『だあく……』

『れ』

——ポインツ！

あれ？この柔らかい感触は……。

「ツキヤアーーーーーッ!!」

振り向いたミルザは顔を赤くし、俺に向かって右手を大きく振りかぶり

——ピッタアアアン!!

「この！変態!!」

こうして俺は無事ミルザに嫌われたのだった。

#25 言えなかつた言葉。伝えられた想イ。

ピチュン…ピチュン…ピイ、ピイ、ピチチチ…!

モンスターが一掃されたワプル村では可愛い小鳥たちが気持ち良さそうに唄つ——
『ぬあんだつてえええええ!』

——バサバサツ!

喉かな村に何者かの裏返つた声が響き渡る。



ワプル村の南側・小高い丘に数本の木が立っているだけの場所

ここはメルが家の外へ出られるようになってから、人目を気にせず俺と話すために良く来た場所だ。

昨日、メルと再開を果たした後には、村人や天使族達との挨拶が忙しくて話す時間が無かつた。ということで、今日は朝早くからこの場所へやってきたのだけど、話の中で俺が驚く事実が明かされた。

何故かりエルの姿もあるけど、リエルに気を使う必要は無さそうだ。というの、メルは俺の居ない間、リエルに色々相談していたみたいで、メルが転生者だということも俺との関係も全て知っているんだとか。

メルと俺の「秘密共有者」みたいなものね。

それで何故俺が驚いていたのかというと……。

『ほ、本当にあれから八年も経っているのか?』

まだ信じられない俺は改めてメルの姿を見る。

確かに皆の雰囲気結構変わったかなとは思ったけど、あんなに小さかったメルもなんか凄く身長伸びたな〜とか、村長のジジイのシワも増えたな〜とか……。

けど、八年も経っていたなんて!!

啞然とする俺の反応を流してメルは話を続けた。

「うん、まさか元の世界に戻されてリハビリしてたなんて……でも、生きててくれて良かった!でもそのルアさんの元の体は別の人になっちゃったんだよね?」

メルは顎に手を添えたり、腰に手を当てたりしながらその事について考え込む。

リエルは聞き覚えの無い単語に不思議そうな顔をしながらも、口を挟むこと無く、大きなポケットから木の実を取り出し食べている。

『ああ、バースの弟のマドカ……って言っても覚えてないんだっけか。その少年に譲ったんだ。自分で決めたことだから気にしなくても良いぞ』

マドカの言った通り、ワプル村でマドカの事を覚えている奴は一人も居なかった。

俺の脳裏には元の世界に戻っていた時の事が思い浮かんだ。

◆
// 田^た淵^{ぶち}芽^め瑠^る //

彼女の話を持ち出すとメルがまた辛い事を思い出すかもしれない。たしか、元々の歳は17才だったよな。

この世界でのメルも既に15歳だし、

これだけ多くの愛を受けている今のメルなら大丈夫か。

よし、一応伝えておこう。

◆

『なあ、メル。俺、自分の事を調べていた時にさ、向こうでの芽^メ瑠^ルを見つけたんだ。多分、間違いないと思う』

俺の言葉にピクツと動揺を見せたメル、綺麗なオッドアイが分かりやすく泳ぐ。

「あ……いや……。隠してた訳じゃ………」

『いや、責めるとかじゃ無くてさ。俺、あつちの世界でメルを助けられなかった事が気がりだったんだけど、メルも死んだ訳じゃ無かったんだよ』

動揺するメルの言葉を遮り、俺は続けた。

「……ルアさん。……怒ってるんじゃないの……う？だって、私の所為でルアさんは……」

メルの手が小さく震えだす。

木の実を食べているリエルだが、メルの様子の変化を察して、噛むのを忘れて木の実を頬張り続けている。

きつとメルからの相談に俺この前の世事に関する事もあつたのだろう、真剣な眼差しで話の行方を追っているが、頬はリスの様にパンパンだ。

どう返して良いのか分からず困惑するメル、その言葉を待たずに話を進めた。

『いや、だからそういうんじゃないよ。俺さ、芽瑠メが死んだんじゃないじゃなくて、神隠しでこつちの世界に来たつて分かった時、嬉しくて泣いたんだぜ？』

「ほ……もがつか……じゃ、ふ」

リエルが何か言った。けどゴメン、全然聞き取れないぞ。

あと……口から二個、木の実が落ちたよ。

「ルアさん、ごめんなさい！私、本当はルアさんがあの時に助けてくれようとした男の人だつて分かつてたの！何度も謝ろうと思つただけと言えなくて！本当にごめんなさいっ！」

ようやく言葉を口にしたメルが、泣きながら俺にしがみついてきた。慣れない状況に不謹慎ながらもドキドキする。

「も……も……んが……んぐ……んぐっ!!」

リエルが心配そうな眼をして駆け寄り、メルの背中をさすつた。何かを言おうとする度に、口からポロリと落ちる木の実。

ちよつと雰囲気壊れるからじつとしててくれないかな。

『謝ることなんてないぞ。俺はこの世界に来て、お前の相棒になれてさ。毎日がすげえ楽しいと思えたんだから』

俺はそう伝え、泣いているメルを撫でた。

「う…………ぐすつ。ルアさんには…………ぐすつ…………助けられてばかりだね…………。ずず…………でも…………私…………この世界に来たとき…………ルアさんが…………一緒に居てくれて心強かったの…………！本当に…………ありがとう…………！」

メルは涙を拭い、ぐしゃぐしゃになった顔を上げると、今できる中での最高の笑顔を見せてくれた。

馬鹿だなあ…………。俺だって救われてるんだよ…………。

『メルもありがとうな。もう一度お前の側に来たかったから、人間やめて悪魔に戻ったんだぜ？だからもう泣くなよ。やっぱり笑顔の方が可愛いんだからさ』

こんなに素直な悪魔など、他には居ないだろう…………。

クツサー！恥ずかしー！！またやつちまった！！

こんなん、他の奴に聞かれたら…………、居たー！

横でアホみたいにモグモグしてる奴、居たーっ！

「……………モグ……………モグモグ……………。コキユツン……………」

リエルは無表情で俺を見ながらモグモグしている。

無表情はやめなさい、無表情は！

「人間をやめて悪魔に？という事ですかるベルアさん!?」

——ふあっ!?

突然、俺達三人の背後から、細身で背が高い男が話しかけてきた。

驚いた俺は思わず声を張り上げ問いかけた。

『なんなんだねっ！君オミは?!』

「あつ、いきなり失礼しました。僕はガリバーと言う者でワプル村で雑貨屋をやっております」

男は「ハッ」^ッとして名乗ると、小さくお辞儀した。

ガリバー……。ガリガリガリバーか！

ってかコイツの名前、ガリバーだったのか。

ガリガリガリバー、略してガリバーとか言ってたけど、普通にガリバーだったのか。って、ガリガリしすぎてややこしいわ！

相手がガリガリガリバーだと分かった俺は、聞かれた内容を誤魔化すことに決めた。

そこには一切の迷いも罪悪感も存在しない。

『ガリバー、さつき聞いたことは皆には内緒にしてくれないか？実は俺は元々、人間の英雄だったんだが悪魔王を倒したときに呪われてしまつてな、それで今の姿になったというわけさ』

俺は遠い昔を見るような眼でガリガリガリバーに語る。

我ながら、なかなかの演技力だと思う。

「そ、そうだったんですか!!あの古の英雄とこうして話せるなんて……光栄です!!」

ガリバーは膝を付き、眼をキラキラさせた。

ガリガリガリバーは相変わらず騙されやすいんだな。

スマンな、本当は英雄なんかじゃなくてただの建築作業員なんだよ。

あつさり誤魔化すことに成功した俺はガリガリガリバーに尋ねた。

『それで、どうしてここへ?』

聞かれたガリガリガリバーが「よくぞ聞いてくれました!」といった様子で身を乗り出して喋り出す。

「はい、村の自警団が見張っていたところ、遠くからこちらへ向かうホーンバードやブルームヘッドの群れを見つけたんです!」

興奮するガリガリガリバーが唾を飛ばしながら答えた。

なつ、緊急事態なら早く言えよ!!

隣で話を聞いていたメルとリエルも慌てて立ち上がり、小さな草が付いた服を雑に払う。

「ルアさん!リエル!急ごう!」

置いていたショートソードを身に付けたメルは、まだ少し涙の跡が残る顔を一叩きし、村の中心部を指差した。

「私はドラゴンになる?」

木の实を食べ終えたリエルが聞く。

「ううん、リエルは本職で良いよ!」

『本職?リエルも剣士か?』

俺は耳(的な感覚)を向けながらも、二人が乗りやすいように背を下げて待つ。

「違うよ、リエルはソーサラーなんだよ!ふふ、凄いでしょ!」

俺の背に跨がりながら、何故か自慢気に言うメル。

「まだ、少しの魔法しか使えませんが」

メルがポンポンと俺の背を叩き手招すると、リエルも遠慮がちに跨がり、ポツリと呟いた。

『よし!行くか!!俺と合わさってからがメルの全力なんだからよ、皆の度肝を抜いてやろうぜ!』

「うんっ!」

「頑張つてね、メル」

フワアツ——ビュンツ!

メルとリエルを乗せたルベルアは村の自警団と合流するべく颯爽と飛び立っていつ

た。

置いていかれて寂しそうな男の視線を受けながら……。